HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	NBLT（ネットワーク活用の言語教育）のための中国語学習支援サイトの構築 ： 日本と中国の高校生間の交流型学習者コミュニティー形成
Author(s)	杉江, 聡子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(国際広報メディア)
Issue Date	2011-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47301
Type	master thesis
File Information	sugie.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成２２年度修士論文

NBLT（ネットワーク活用の言語教育）のための中国語学習支援サイトの構築

―日本と中国の高校生間の交流型学習者コミュニティー形成―

国際広報メディア･観光学院

国際広報メディア専攻

氏　　名　　杉 江　聡 子

序章

本研究は、日本国内の高校中国語教育における NBLT（Network-Based Language Teaching）（Warschauer & Kern, 2000）導入の効果を探索することを課題とし、日本の高校で第二外国語として中国語を学ぶ学習者を対象に、日本人と中国人の高校生どうしのインタラクション（意味交渉）のための交流型コンテンツを主とする中国語学習者コミュニティーサイトを構築し、授業を実践し、授業中の観察及び学習者に対するオンラインアンケートの結果を分析、考察する。本研究の目的は、NBLT による中国語教育の導入が、高校の中国語学習者の ICT 活用技能の向上（パソコンで中国語を読み書きし、インターネットを活用して関連情報の収集や問題解決に取り組む)、意識の変化（気付き)、学習意欲（動機付け）に与える影響を調査し、現状の課題と今後の展望を探索することにより、日本の高校中国語教育における ICT 活用のコミュニケーション型授業の展開を支援、促進することにある。

研究の背景

日本国内の大学を中心とした教育機関において、英語に次ぐ第二外国語としての中国語教育の現場では、多くの場合、伝統的な教授法が中心である。即ち、教師主導で、紙の教科書及びプリント等の補助教材を用い、語彙、発音、文法といった言語的知識や、伝統行事、風俗習慣等の文化的側面を解説し、学習者は受動的にそれらをインプットし、暗記して、規則に従い、文法的に正しい文を生産したり、断片的な知識を回答したりする。いわゆる「パターンプラクティス」を繰り返して宣言的知識を刷り込み、刺激に対する反応の高速化、自動化を促進し、手続的知識へ移行させるための訓練を行なう。1960～1970 年代に第二言語習得（SLA）の分野で盛んに導入されたオーディオリンガル・メソッドの手法が踏襲されていると言える。これは、学校の教室環境、多数の学習者、短時間という物理的な制限下において、第二外国語の「習得」を、「学習した知識項目に関する記憶の定着」及び「言語的インプット（刺激）に対する意味理解とその言語化及び言語的アウトプット（反応）の自動化」と考えれば、必要かつ効率的な学習・教育方法の 1 つであろう。しかし、外国語学習の目的は言語的知識の習得のみではない。Hymes（1967）によれば、「伝達能力（Communicative competence)」には、「正確な言語行為」、「適切な言語行為についての知識」、「コミュニケーションの目的との関係における効果的な言語行為」についての知識が含まれ、言語運用には、「文法的に可能か」、「実際に可能か」、「適切か」、「実際に生じるか」の 4 つの側面を知っている必要がある。また、Canale & Swain（1980)、Canale（1983）では、コミュニケーション能力の構成モデルを、「文法能力（Grammatical Competence)」、「社会言語能力（Sociolinguistic Competence)」、「談話能力（Discourse Competence)」、「方略的能力（Strategic Competence)」の枠組みに分類している。日本の外国語教育の現場で最重要視されているのは、このうち「正確な言語行為」、「文法的に可能か」についての知識や、「文法能力」に相当する言語的知識である。これらはコミュニケーション能力を構成する重要な基盤であり、学習者がその言語を用いてよりスムーズにコミュニケーションを取るためには、確実に備えていることが望ましい。しかし、必ずしも学習者全員の外国語学習の目的そのものではない。複雑化する現代社会の様相を反映し、外国語学習における学習者の目的も多様化しているが、外国語を用いてコミュニケーションをする行為、あるいは話者ど

うしのインタラクションを通じて、相手を知り、自分を伝え、自己実現を実感し合い、何かしらの気づきや変化が発生することが外国語学習の醍醐味でもあり、実際にそのような学習者の声も多く耳にする。本研究で授業を実践した高校の学習者に対する中国語履修前アンケートの結果では、日本の高校生が第二外国語として中国語を選択する場合、その自己実現は、昨今の中国の経済発展の情勢を受けて、「仕事で活かしたい」、「(近い国なので)将来的に何かの役に立つかもしれない」、といった道具的動機付け (Gardner, 1968) (Lukmani, 1972) による内容も多く含まれていた。「中国語を使って中国人とコミュニケーションを取りたい」、更にその理由としては、「中国が発展しているので中国語ができると仕事で役立つ」という回答が多数を占めている。また、一部ではあるが、「中国語のテレビドラマやyoutube の動画を見たい」という、情報化社会ならではのインターネットやソフトメディアに対する関心を挙げた学生も見られた。

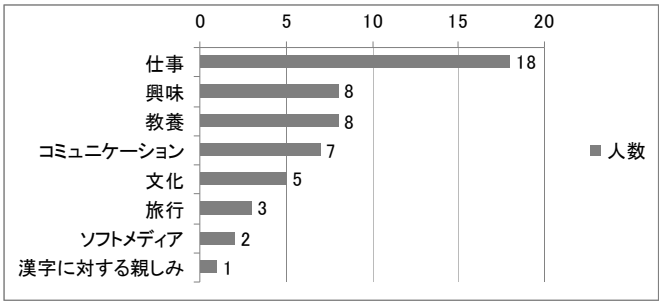


図 1　中国語を選択した学生に対する授業前アンケート結果（複数回答可、2010 年 5 月）
問い：なぜ中国語を勉強したいと思ったのですか？

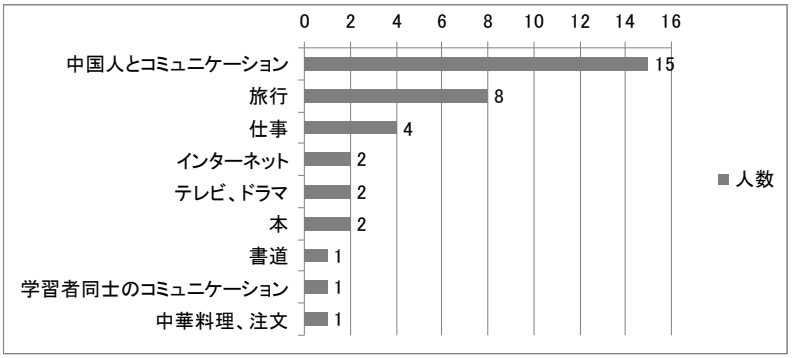


図 2　同上, 問い：どのような場面で中国語を使ってみたいですか？

中国語学習の目的が、「中国語を用いてコミュニケーションをとれるようになること」であるなら、学習の過程で、自分のアウトプットが相手に通じるのか、相手のアウトプットが理解できるのか、相手からのフィードバックを受け、学習者が「通じる／通じない」や「わかる／わからない」という自身の問題点を実感し、改善の工夫をし、相手にフィードバックを返すというインタラクションを実体験することが重要である。この時、インタラクションのプロセスは、学習者自身の属する現実社会と結び付いている必要がある。境（2008）はドイツ語の学習を例に、このような社会構成主義の考え方について、情報が学習者自身にとって「有意」な社会的活動を通じて「精緻化され、一般化され、再構成されていく過程こそが学習」であり、学習は個人の「単独行為」ではなく、「相互行為」によっ

て成立するとし、外国語学習についても同様に、「学習者にとって意味のあるコミュニケーション活動によってこそ言語知が獲得される」と述べている。中国語もドイツ語も、英語に次ぐ第二外国語としての地位は、「似た者同士」である。日本の社会において、中国語は第二言語（Chinese as a Second Language）ではなく、あくまでも、外国語（Chinese as a Foreign Language）であり、英語に次ぐ「第二」の外国語である。生活の中で中国語が必要不可欠という状況は今のところまだ見られず、中国語ができなければ進学や就職ができないとか、教育レベルや社会階層が低いと見なされるような差し迫った要求もない。しかし、教育界におけるこのような中国語の位置付けをもってしても、中国が急速な経済発展を遂げている現代の国際情勢の中で、第二外国語として中国語を学習する高校生たちは、中国語でコミュニケーションが取れるようになること、それによる将来の発展可能性を自覚している。

残念なことに、日本国内の学校教育の過程で中国語を学ぶ学習者は、母語話者と直接交流する機会がほとんどない。しかし現実には、社会の様々な場面において中国語によるコミュニケーションの機会が増加し、中国語が使える人材のニーズも急速に高まっている。中国だけでなく、アジア地域、世界各地の華人を中心とする中華文化圏の急成長により、将来的に中国語を母語又は公用語とする人々との交流が更に盛んになることが予想される。特に北海道は、2003 年以降、中国、台湾、香港、シンガポール、マレーシア等、中国語を公用語とする観光客数が急増している。街中ですれ違う外国人観光客の大部分が中華文化圏からの訪日旅行者であり、どこに行っても中国語（方言を含む）が聞こえるというのは、日常生活の中でも大いに実感されるところである。これは、国土交通省をはじめ関係省庁、民間団体、企業等が実施推進しているビジットジャパンキャンペーンの成果でもあり、2010 年 7 月からの中国人個人客向けビザ発給対象の拡大も後押しして、日常的に中国語を使う可能性、必要性が更に高まっていると言えよう。

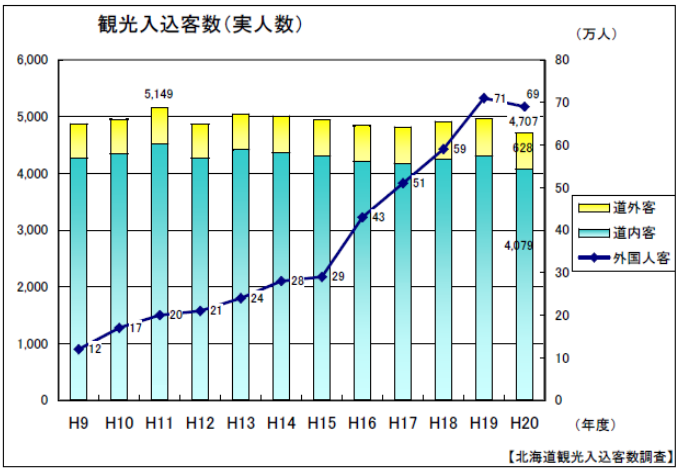


図 3　北海道観光入込客数調査

出典：北海道経済部観光局,「北海道観光の現況（平成 21 年 10 月）」, p.1

これを受けて、高校の中国語学習者も、実践的会話の機会、将来的に仕事で使える中国語の運用能力、職業上の実務に応用可能な技能の習得を求めている。また、国際的な視野を備えるためには、中国語学習の過程で、まずは知識として学んだ中国語を使って自分の気持ちや考えを自分の言葉で伝えられた時の喜びを感じ、更に実際のインタラクションを

通じてお互いの違いや共通点を知り、衝突や矛盾があれば解決すべく更にインタラクションを行い、その結果として、中国人の価値観や思考を知り、同時に日本人としてのアイデンティティを実感、再認識、確立できるようになることが重要である。

残念ながら、学校教育の過程における第二外国語としての中国語教育の現場では、教室内環境、学生の人数、授業時間数等の様々な条件に制限があり、学習者一人一人が十分にインタラクションに参加し、理解から習得までのプロセスをじっくり完成させられるようなコミュニケーション型の授業を実践することは困難である。英語教育を主とする SLA 研究の分野では、1970～1980 年代からコミュニカティブアプローチの重要性が注目されており、1990 年代以降はコミュニケーション型学習を通じて言語運用能力を伸ばすだけでなく、総合的なコミュニケーション能力の育成を重視した教授法あるいはメソッドが展開されている。Nunan（1991）では、コミュニカティブアプローチの特徴として、（1）学習者が学習言語による他者とのインタラクションを通じて学習することを重視する、（2）オーセンティックテキスト（実物教材）を導入する、（3）言語だけではなく学習のプロセスそのものに焦点を当てる機会を学習者に提供する、（4）学習者個人の経験を教室での学習にとっての重要な貢献として強化する、（5）教室での言語学習を教室外での言語の活性化（流暢な運用）に結びつけること、が提示されている。

1. An emphasis on learning to communicate through interaction in the target language
2. The introduction of authentic texts into the learning situation
3. The provision of opportunities for learners to focus, not only on language, but also on the learning process itself
4. An enhancement of the learner's own personal experiences as important contributing elements to classroom learning
5. An attempt to link classroom language learning with language activation outside the classroom

（Nunan, 1991, p. 279）

高校の第二外国語としての中国語の授業の中で、ICT 活用の中国語学習・教育を行い、教室の授業で学習した中国語を、同年代の中国人との直接交流を通じて運用し、母語話者の「オーセンティック」な言語運用に接する機会を持つこと、また、現実のインタラクションのプロセスにおいて、それぞれが様々な気付きや発見を得て、各自の学習方略の工夫をするようになることは、コミュニケーション能力を育成する学習・教育の手法として有効であると考えられる。

1990 年代以降、文部科学省等による教育情報化推進政策に伴い、英語を中心とする外国語教育分野においても情報化の普及が求められてきた。大学を主とする高等教育機関では、ICT 活用の外国語学習・教育に関わる実践的研究が多数実施されているが、初中等教育の第二外国語ではこのような実践はほとんど行われていない。先行研究によれば、ICT 活用の外国語教育は、主に自主学習支援システムと遠隔協調学習システムの 2 種類に分けられる。中国語教育における主な ICT 活用の授業実践としては、オンライン学習用教材公開コンテンツ及び学習項目の理解度・学習進捗度管理のための試験コンテンツを備えた e ラーニングサイト、大規模で総合的な LMS（Learning Management System）、ビデオ会議システムやビデオチャットを利用した直接コミュニケーション型授業、BBS や e-mail の活用がある。

このうち、学習者が求める実践的コミュニケーションを実現するには、遠隔協調学習システムを活用した同期的なコミュニケーション型の授業が望ましい。しかし、大規模なインフラ構築、システムの導入、関連機関各方面との提携協力が必要なプロジェクトには、相応のコスト、設備機器、技術、人材等が不可欠であり、地方の高校や小規模な外国語教育機関等において、少人数の教師とスタッフによる対応は困難である。しかし、現実的な課題はあるものの、ICT 活用の学習環境を利用した授業に対する学習者の反応は多くが肯定的であり、その学習効果が報告されている。母語話者との直接のインタラクションがあることで、自分自身の課題に対する気付き、コミュニケーションの楽しさ、相手を目の当たりにすることで、よい意味での競争心を抱いており（西堀, 2005-2008）、クラスメートや親しい先生相手にコミュニケーションをとる場合とは異なり、「本当のコミュニケーションの場」という緊張感を強く意識している（林, 2008）等の報告がなされている。これらはいずれも、外国語学習の過程における母語話者とのインタラクション経験が、外国語習得のための学習者どうしの働きかけによる足場作り（scaffolding）となり、有効に作用することを示している。高校中国語教育においても ICT 活用の授業は導入に値すると言えよう。

本研究では、学校内施設としてのパソコン教室及びネットワーク環境、教師個人（あるいは少人数のグループ）でも設計、構築、運用、保守に対応できるようなコスト、労力、時間の範囲を考慮し、日本の高校で中国語を学ぶ学習者を対象に、交流型の中国語学習支援サイト「中日学生交流網」を構築した。北海道大学情報基盤センターの UNIX サーバ上に、オープンソースの CMS ソフトウェア「Magic3」をインストールし、主なコンテンツは、高校の中国語学習者の学習歴に相応の語彙及び文法能力の程度に配慮しつつ、交流型授業というコンセプトを考慮し、(1)パソコンで中国語を使うための IME 設定方法とピンイン入力方法の説明及びピンイン入力練習問題、(2)フリーウェアの CGI プログラムを利用して高校生の身近な話題についての質問を設定した異文化比較投票、(3)中国語・日本語併記の BBS 交流の 3 つを中心に、ライティングによる中国と日本の高校生間の交流型授業を実践した。授業実践後には、学生による授業の評価として、中国と日本の高校生に対しオンラインアンケートを実施し、授業中の観察結果と合わせて、NBLT による交流型授業の効果を調査、分析した。

本研究に期待される成果としては、次のような積極的な効果が予想される。高校の第二外国語としての中国語で NBLT による授業を導入することにより、学習者がパソコンで中国語を読み書きできるようになる。中国の高校生と直接インタラクションを行い、「オーセンティック」な情報をやり取りすることにより、両国間の文化や価値観を比較し、意識の変化や気付きが起こり、相手国に対する興味・関心が高まる。BBS 交流による実践的な中国語の運用を通じて、各種学習方略の工夫が生まれ、中国語の学習意欲が向上する。また、高等教育機関以外での成果報告が少ない ICT 活用の中国語学習・教育について、高校中国語の授業実践に必要なツールや作業フローを示すことで、高校で中国語を担当する教師たちと共有可能な情報及び資料を提供し、今後の情報化に対応した中国語授業計画支援の一助となる。

目次

序章 1

第１章　外国語教育情報化の流れ 7

第２章　北海道高校中国語教育の情報化と課題 20

２.１　高校中国語教育の開講状況 20
２.２　高校中国語教員を取り巻く環境 22
２.３　北海道の高校中国語教育と ICT 活用の現状 23

第３章　高等教育における中国語教育情報化 31

３.１　日本における ICT 活用の中国語教育・学習研究 31
３.２　ICT 活用の中国語教育・学習のメリット・デメリット 41

第４章　中国語学習支援サイト構築 44

４.１　「中日学生交流網」構築の目的と概要 44
４.２　必要なシステムとソフトウェア 45
４.３　サイト構築の準備 45
４.４　コンテンツと特色 47
４.５　ユーザーと画面デザイン 48

第５章　NBLT による交流型中国語授業 50

５.１　授業実践校の紹介 50
５.２　中国語のクラス編成とパソコン環境 50
５.３　NBLT による交流型中国語授業の位置付け 51
５.４　授業実践の内容 53
５.４.１　３年生の授業実践 53
５.４.２　２年生の授業実践 60
５.５　学校紹介用コンテンツ 62

第６章　授業評価アンケート結果分析 64

６.１　授業評価オンラインアンケート概要 64
６.２　自習項目に関するアンケート 67
６.３　交流項目（異文化比較投票）に関するアンケート 69
６.４　交流項目（中文交流 BBS）に関するアンケート 73

あとがき 83

付録 85

参考文献 104

第１章　外国語教育情報化の流れ

21 世紀は、経済のグローバル化及び通信技術の急速な発展に伴い、国際化、情報化社会と呼ばれる。1990 年代半ば以降、Microsoft 社による Windows OS の市販が大きな契機となり、それ以前は一部の専門知識、技術を持った人々の特別なツールであったパソコンが、一般の人々にも広く利用されるようになった。その後、情報通信網の整備とブロードバンド回線サービスの拡大によって、インターネットや e メールの利用も爆発的な普及を遂げた（図 1.1）。過去 10 年間の推移を見ると、インターネットの普及率は、21.4%（2,706 万人）から 78.0%（9,408 万人）へと約 4 倍に増加している。ビジネスの分野ではもちろんのこと、家庭内での個人利用や教育・学習の場での活用も大幅に増加した。パソコンに限らず、携帯電話・スマートフォン、PHS 及び携帯情報端末（PDA）などのモバイル端末、ゲーム機・テレビ、Apple 社による iPad のようなタブレット型コンピュータ等、あらゆる通信機器からインターネットに接続できるようになり（図 1.2）、まさに、いつでも、どこでも、気軽に情報にアクセスできる情報化時代となっている。

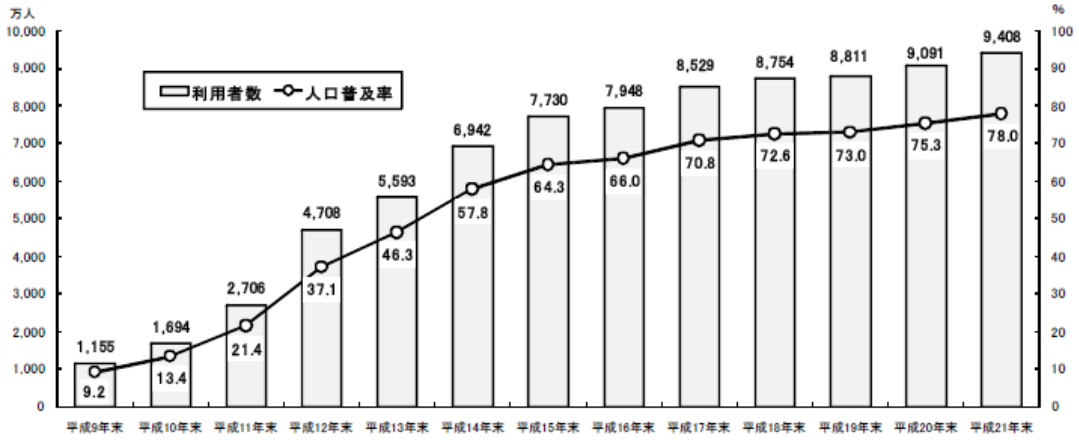


図 1.1　インターネット利用者数及び人口普及率の推移（個人）[1]

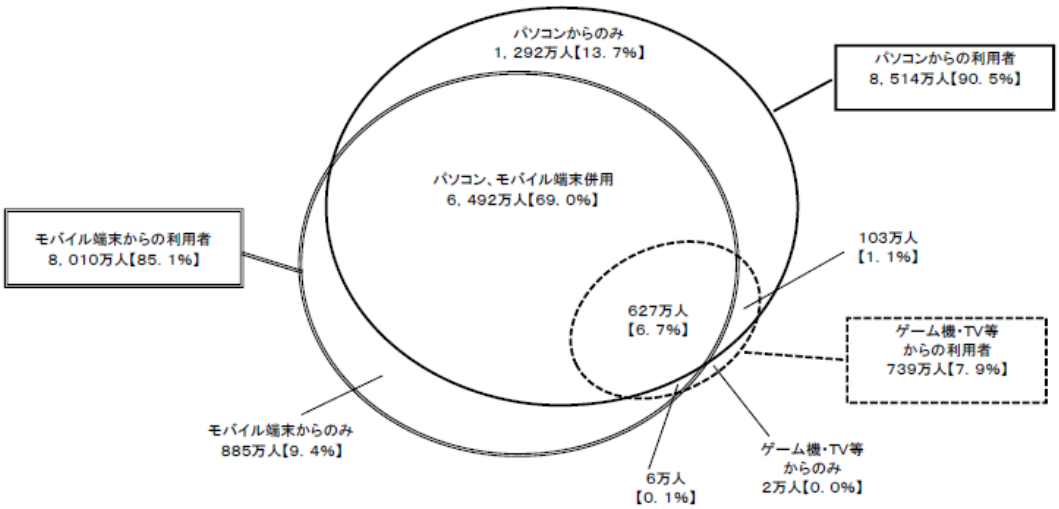


図 1.2　インターネット利用端末の種類（個人）（平成 21 年末）[1]

[1] 総務省（報道資料）『平成 21 年「通信利用動向調査」の結果』による。

このような時代の趨勢に伴い、2000 年頃から、ビジネスの世界を中心に、企業における人材育成のための教育・研修の手法として、e ラーニングが取り入れられるようになった。e ラーニングについては、明確で定着した定義はまだないが、「e ラーニング白書〈2008/2009 年版〉」によれば、狭義の e ラーニングとは、「WBT（Web Based Training）」と呼ばれるものを指す。形態ごとに、同期（オンデマンド）型と非同期型に分類され、Web ブラウザ、インターネット（又はイントラネット）上の情報、システム等を通じて教材等のコンテンツが配信される。現在では、WBT のみではなく、「他者からの最小限のサポートや介入で、誰でも容易にアクセス可能で必要な内容を即座に入手できるよう統合・整備された、業務遂行を支援する各種情報、ツール、システム」としての EPSS（Electronic Performance Support System）[2] や、「企業活動にかかわる個々の知識や知識資産を組織的に集結、共有することで効率を高めたり価値を生み出したりすること、及びその仕組み」としての KM（Knowledge Management）[3] 、「グループによる協調作業を支援するために、インターネット（又はイントラネット）を利用して情報共有やコミュニケーションの効率化をはかるソフトウェアやシステム」としてのグループウェア [4] を連携させる手法が普及してきている。広義の e ラーニングとは、衛星通信、ビデオ会議システム、CD や DVD 等の各種マルチメディア機器、モバイル機器（スマートフォンや iPad 等）、電子ゲーム機器（ニンテンドーDS やプレイステーション等）を活用した学習も含まれる（図 1.3）。

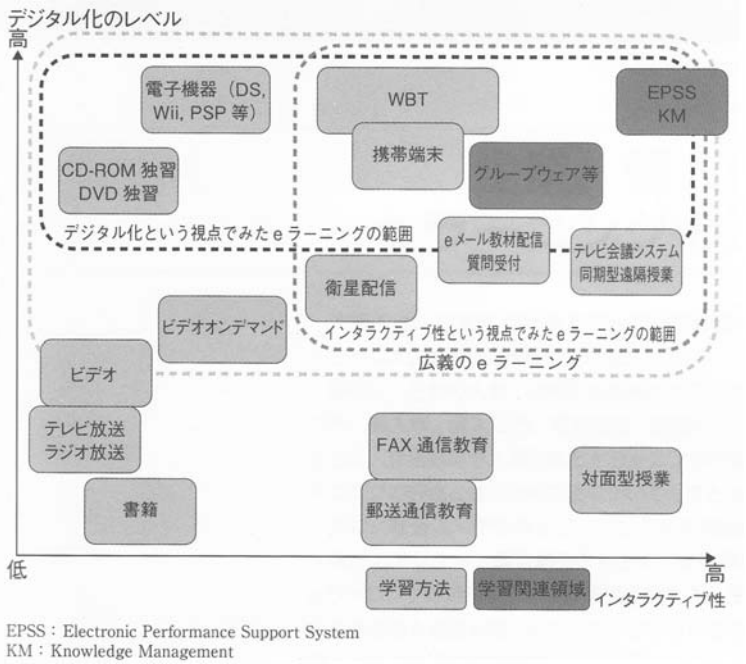


図 1.3　「インタラクティブ性」と「デジタル化」からみた e ラーニングの範囲と分類 [5]

[2] "an integrated electronic environment that is available to and easily accessible by each employee and is structured to provide immediate, individualized on-line access to the full range of information, software, guidance, advice and assistance, data, images, tools, and assessment and monitoring systems to permit job performance with minimal support and intervention by others." (Gery, 1989)

[3] 「ナレッジマネジメントとは、企業活動にかかわる個々の知識や知識資産を組織的に集結、共有することで効率を高めたり価値を生み出すこと、そして、そのための仕組みづくりを行うことである。」（紺野登）（http://www.happyworkplace.jp/words/knowledge-management）

[4] "in 1978 we coined the term "groupware" - the combination of intentionally chosen group processes and procedures plus the computer software to support them." (Peter&Trudy, 1978)

[5] 日本イーラーニングコンソシアム編,『e ラーニング白書〈2008/2009 年版〉』, 東京電機大学出版局, 2008,p.5.

商業界、産業界での人材育成や研修のための情報化の普及と同時に、教育・学習に関わるあらゆる方面での情報化が進められており、大学等の高等教育機関をはじめ、初等・中等教育の現場にも、情報化、IT 化推進の潮流が押し寄せつつある。

大学等の高等教育機関については、放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター（前・独立行政法人メディア教育開発センター, NIME）が、2005 年度（平成 17 年度）から毎年、e ラーニング等の ICT（Information and Communication Technology, 情報通信技術あるいは情報コミュニケーション技術）を活用した教育に関する調査を実施し、報告書を発行している。2008 年度の「e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書」によれば、「高等教育機関では教育の質保証が重要な課題となっているが、教育の質を高めるための ICT の活用が有効」であり、「ICT を活用した教育を実施することによって教育の質を向上させる点に関心が高まりつつある」としている。また、「教育内容の高度化・多様化の要請を踏まえた効果的・効率的な教育の必要性が高まっており、その教育手法として e ラーニング等の ICT を活用した教育の導入が進められている」とあり、インターネット等の ICT、マルチメディアツールを活用した遠隔教育や、ICT 活用教育の推進が重要な課題となっていることがわかる。ここでの「ICT 活用教育」とは、コンピュータやインターネット、モバイル端末等の情報コミュニケーション技術を活用した教育を指す。

同報告書の調査対象は、全国 1,218 の高等教育機関のうち、有効回答数 806 機関（回収率 66.4%）で、内訳は国立大学 73、公立大学 49、私立大学 378、短期大学 257、高等専門学校 52 となっている。ICT 活用教育の導入状況は、「導入している」「導入を予定している」「導入を検討している」の合計で 82.2%と大半を占めている。（図 1.4）

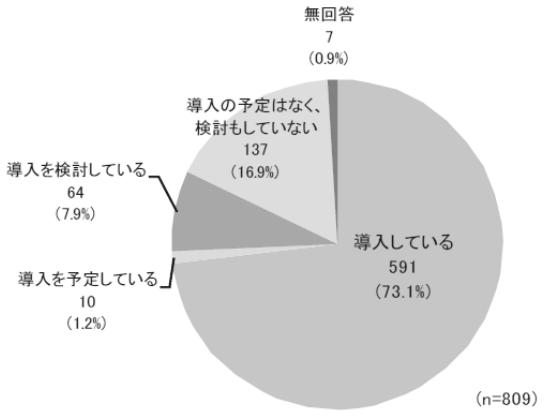


図 1.4　ICT 活用教育導入状況 [6]

現在の取組み状況及び今後の取り組み方針では、「対面授業と e ラーニングを組み合わせて（ブレンディド・ラーニングにより）実施」、「ICT 活用教育コンテンツ・コースの拡充」、「ICT 活用教育のコンテンツ・コースの質の向上」の順に多く、両者を比較すると、「ICT 活用教育の人材の育成」、「ICT 活用教育のための FD（ファカルティ・ディベロップメント）の実施」に対する注目度が高いことがわかる。（図 1.5）

[6] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』（独立行政法人メディア教育開発センター）, p.5

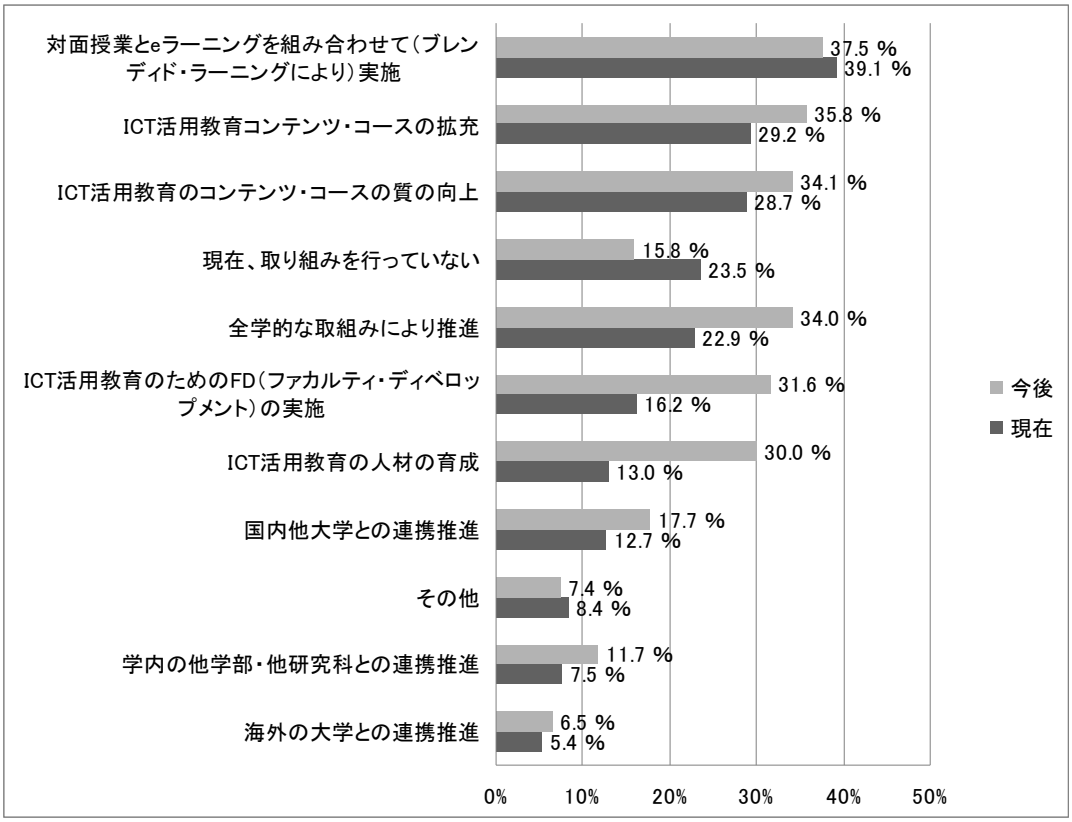


図 1.5　ICT 活用教育に対する取組み [7]

取り組み組織としては、「学内の一部の組織（情報教育センター、学部・学科等）で取り組んでいる」「組織的な対応ではなく、教職員が個人的に取り組んでいる」との回答が多く、組織全体としての取り組みの支援や連携が不足していることがうかがえる。

実際に、ICT 活用教育実施の課題についても、既に導入済みの機関では、「システムやコンテンツを作成、維持するための人員が不足していること」（58.9%）、「教員の ICT 活用教育に関するスキルが不十分であること」（51.9%）、「ｅラーニング講義（授業を含む）のシステム開発に関するノウハウが不十分であること」（45.2%）の順で多くなっている。ICT 活用教育を導入していないが、今後導入する予定、又は導入を検討している機関においても、導入にあたっての課題として、「システムやコンテンツを作成、維持するための人員が不足していること」（62.2%）、「教員の ICT 活用教育に関するスキルが不十分であること」（53.7%）「ｅラーニング講義（授業を含む）のシステム開発に関するノウハウが不十分であること」（50.0%）、「ICT 活用教育を導入するための予算が確保されていないこと」（46.3%）、「学内の組織的な協力体制を整備すること」（42.7%）、「ICT 活用教育の教育効果に対し、教職員の理解が不十分であること」（41 .5%）の順に多く、人員や予算不足だけではなく、ICT 活用教育の導入に見合った教育効果を得られるかどうか、費用対効果を懸念している部分も見られる（図 1.6）。

[7] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.9 を元に作成。

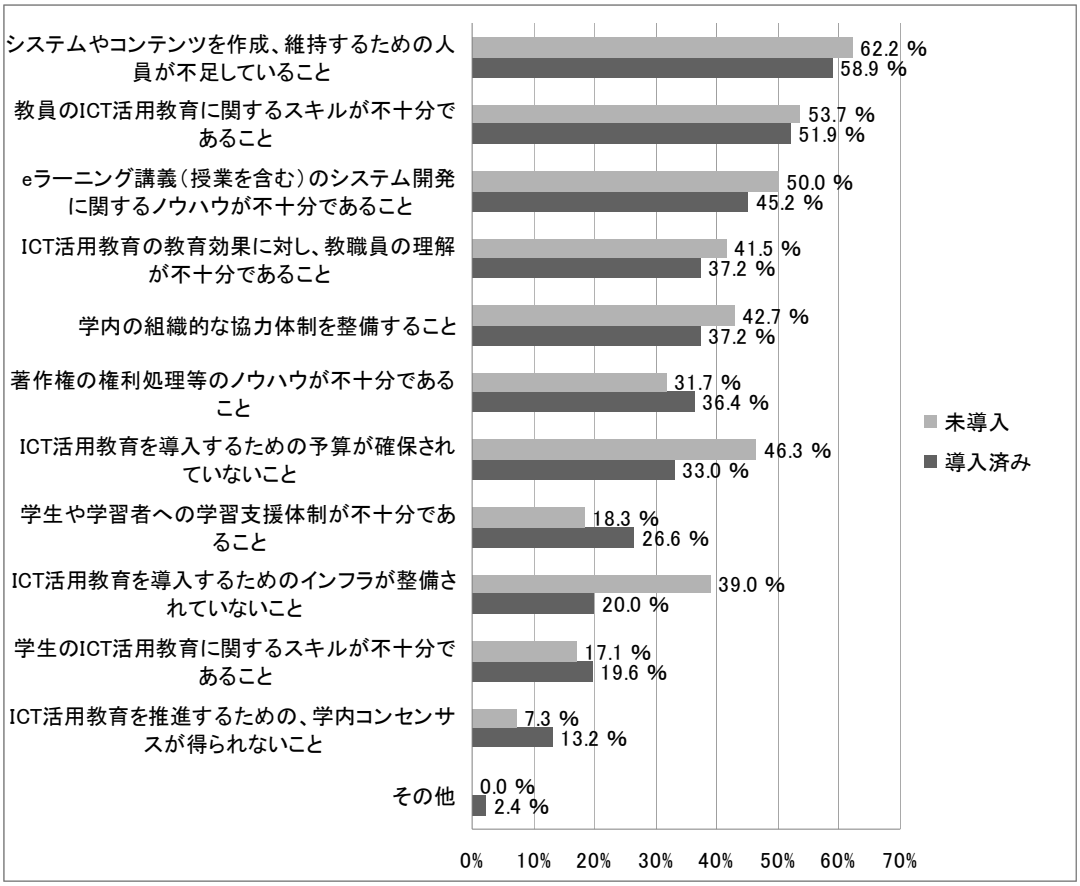


図 1.6　ICT 活用教育実施にあたっての課題 [8]

組織であれ、個人であれ、人的ネットワークを広げ、情報交流や意見交換を行い、時代のすう勢に合わせて柔軟に対応する姿勢が求められる。一部組織の閉鎖的な取り組みや、個人の努力に任せるというやり方には限界がある。学習者の声を直接受け取ることのできる現場の教師と、ICT 環境・設備投資等のバックアップを行うことのできる組織とが、互いに積極的な働きかけを通じ、トップダウンとボトムアップのバランスを探り、人材育成のサポートを得ながら、教育現場での実情と要求に応じながら、コンテンツの質と量の双方を充実させていかなければ、長期的・継続的な発展や展開を行うことは難しいであろう。ICT 活用教育の導入を予定または検討している機関を対象として、予定している取組み組織の形態について調査した結果は、「学内の一部の組織（情報教育センター、学部・学科等）で取り組む予定」（37.8%）に次いで、「学内で全学的に取り組む予定」（31.7%）との回答が多く、取り組み形態の改善を意識していることがわかる。

[8] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.18, p.21 を元に作成。

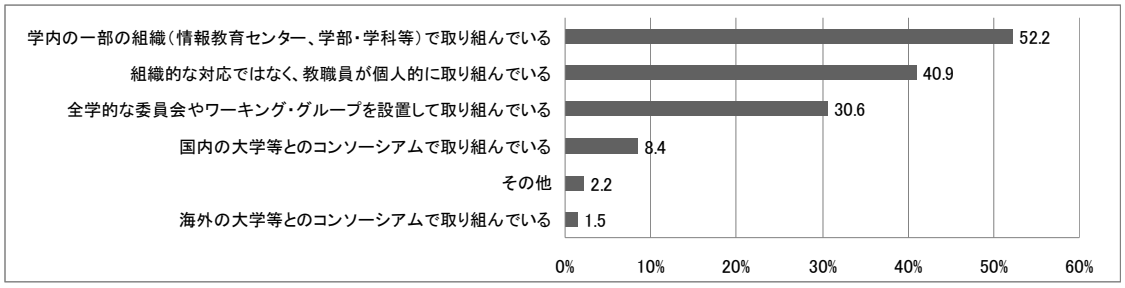


図 1.7　ICT 活用教育の取組み形態 [9]

しかしながら、ICT を活用した教員の教育力向上のためのファカルティ・ディベロップメント（FD）実施状況については、「実施している」と回答した機関は 23.4%と、四分の一に満たない（図 1.8）。ICT 技術の発展とユーザーの急速な増加率を考えると、ICT 活用技能を備えた人材育成に関する支援策の実施と普及は切迫した急務であると言える。

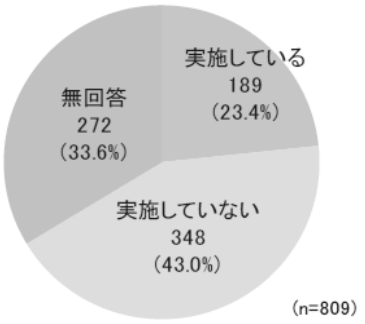


図 1.8　ICT を活用した教員の教育力向上のための FD 実施状況 [10]

ICT 活用教育導入機関を対象にした調査結果によると、ICT 活用教育実施の目的については、「学生にとって効果的な教育を実施するため」（81.6%）、「教育を効率的に実施するため」（60.7%）、「多様な学習形態へ対応するため」（60.4%）の順に多く、効果的な教の実施や学習者のニーズの多様化への対応策として、ICT 活用教育を導入していることがわかる。ICT 活用教育実施のメリットについては、「効果的な教育の実施が可能となった」（52.5%）、「いつでもどこでも学習ができるようになった」（48.7%）、「学生のニーズに応じた最適な学習をすることができるようになった」（36.2%）の順に多く、導入目的に合致した一定の成果を達成していることがうかがえる（図 1.9）。

[9] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.12 を元に作成。
[10] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.38 を元に作成。

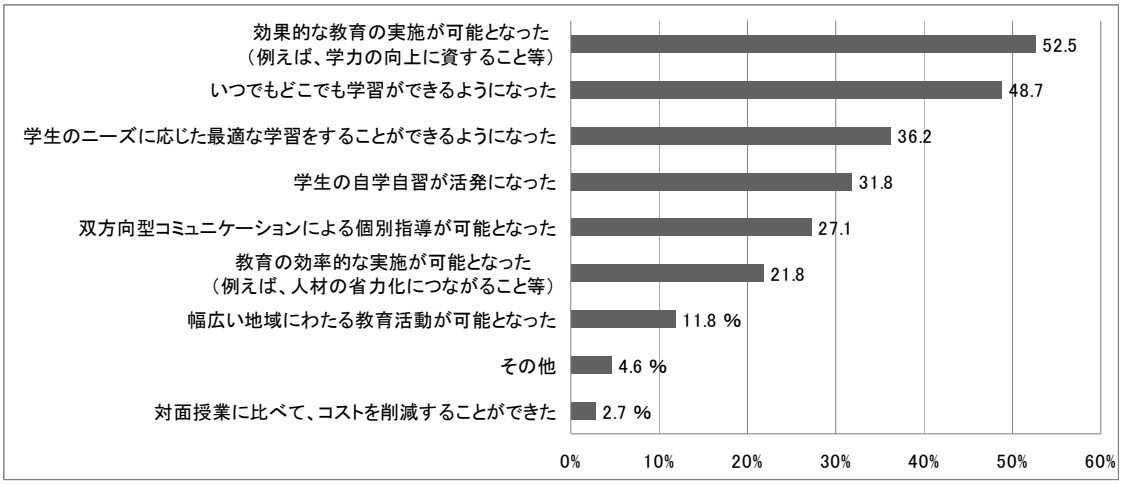


図 1.9　ICT 活用教育の導入メリット [11]

ICT 活用教育として主に実施されているのは、「インターネット等を用いた遠隔教育」と「LMS（Learning Management System）」である。同報告書では、両者を次のように定義している。

・インターネット等を用いた遠隔教育（同報告書, p.46）

遠隔地にいる学習者を対象として教員がリアルタイムで授業・講義を行う場合と、オンデマンドにより学習者が望む時間に学習できる場合があり、授業・講義を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所において履修することができる、インターネットとそれに関連した情報コミュニケーション技術を利用した教育を指す。

・LMS（同報告書, p.48）

ｅラーニングを運用する際の基盤となるシステムで、学習者登録・学習履歴の管理、学習者の進捗管理、成績管理、学習支援機能、学習者と教授者とのコミュニケーション機能等を備えたものを指す。

インターネット等を用いた遠隔教育については、過去 5 年間の推移から明らかなように、導入事例が急増し、特に国立大学での導入が大幅に伸びている（図 1.10）。LMS については、特に高等専門学校における利用率が高く、その他の教育機関でも徐々に増加している（図 1.11）。

[11] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.16 を元に作成。

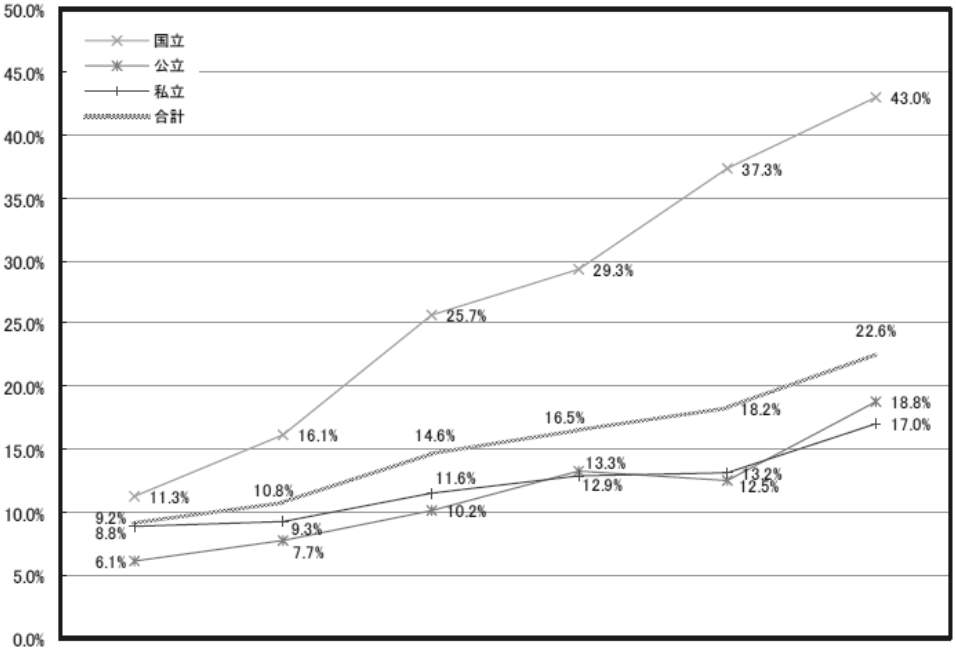


図 1.10　大学学部・研究科におけるインターネット等を用いた遠隔教育実施割合の推移（平成 15 年度～平成 20 年度）[12]

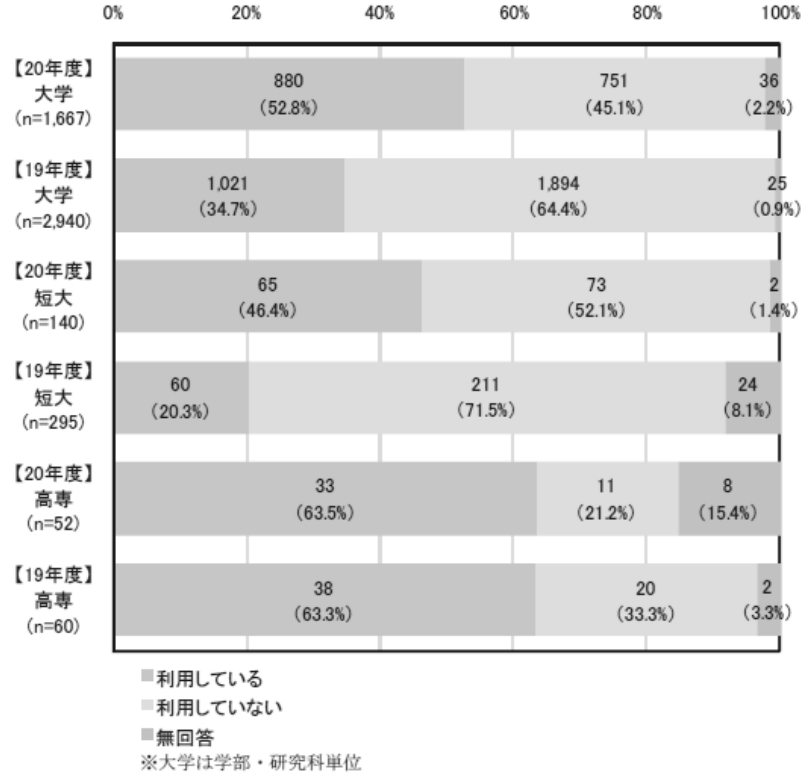


図 1.11　LMS 利用状況（平成 19 年度と 20 年度の比較）[13]

[12] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.47.
[13] 『e ラーニング等の ICT を活用した教育に関する調査報告書（2008 年度）』, p.48.

以上のように、インターネット等を用いた遠隔教育や LMS の導入は学校教育における ICT 活用教育として重視されており、その導入数も増加の一途をたどっている。この背景には、国家戦略としての情報化教育推進がある。

1999 年（平成 11 年）12 月、内閣総理大臣により、新しい千年紀を迎えるに当たっての国家プロジェクトが決定された。このうち、「教育の情報化」プロジェクトにおいては、2001 年度までにすべての公立小中高等学校、盲・ろう・養護学校（約 39,700 校）がインターネットに接続できるようにする。また 2005 年度までに、全ての公立小中高等学校等が、各学級の授業においてコンピュータを活用できる環境の整備を行えるようにすることが定められた。

また、内閣府は、「国の情報通信技術（IT）の活用により世界的規模で生じている急激かつ大幅な社会経済構造の変化に適確に対応することの緊要性にかんがみ、高度情報通信ネットワーク社会の形成に関する施策を迅速かつ重点的に推進する」ことを目標に、2001 年（平成 13 年）１月に「高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部（IT 本部)」を設置した。その後、「e-Japan 戦略」「e-Japan 重点計画」「IT 政策パッケージ」「IT 新改革戦略 策パッケージ」「IT による地域活性化等緊急プログラム」「IT 政策ロードマップ」「オンライン利用拡大行動計画」「デジタル新時代に向けた新たな戦略～三か年緊急プラン～」「i-Japan 戦略」と、様々な戦略的政策を段階的に制定し、情報化社会に対応するための取り組みを図っている（表 1.1)。なお、各政策の詳細は末尾の付録 1.1 に掲載している。

表 1.1　IT 戦略本部による情報化政策推進の沿革

1994 年 8 月	高度情報通信社会推進本部を内閣に設置
2000 年 7 月	情報通信技術戦略本部を内閣に設置／IT 戦略会議を設置
2000 年 11 月	IT 基本戦略を決定
2000 年 11 月	高度情報通信ネットワーク社会形成基本法（IT 基本法）が成立
2001 年 1 月	高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部（IT 戦略本部）を内閣に設置
2001 年 1 月	e-Japan 戦略を決定
2001 年 3 月	e-Japan 重点計画を決定
2001 年 6 月	e-Japan2002 プログラムを決定
2001 年 11 月	「e-Japan 重点計画、e-Japan2002 プログラムの加速・前倒し」 ～IT 関連構造改革工程表（最終とりまとめ）～
2001 年 12 月	IT 分野の規制改革の方向性（IT 関連規制改革専門調査会報告）
2002 年 6 月	e-Japan 重点計画-2002 を決定
2003 年 7 月	e-Japan 戦略 II を決定
2003 年 8 月	e-Japan 重点計画-2003
2004 年 2 月	e-Japan 戦略Ⅱ加速化パッケージ
2004 年 6 月	e-Japan 重点計画-2004
2004 年 9 月	IT 国際政策の基本的考え方
2004 年 12 月	情報セキュリティ問題に取り組む政府の役割・機能の見直しに向けて
2005 年 2 月	IT 政策パッケージ-2005
2006 年 1 月	IT 新改革戦略を決定
2006 年 7 月	重点計画-2006 を決定

2007 年 4 月	IT 新改革戦略 政策パッケージ
2007 年 7 月	重点計画-2007
2007 年 11 月	IT による地域活性化等緊急プログラム骨子
2008 年 2 月	IT による地域活性化等緊急プログラム
2008 年 6 月	IT 政策ロードマップ
2008 年 8 月	重点計画-2008
2008 年 9 月	オンライン利用拡大行動計画
2009 年 4 月	デジタル新時代に向けた新たな戦略～三か年緊急プラン～
2009 年 5 月	地上デジタル放送への移行完了に向けて緊急に取り組むべき課題への対応策について
2009 年 7 月	i-Japan 戦略 2015

総務省の原口一博前大臣は、2009 年 12 月 22 日、ICT の活用による持続的な社会の実現を目指す「ICT 維新ビジョン」を発表した。「グローバル化知識・人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大」しているとして、(1) 情報教育（子どもたちの情報活用能力の育成)、(2) 教科指導における情報通信技術の活用（情報通信技術を効果的に活用したわかりやすく深まる授業の実現等)、(3) 校務の情報化（情報通信技術を活用した情報共有によるきめ細かな指導。教員の校務の負担軽減）を 3 本柱として打ち出している。

上記のように、国家戦略としての情報化社会の構築、そのための学校教育の情報化整備は着々と進められてきた。しかし、環境の整備が進む一方で、コンテンツの質、量の不足は依然として深刻な課題である。課題を解決するための方策を模索しながら次の戦略を打ち出すという全体的な流れの中で、学校教育のバイブルとも言える「学習指導要領」にも、情報化教育の内容が盛り込まれ、学校教育の現場でも情報化を推進し、積極的に導入、展開することが要求されるようになった。

2009 年 3 月、文部科学省「新しい学習指導要領」が公示された。これは、「子どもたちの「生きる力」をはぐくむ具体的な手立てとして、(1) 改正教育基本法や学校教育法を踏まえた教育内容の改善を行うこと、(2) 学力の重要な要素である基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成及び学習意欲の向上を図るために、特に言語活動や理数教育を充実すること、(3) 子どもたちの豊かな心と健やかな体をはぐくむために道徳教育や体育、芸術・文化に関する教育を充実すること」を基本とした学習指導要領の改訂であり、「高等学校段階の教育では、義務教育の基礎の上に、その成果をさらに発展拡充させていく」としている。また、2010 年（平成 22 年）1 月には、高等学校指導要領の全教科の解説書が公開された。これに伴い、高等学校に関する取組についての手引書を作成するための「教育の情報化に関する手引」作成検討会が開催されており、今後、更に高等学校の教育情報化に向けての具体的な指針が示されることとなる。なお、高等学校学習指導要領は、2014 年（平成 25 年）4 月 1 日から段階的に適用される予定であり、それに先だち、2010 年（平成 22 年）4 月 1 日から、「総則」、「総合的な学習の時間」、「特別活動」について先行実施されている。

「新しい学習指導要領」では、英語以外の外国語は「第二外国語」として英語に準ずることが規定されている。

⑧ 英語以外の外国語

英語以外の外国語については，改訂前と同様に，地域の実情や学校の実態に応じ，一層積極的に開設され弾力的な指導ができるようにするため，学習指導要領において特に規定していない。なお，これらを扱う際には，英語に関する各科目の目標及び内容等に準ずるものとした。

（第１章　総説，第１節　改訂の趣旨，３ 外国語科改訂の要点）

第８節その他の外国語に関する科目

その他の外国語に関する科目については，第１から第７まで及び第３款に示す英語に関する各科目の目標及び内容等に準じて行うものとする。

英語ではなく他の外国語を指導する場合については，当該科目の目標及び内容等が外国語科の目標に従うことは言うまでもなく，「第１ コミュニケーション英語基礎」から「第７ 英語会話」までの各科目及び第３款「英語に関する各科目に共通する内容等」に示す目標及び内容等に準じて行うことを示したものである。

前回の改訂から外国語科はすべての生徒に必ず履修させる教科となった。これを受けて，必履修科目については，「その他の外国語を履修する場合は，学校設定科目として設ける１科目とし，その標準単位数は３単位とする。」と定められた（学習指導要領第１章総則第３款１の(1)のク)。

その他の外国語に関する科目の目標及び内容については，「第１ コミュニケーション英語基礎」から「第７ 英語会話」まで及び第３款「英語に関する各科目に共通する内容等」に示す英語に関する各科目の目標及び内容に準じて，各学校で定めることになる。

その際，その他の外国語であっても，教科としての外国語の目標に基づくことに留意することが必要である。すなわち，「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」という目標のもとに，各科目の内容等を定めることになる。特に，コミュニケーション能力の育成に関しては，今回の改訂においても重要な柱になっているので，十分な配慮が必要である。

さらに，英語に関する各科目には，コミュニケーション能力を育成するための言語活動や言語活動を効果的に行うための指導上の配慮事項が，さらには，第３款に「言語の使用場面の例」や「言語の働きの例」，「言語材料」などが示されている。これらを十分に参考にして，適切な指導計画を作成し，それぞれの外国語における指導を効果的に行うことが大切である。

なお，高等学校において英語以外の外国語を初めて履修させる場合は，基本的な言語材料を扱い，生徒の習熟の程度に応じた言語活動を行うよう，適切な配慮が必要である。

（第２章 外国語科の各科目，第８節 その他の外国語に関する科目）

※下線部は筆者による

英語の学習目標は「コミュニケーション能力の育成」であり、英語に関する過去の学習指導要領からの改善の具体的要項としては、次の内容が掲げられている。

(ｱ) 「コミュニケーション英語基礎」は、身近な場面や題材に関する内容を扱い、日常的な事柄についてコミュニケーションを図る活動等を行うことを通して４技能を総合的に育成することにより、高等学校での学習に円滑に移行させることをねらいとして内容を構成する。

(ｲ) 「コミュニケーション英語Ⅰ」は、４技能を総合的に育成することをねらいとして内容を構成し、統合的な活動が行われるようにするとともに、そうした活動に適した題材や内容を扱うこととする。その際、例えば、社会科や理科など他教科で学習する内容、自国や郷土の風俗・習慣、歴史、その他の様々な伝統や文化に関する内容、発明や発見などの科学技術や自然に関する内容、異文化コミュニケーションに関する内容等、コミュニケーションへの関心・意欲・態度の育成にも資する題材や内容を選択的に取り上げ、体系立てて扱うものとする。

(ｳ) 「コミュニケーション英語Ⅱ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」の基礎の上に、総合的な英語力の向上を図る指導を行うことをねらいとして内容を構成する。

(ｴ) 「コミュニケーション英語Ⅲ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」及び「コミュニケーション英語Ⅱ」の基礎の上に、総合的な英語力の向上を図る指導を行うことをねらいとして内容を構成する。

(ｵ) 「英語会話」は、身近な場面や題材に関する内容を扱い、音声を中心にコミュニケーションを図る活動等を行うことを通して、必要な情報や考えを聞いたり、話したりすることができる力の向上を図るような指導を行うことをねらいとして内容を構成する。

(ｶ) 「英語表現Ⅰ」は、基本的な言語規則に基づいて、様々な場面に応じて適切に話すことや書くことができるようにし、あわせて論理的思考力や批判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する。

(ｷ) 「英語表現Ⅱ」は、スピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなど高度なコミュニケーションを行うことができるようにすることや複雑な文構造を用いて正確に内容的なまとまりのある多様な文章が書けるようにすること、あわせて論理的思考力や批

判的思考力を養うことをねらいとして内容を構成する。

(ｸ) 言語活動、言語材料、教材、指導上の工夫及び配慮事項については、各科目のねらいに配慮しつつ、中学校と同様の趣旨で改善を図る。また、ICT などを指導上有効に活用することに配慮する。

(ｹ) コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、それぞれの科目において扱う題材や内容、言語材料の難易度によって分類したものであることから、「コミュニケーション英語Ⅱ」は、「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修した後に、「コミュニケーション英語Ⅲ」は「コミュニケーション英語Ⅱ」を履修した後に、履修させるようにする。

（第１章　総説，第１節　改訂の趣旨，２ 改訂の趣旨，イ 改善の具体的事項）

※下線部は筆者による

履修単位数から考えると、大学受験の主要科目である英語とは異なり、英語以外の外国

語を英語と同水準で学習、習得させることは物理的に不可能である。英語の履修標準単位数は合計 21 単位、対して中国語は 3 単位とすることが定められているものの、実際には週 1～3 単位で実施されている学校が大多数である（第 2 章参照）。数字だけの計算でもおよそ十分の一程度の時間数、現実には、学校行事、部活動、受験模試等の授業外活動による授業時間の短縮や割愛も存在するため、実質的な授業時間数は更に少なくなる。このような制限の下で、異文化コミュニケーションを通じてコミュニケーション能力を育て、情報化社会にも対応できる技能を育成することは非常に困難である。しかし、逆にいえば、困難であるからこそ、現場の教師が協力し、率先して取り組むべき課題でもある。

中国語教育に関する指導の指針としては、2007 年 3 月に発行された、『高等学校の中国語と韓国朝鮮語：学習のめやす（試行版）』がある。これは、文部科学省の「学力向上拠点形成事業」の一環として行われた、「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」（平成 17～18 年度）委嘱事業「高等学校における中国語と韓国朝鮮語の目標・内容・方法に関する研究」の成果としてまとめられたものである。同書は、「コミュニケーション能力を身につけるための科目目標と科目内容および学習目標を提示することをめざし」、「さらにそれらの科目目標と科目内容および学習目標を具現化するものとして、学習内容と学習到達目標を言語領域および文化領域にわたる、話題分野別のコミュニケーション能力指標という形で提示」（p.5）しており、高校生の学習への動機づけを高め、高校生の関心および必要性に沿った学習内容にすることを重視し、話題分野別の指標を設定している。特に、「中国語を使って何ができるか」を記述した「Can-do statements」の概念に基づき、言語領域の指標づくりに重点を置き、レベル別の学習到達目標を示す指標を示していること、指標に基づいて作成した年間指導計画・単元のサンプルも複数提示していることは、中国語教育の現場にいる教師にとって、参考に値する資料と言える。しかしながら、「学習のめやす」に含まれる範囲は相当の分量があり、高等学校の第二外国語として学習する現実的な時間配分に照らし合わせると実行可能性が低く、現場の教師からは、あくまでも「模範的指導の手引書」であって、実践的な指導書ではないという声も出ている。また、語彙、文法事項、機能、場面別の項目分類が中心で、やはり伝統的な教師主導型、文法主体型の授業を前提としており、ICT 活用授業や実践的コミュニケーション能力の育成が求められる現代の教育現場のニーズとは一線を画していると言えよう。同書にも、「学習のめやす」は、「あくまでも広く議論を募るための「試行版」である」と述べられており、多様化する学習者、条件、ニーズに対応するには、学習者を最も理解している現場の教師自身が、「学習者と共に創造すべきもの」であるとしながらも、「教育目標や内容、方法について共通の土俵があることは意味がある」としている。

高等学校の学習者には、大学に進学し、あるいは就職して、いずれは社会に飛び立つという未来が待っている。その進路も多様化しており、社会が求める人材も多様化、専門化している。高等学校教育の場を「学校教育」という枠組みによって孤立させず、社会とのつながりを意識した授業作りが、現場の教師にも求められている。

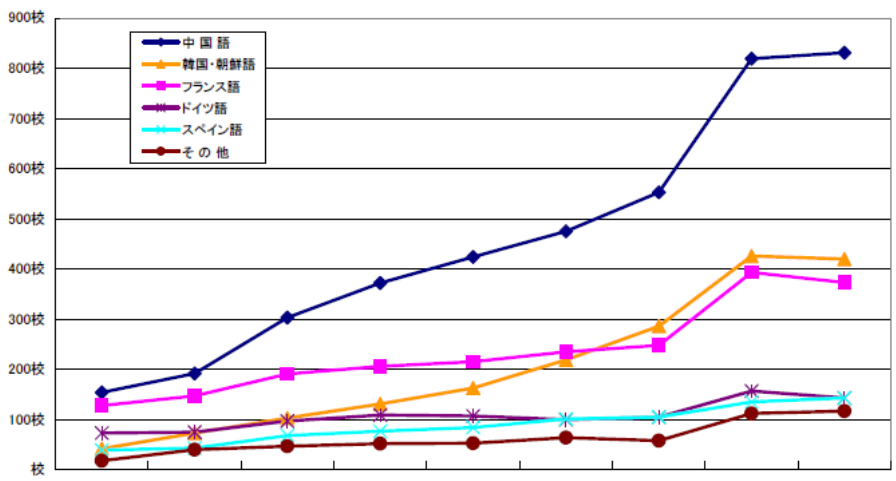
本章では、グローバル化と通信技術の急速な発展による国際化・情報化社会の現れを、教育機関における ICT 教育実施の現状及び日本政府による教育情報化とコミュニケーション能力育成に対する要求の高さを通じて概観した。第 2 章では、高等学校中国語教育の現状を報告、分析し、国家の情報化戦略、文部科学省の教育指導方針と教育現場とのギャップを探る。

第２章　北海道高校中国語教育の情報化と課題

２.１　高校中国語教育の開講状況

日本国内の高等学校における中国語教育については、財団法人国際文化フォーラム（TJF）及び全国高等学校中国語教育研究会が、教授法の研究や会員の交流促進を目的に、年 1 回の研究大会開催、各種調査等の活動を行っている。1996 年に、1994 年度の高等学校における中国語教育の現状に関する第 1 回調査報告書 [14] がまとめられ、1999 年には、1997～1998 年度の第 2 回調査報告書『日本の高等学校における中国語教育の広がり』[15] が発行された。1999 年度報告書によれば、中国語を開講する高校数は全国的に増加しており、履修者数も英語以外の第二外国語の中では圧倒的に多いことがわかる。同報告書は 10 年前の状況を調査した結果であり、この 10 年間の中国経済の急速な発展と、それに伴う人的交流の増加により、状況は更に変化して、新たに中国語を開講した高等学校の数も増加している。文部科学省でも、1986 年度（昭和 61 年度）から隔年で中等教育学校の国際交流等の状況についての調査を行っており、英語以外の外国語の開設について、2009 年 6 月時点の調査結果を公表している（表 2.1）。これによれば、依然として中国語が最も多く 831 校、履修者数は 19,751 人にのぼる。

表 2.1　中国語を開講する高等学校及び履修者数の遷移 [16]



	平成5年	平成7年	平成9年	平成11年	平成13年	平成15年	平成17年	平成19年	平成21年
中国語	154	192	303	372	424	475	553	819	831
韓国・朝鮮語	42	73	103	131	163	219	286	426	420
フランス語	128	147	191	206	215	235	248	393	373
ドイツ語	73	75	97	109	107	100	105	157	143
スペイン語	39	43	68	77	84	101	105	135	143
その他	18	40	47	52	53	64	58	112	117
計	454	570	809	947	1,046	1,194	1,355	2,042	2,027

[14] 小渓ホームページ（http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/inf/ij101chosa1.htm）掲載。
[15] 小渓ホームページ（http://www.tjf.or.jp/xiaoxi/inf/ij100report.htm）掲載。
[16] 出典：文部科学省「平成 20 年度高等学校等における国際交流等の状況について」（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/01/__icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1289270_1_1.pdf）

	学校数（実数）	外国語数	中国語	フランス語	韓国・朝鮮語	スペイン語	その他	計（延べ数）
公立	540 校	15 言語	11,894 人（639 校）	4,294 人（207 校）	5,933 人（340 校）	1,923 人（109 校）	2,136 人（160 校）	26,180 人（1,455 校）
私立	189 校	13 言語	7,857 人（192 校）	4,660 人（166 校）	2,515 人（80 校）	840 人（34 校）	1,766 人（100 校）	17,638 人（572 校）
計	729 校	16 言語	19,751 人（831 校）	8,954 人（373 校）	8,448 人（420 校）	2,763 人（143 校）	3,902 人（260 校）	43,818 人（2,027 校）

1999 年の第 2 回調査報告書「日本の高等学校における中国語教育の広がり」によれば、開講形態としては、自由選択あるいは必修選択の第二外国語とする学校が多数を占めている（表 2.2）。履修期間は、高校 2〜3 学年の 2 年間継続が最も多く、次いで 3 学年のみ 1 年間、2 学年のみ 1 年間、1〜3 学年の 3 年間継続の順となっている（表 2.2）。履修単位数は、2 単位（週 2 回授業を行う）の学校が最も多く、次いで 4 単位となっており、両者で約 70%を占める（表 2.3）。

表 2.2　高校中国語の履修形態（左）及び学年、期間（右）
（出典：『日本の高等学校における中国語教育の広がり』, p.14）

履修形態	中国語 合計	（%）	公立	私立
自由選択	138	（46.6）	109	29
必修選択	97	（32.8）	77	20
必修	37	（12.5）	11	26
必修選択＋自由選択	13	（4.4）	11	2
必修＋必修選択	9	（3.0）	5	4
その他 1)	2	（0.7）	1	1
合計	296	（100.0）	214	82

注）一つの学校が複数の学科で取り組んでいる場合、重複がある。
1）必修＋自由選択、必修＋必修選択＋自由選択

期間	学年	中国語（%）	
1 年	1	6	
	2	43	
	3	72	
	その他	13	
		134	（46.9）
2 年	1-2	9	
	2-3	97	
	その他	4	
		110	（38.5）
3 年以上	1-3	42	
	その他	0	
		42	（14.7）
	合計	286	（100.0）

表 2.3　高校中国語の履修単位数（左）及び単位数と形態の比較（右）（出典：同前, p.15）

単位数	中国語 合計	（%）	公立	私立
1	4	（1.4）	2	2
2	108	（37.6）	81	27
3	24	（8.4）	14	10
4	84	（29.3）	66	18
5	13	（4.5）	10	3
6	29	（10.1）	21	8
7	8	（2.8）	7	1
8	3	（1.0）	3	0
9	2	（0.7）	1	1
10-19	8	（2.8）	4	4
20-28	4	（1.4）	2	2
	287	（100.0）	211	76

単位数	中国語 自選	必選	必修	その他
1	1	0	3	0
2	52	42	13	1
3	11	9	4	0
4	40	35	3	6
5	6	4	1	2
6	17	4	6	2
7	1	1	1	5
8	2	0	0	1
9	1	0	0	1
10-19	0	1	4	3
20-28	0	0	2	2
	131	96	37	23

２.２　高校中国語教員を取り巻く環境

高校中国語教育の現場では、多くの場合、非常勤講師１名で授業を担当している（表 2.4）。しかし、日本在住の中国語母語話者（留学生を含む）を ALT（Assistant Language Teacher, 外国語指導助手）あるいは非常勤講師として雇用している場合、そのほとんどが中国語の教員免許を取得していない。通常、中国の教育機関で外国人に中国語を教える場合、教員は大学や大学院で対外漢語教育（外国人学習者を対象とした中国語教育）を専攻しており、第二言語（あるいは外国語）習得理論の知識、現代中国語文法の教授法等、中国語教育に必要な専門知識と技能を備えている。これに対して、日本国内の高等学校で中国語を担当する非常勤講師の中には、中国語母語話者であるというだけの理由で授業を任されているケースも少なくない。

中国語の担当教員数は、１名のみで担当する場合が約７割と大半を占め、常勤と非常勤を合わせて ２ 名以上で担当している学校は多くない。また、担当教員の母語については、常勤教諭の場合、日本語母語話者が中国語母語話者よりもやや多いが、非常勤講師の場合は中国語母語話者が多くなっている（表 2.5）。

表 2.4　高校中国語の担当教員数と職名（出典：同前, p.19）

教員数／職名		中国語 (%)
1名	講師	128
	教諭	35
	ALT	3
	その他	4
		170 (69.1)
2名	教諭＋講師	22
	講師	16
	講師＋ALT	8
	教諭＋ALT	4
	教諭	2
	教諭＋その他	2
		54 (22.0)
3名	教諭＋講師	3
	講師	3
	教諭＋講師＋ALT	3
	教諭	1
	講師＋ALT	1
	教諭＋その他	1
		12 (4.9)
4名以上	教諭＋講師	4
	教諭＋ALT	3
	講師	2
	教諭＋講師＋ALT	1
		10 (4.1)
	合計	246 (100.0)

表 2.5　高校中国語の担当教員の母語：常勤教諭（左）、非常勤講師（右）（出典：同前, p.19）

母語	中国語 (%)
中国語	141 (42.7)
日本語	186 (56.4)
バイリンガル	3 (0.9)
	330 (100.0)

母語	中国語 (%)[1)]
中国語	114 (54.3)
日本語	93 (44.3)
バイリンガル	3 (1.4)
	210 (100.0)

1）94年度は母語が中国語50.9%、日本語49.1%

同報告書によると、中国語の教員免許を取得している担当教員 115 名のうち、約半数の 48 名が国語の免許を、20 名が英語の免許を取得しており、国語又は英語の教員が中国語も兼任していることがわかる。日本の高校において、国語や英語は大学受験のための重要科

目であり、多忙な日々の業務の中で、第二外国語である中国語を兼任した場合、「本職」の科目と比べて授業計画や準備に充当する時間、労力は必然的に低くなると予想される。また、中国語専任ではない日本語母語話者の場合、教員自身の中国語の語学レベルが低いことや、中国語文化圏での生活経験がなく、各種メディアから得た知識項目は教えることができても、実感を伴った中国語の世界観に基づく言語運用や実践的なコミュニケーション型の授業を展開することは困難であるといった課題がある。実際のところ、中国語母語話者の非常勤講師の割合が多いのは、日本人教員の負担を軽減し、コミュニケーション型の授業を促進するための対応であるが、中国語母語話者ではあっても、対外漢語教育の専門家ではないため、日本人教師と連携しながら適切に効果的な指導を行なうのは難しいという問題がある。

これらの課題を克服、解決するために、現場の中国語担当教員たちは研修や交流の機会を必要としている。国際文化フォーラム及び高等学校中国語教育研究会は、この方面についても積極的に取り組んでおり、教員の国内・中国研修、教育行政者や校長等を対象とする教育代表団の中国派遣等を実施している。2002 年 8 月には、日中関係機関の協力により黒龍江省ハルビン市で「高等学校中国語教員研修」を開催した。2002 年 12 月には、中国教育部と文部科学省との協議が行われ、「第二次日中教育交流計画」の一環として、教育部と文科省の主催で、高校中国語教員の短期中国研修を実施することが決定した。[17] その後、2004 年（平成 16 年度）7～8 月に中国・吉林で第 1 回の研修会（23 日間）が行われ、20 名の高校中国語教員が参加した。以降、同研修は通称「長春研修」として継続的に実施されている。長春研修は、中国教育部、中国国家漢語国際推進指導グループ弁公室（以降、「漢弁」と略）、文部科学省、国際文化フォーラムの共催で、5 ヵ年計画として、中国・長春市の吉林大学で実施された。過去の研修の成果が漢弁にも評価され、教員研修のニーズも高いことから、長春研修を継続する方向で協議が進められ、2010 年度から 2012 年度までの協議書が締結された [18]。これにより、今後 3 年間、高校中国語の現場にいる教員が参加する機会が引き続き提供されることとなった。この他、東京、大阪、札幌の孔子学院がそれぞれ主催する国内の高校中国語教員研修も開催されている [19]。北海道では、札幌孔子学院を会場として、夏季休業期間中に数日間の日程で、大学や海外からの中国語教員を招いて、研修が行われている。道内各地から高校中国語の担当教員が集まり、授業計画、中国語に関する知識の強化を目指して、意見交換や交流が行われている。

２.３　北海道の高校中国語教育と ICT 活用の現状

上記のように、全国規模の調査、報告は行われているものの、やはり東京、大阪を中心に、名古屋、九州等、関東以南の地域で、中国語教育に影響力の大きい高等教育機関のバックアップにより活動している模範的な高校に関する内容が主である。北海道のような地方の高等学校で、中国語の担当教師が孤軍奮闘しているような教育現場の姿はなかなか見えてこない。前述の高等学校中国語教育研究会には、北海道支部があり、北海道高校生中国語スピーチコンテストの運営事務局として、年に数回のミーティングを開催している。同研究会に入会している教員同士は、定期的に顔を合わせて情報交換や近況報告を行って

[17] 国際文化フォーラム通信 no. 65　2005 年 1 月号の報告による。
[18] 国際文化フォーラム通信 no. 46　2010 年 10 月号の報告による。
[19] 国際文化フォーラム通信 no. 80　2008 年 10 月号の報告による。

いる。しかし、新たに中国語を開講して中国語母語話者の非常勤講師を縁故採用している学校もあり、この場合、講師本人と同研究会は互いに存在を知らなかったり、研究会の側から案内を打診しても、研修や会の活動に関心がなく入会を希望しなかったりする場合もあるので、北海道内全体の高校中国語担当教員のネットワークが形成されているとは言えないのが現状である。そこで、1999 年の第 2 回調査報告書「日本の高等学校における中国語教育の広がり」及びインターネット上に公開されている開講授業の情報を元に、2009 年 10 月時点で、北海道内で中国語を開講している高等学校を電話調査し、中国語の担当教員と連絡が取れた学校に対して、中国語教育及び ICT 活用授業実施の現状に関するアンケート調査を実施した。

調査の結果、北海道内で中国語を開講している高校は 20 校（希望者のみで構成される自主的なサークルを含め 21 校）あることがわかった（表 2.7）。

表 2.7　北海道内で中国語を開講している高等学校一覧（地域別）

No.	地域	学校名
1	札幌市	札幌龍谷学園高等学校
2		市立札幌大通高校
3		北海道札幌丘珠高等学校
4		北海道札幌開成高等学校
5		北海道札幌清田高等学校
6		北海道札幌国際情報高等学校
7		北海道文教大学明清高等学校
8		北海道有朋高等学校（単位制課程）
9		立命館慶祥高等学校
10	石狩市	北海道石狩翔陽高等学校
11	小樽市	小樽商業高校
12	千歳市	北海道千歳高等学校
13	旭川市	旭川明成高等学校
14		旭川南高等学校
15	上川郡清水町	北海道清水高等学校
16	釧路市	釧路江南高等学校
17	野付郡別海町	別海高等学校
18	岩内郡共和町	北海道共和高等学校
19	登別市	北海道登別明日中等教育学校
20	函館市	清尚学院高等学校
21	苫小牧市	北海道苫小牧東高等学校 ※正式な授業科目ではなく自主サークル

このうち、高等学校中国語教育研究会北海道支部に入会している教員を中心に、全 9 校の教師に対しては、中国語教育及び ICT 活用授業実施の現状に関するオンラインアンケート調査を実施した。オンラインアンケートを採用した理由としては、北海道全域にまたがる遠隔地の教員は一同に会する機会が少ないこと、アンケート調査用紙が学校内の業務で

多忙な他科目兼任の中国語担当教員あるいは授業日のみ出勤する非常勤講師の手に渡るまでに時間がかかること（時には外国語主任の所で止まってしまい届かない場合もある)、紙のアンケートに記入し返送する手間、時間、費用を節約できること、デジタルデータとして入手できるため、回収したデータの整理、分析、加工に便利なこと等が挙げられる。なお、高等学校中国語教育研究会北海道支部に入会しておらず、メールアドレスの入手が困難であった遠隔地の学校に対しては、オンラインアンケートと同内容の紙のアンケート調査用紙を郵送し、後日郵送により回収した。このうち、日本人教師が担当している 1 校は回答があり、その他の中国語母語話者の非常勤講師が担当している学校は未回答である。

質問項目には次の 4 項目を設定した。

（1）北海道の高校における中国語教育の基本情報について
（2）北海道の高校における中国語 ICT 教育環境・設備について
（3）北海道の高校における中国語 ICT 教材利用について
（4）北海道の高校における中国語教授法・教師人材について

その理由としては、北海道のような地方の高等学校では、ICT 活用の授業実践はほとんど行われていないのではないか、また、その原因は「ICT（各種マルチメディアツールを含む）環境のインフラ整備不足」、「ICT 活用の中国語教材・コンテンツの不足」、「ICT 活用能力を備えた教師人材の不足」にあるのではないか、と予測されるためである。

（1）北海道の高校における中国語教育の基本情報について

性別については、男女比は男性 3 名、女性 6 名となっており、女性教員が担当している割合が高い。

母語については、日本語母語話者が 9 名、中国語母語話者が 1 名で、ほぼ日本人が担当している。

中国語の担当学年（複数回答）については、1 年生が 1 名、2 年生が 7 名、3 年生が 7 名、その他（愛好会にて希望生徒・教員対象）1 名となっており、2 年・3 年の 2 学年を担当している割合が高い。

各学年の中国語クラス人数については、3 年生で 10 名以下のクラス、2 年・3 年で 11～20 人のクラス、2 年生で 21～30 人のクラスの順に多い。

担当教科（複数回答）については、非常勤講師、ALT を含む中国語専任が 8 名と圧倒的に多く、次いで国語との兼任が 4 名、社会、書道、異文化理解・国際文化等、物理との兼任が各 1 名である。

（2）北海道の高校における中国語 ICT 教育環境・設備について

中国語の授業を行なう教室については、通常の教室が 8 名と最も多い。次いで、CALL 教室・LL 教室が 3 名、演習・多目的教室が 2 名の順となっている。

中国語の授業を行なう教室でのパソコン、インターネット環境については、「できる」が 4 名、「できない」が 5 名で、ほぼ半々となった。

「できる」場合に使用可能な設備については、「学習者ごとに個別のパソコン端末」が 2 名、「パソコン端末ごとにインストールされた e ラーニングソフト（タイピング、リスニン

グ用オーディオ・映像コンテンツ、電子辞書等)」が 1 名、「学外へ接続可能なインターネット、メール、e ラーニングシステム」が 2 名、「その他」が 2 名である。「その他」について具体的には、「パソコンに取り込んだ映像やＤＶＤをスクリーンに映して見せる。学生が個別にパソコン端末を操作できる部屋ではない。」及び「CALL 教室は機材の立ち上げが幾分複雑で時間がかかり、また使用方法も幾分複雑なため、今のところ十分な活用に至っていない。CALL 教室機材は CD プレイヤー並みの簡便さが理想と考える。」との記述回答が得られた。パソコン端末は利用できてもインターネットには接続されていなかったり、環境は基本的に設置されているものの、システムやパソコン端末のスペックの問題があったり、ソフトウェアが使いにくかったりと、現場の教員が求める ICT 資源を充分に活用できる条件が整備されているとは言えないようである。

「できない」場合に今後求める設備については、「学習者ごとに個別のパソコン端末」が 2 名、「パソコン端末ごとにインストールされた e ラーニングソフト（タイピング、リスニング用オーディオ・映像コンテンツ、電子辞書等)」が 2 名、「パソコン端末どうし接続されているが、学内限定の e ラーニングシステム（LMS：学習管理システム、メール、オンラインでの課題提出、小テスト、成績評価等)」が 1 名、「学外へ接続可能なインターネット、メール、e ラーニングシステム」が 1 名、「その他」が 1 名となっている。

中国語学習のために今後あると便利な環境・設備としては、以下のような記述回答が得られた。

機能的には現在の CALL 設備で十分満足している。（ただし使い方がよくわからない） CALL 教室でなくても、以下のものがそろっていれば便利。 CD プレイヤー／画像・動画投影装置とスピーカー／インターネット環境（Skype 等でテレビ電話可）
PC やプロジェクター等の機器はもちろん、それら使用することで学習効果が上がるような良いソフトが必要だと思う。現在 CD 付のテキストが多いが、初級者向けにはこれというものは少ないような気がする。今後は映像系のソフトやテキストも多く開発されてほしい。
教師用の PC とプロジェクター
教室にテレビと DVD･ビデオレコーダーがあると芸術文化の知識を高められると思います。いつも視聴覚室を使うのですが入室許可が必要で、やや大げさな感じがします。日常の授業で手軽にテレビ画面で見られると楽しいと思います。
実際に中国の人とコミュニケーションをとること
本校の場合、パソコン使用可能な教室が、主に「情報」や商業系教科（情報処理など）の履修に使用されているため、それ以外の教科がMM教室やパソコン教室を使用することがほぼ不可能となっています。 質問に答えたいのですが、私自身の e ラーニングに対する知識が不十分なためにあまり具体的にどういう事ができるのかわかりません。すみません。 本校はネイティブの先生に学ぶということを重視し、中国人教員による中国語授業にこだわって実施しています。私たち日本人教師はあくまでアシスタント的な立場です。 生徒は中国人の先生という存在そのものから、中国という国の文化や生活などを学び、興味を持っているように思います。 高校での中国語履修は、本校のような進学校ではない学校にとって、生徒の興味や視野を

広げるという目的が主であり、「使える」レベルまで持って行くことは難しいです。 本校のような場合、中国語の習得には、中国人教師と日本人教師が一緒に教えられるような人材配置が効果的かと思います。
声調練習のために、学生が自分で発音した音声を図示する機器を手軽に操作し、クラス全体が目と耳で確認しながらスピーディに練習を展開したい。
ポリコムやライフサイズのようなビデオ会議システム大型スクリーン

※記述内容は回答者本人が記載した原文による

上記のアンケートを通じて、教員側が求める多様な ICT 環境を確認することができた。CD や DVD 等の視聴覚映像資料を手軽に利用できる環境、パソコンやインターネット等の設備・機器、操作しやすく初心者の中国語学習に適した教材あるいはコンテンツ等が求められている。それと同時に、ICT 活用教育にこだわらず、現実の中国人との直接コミュニケーションを重視するという意見も見られると同時に、ビデオ会議システムやテレビ電話等の ICT ツールを活用した現実のコミュニケーションまで視野に入れている教員もいる。中国語教育の現場にいる教員は、多様化する学習者のニーズや、現代中国の現状を学習者により的確に伝えるための様々な対応をしようと配慮していることがわかる。これはすなわち、より効率的で効果の高い授業を展開するための独自のアイディアや、授業をよりよくしたいという情熱を抱いているということであり、このような教育熱心な教員の存在は、今後も中国語学習・教育環境を改善する上で非常に心強い。それと同時に、教育実践の成果を目に見える形で相互に伝え合い、具体的な授業実践の方法、成果、問題点、解決策等、情報資源の共有化を図る意識を高め、実行していくことが重要である。

（3）北海道の高校における中国語 ICT 教材利用について

中国語の授業でのマルチメディアツールやインターネット等を活用した ICT 教材の使用については、「利用している」が 2 名、「利用していない」が 8 名で、大部分が使用していないことがわかった。「利用している」については、「「心連心」サイトの東京外語大提供の動画中国語教室（ただし十分な活用には至っていない。実験的段階です。）リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングすべてに活用できますが、今のところはリスニング中心です。」との回答を得た。

「使用していない」場合の理由は、「どのような ICT 教材があるのか知らない」が最も多く 5 名、「ICT 教材の効果的な使い方・教授法がわからない」が 4 名、「ICT 教材は知っているが、必要な設備・機器がない・使えない」が 2 名、「ICT 教材の効果的な使い方・教授法はわかるが、使う必要がない」と「学習者が ICT 教材使用の必要性を感じていない・使いたがらない」が各 1 名となっている。更に具体的な理由として、「CALL 教室があるが英語の授業で埋まっていて中国語の授業時間帯に使用できない」、「１クラスが２０人前後、全１５回の授業ではできるだけ学生と直につながる授業をしたい」が挙げられた。

今後使いたい ICT 活用教材については、以下のような記述回答が得られた。

教科書
・テキストの会話文を実際にネイティブが演じているものがあれば使いたい。 ・中国で買ってきた子供向け「唐詩」のテキストと DVD

・同じく中国で売っている故事成語に関したテキストと DVD（未入手）
パソコン：入力させることでピンインを覚えやすい。画像や映像を気軽に見せたい。 生徒自身に興味のあることを検索させたい。
語学教材というよりも、中国の歴史、文化、庶民の生活を紹介する４５分くらいで終わる DVD 等があるといいと思います。
ビデオ会議システムで中国や台湾と日本を接続する遠隔協調学習を行ないたい。
学生のニーズに答えられる多様な場面を設定した会話集がほしい。
ICT に関する知識や使用できる設備がないので、イメージがもてない。
本当に申し訳ありませんが、ＩＣＴ教材についてはよくわからないのでコメントできません。

※記述内容は回答者本人が記載した原文によるが、一部の誤字脱字を修正した。

教材としては、伝統的に使用されている紙の教科書のデジタル版テキストや多様な場面設定の会話集等、教材あるいはコンテンツのデジタル化、現代中国を知るための DVD 等の視聴覚映像教材、パソコンを利用した中国語の文字入力練習から情報検索、発信、交流に至るまでの活用まで多様な声を聞くことができた。それと同時に、「ICT についてよく知らない、わからない」という回答もあり、ICT がまだ身近で手軽な便利ツールではなく、特別で複雑な専門ツールであるという印象が根強いことも伺える。

（4）北海道の高校における中国語教授法・教師人材について

中国語の授業を行う上での教員体制については、「中国語専門の日本人教師（非常勤）のみ」と「日本人教師とネイティブスピーカー（ALT）のティーム・ティーチング（いずれか片方が中国語専門)」が各 3 名、「日本人教師とネイティブスピーカー（ALT）のティーム・ティーチング（両方とも中国語専門外)」が 2 名、「中国語専門外の日本人教師（常勤）のみ」が 1 名となっている。ティーム・ティーチングによる日中両国の教員体制が合計 5 名で、比較的多い。中国語母語話者の語感に直接触れる機会が定期的にあるのは、学習者にとって望ましい環境である。また、日本語母語話者、中国語母語話者に限らず、中国語専門の教員を合わせると 6 名となり、外国語習得や中国語教育に関する知識・技能を備えた人材がある程度確保されていることがわかる。

現在の体制で困難を感じるかどうかについては、「やや感じる」が 4 名、「どちらとも言えない」が 1 名、「あまり感じない」が 3 名、「ほとんど感じない」が 1 名となっている。いずれもほぼ半々であり、時折困難を感じることはあっても、それほど目立って大きな困難や支障を常に感じることはないようである。

「困難を感じる」の場合、具体的に何を指導する際に困難を感じるかは、「会話・実践的コミュニケーション」と「その他」が 3 名、「学習方略」が 2 名、「発音・ピンイン」と「文法」が各 1 名の順となっている。「その他」は具体的に、「第二外国語のため個人の興味の差が大きく、レベルのばらつきが生まれる」、「授業時間が短いため、人数が多いクラスでは全員に発話させられない」、「本校の場合、本来は『中国語専門のネイティブスピーカーのみ』での授業ですが、今年度は例外的に中国人の先生の都合で週に 1 時間ずつ日本人教員と中国人教員がうけもつことになりました。なので、二人の教員間で連絡を密に取り合い、進度状況などを把握しなければならないのですが、これがなかなか難しいです。複数

の教員で教える場合の役割分担や授業形式は私自身現在も手さぐりな状況です」、「本校での中国語教育は、まだ愛好会段階なので、十分な授業時数が確保できない（週に 1 回)。また 2 年 3 年と継続する場合、指導教員の負担が大きくなってくるのにどう対処できるか不明。」といった意見が出された。

困難・問題を感じる指導について、ICT 活用の教材・教授法・学習法を導入することで解決可能な内容があるかどうかについては、「私は三年生を担当していますが、中国語の授業は正規の授業とは見なされていないので、学生自身中国語を学ぶ重要性を感じていません。そのため、授業に集中できないのが状態です。私語がたいへん多く、他教科の勉強をしていたり、身が入らないのが現状です。少数ですが、熱心に学習する生徒もおります。英語に比べて中国語に興味を持ってもらうことは難しいです。やはり文化や、生活に興味を持ってもらうことから始まるような気もします。」という意見が出された。

学期末や年度末に、学生からの意見フィードバックのための授業評価アンケート調査等を行なうかどうかについては、「行っている」が 4 名、「行っていない」が 5 名で、ほぼ半々であった。

「行っている」場合によく出される意見や要望としては次の通りである。学習者のニーズの多様化として、4 技能や文法等、伝統的な文法能力育成に関するもの、実践的コミュニケーション育成に関するもの、伝統行事・文化等の文化的知識に関するもの、映画・テレビ・音楽等の娯楽・メディアを含め、現代中国の状況に関するものなどの多様性が表れている。この他、「映画鑑賞、餃子作り等の活動を好む意見が多いが、及び短期間で実践会話や文法をマスターしたいという積極的な学習意欲を示す学生もいる」、「授業数をもっと増やしてほしい。」等の記述回答も見られた（図 2.1)。

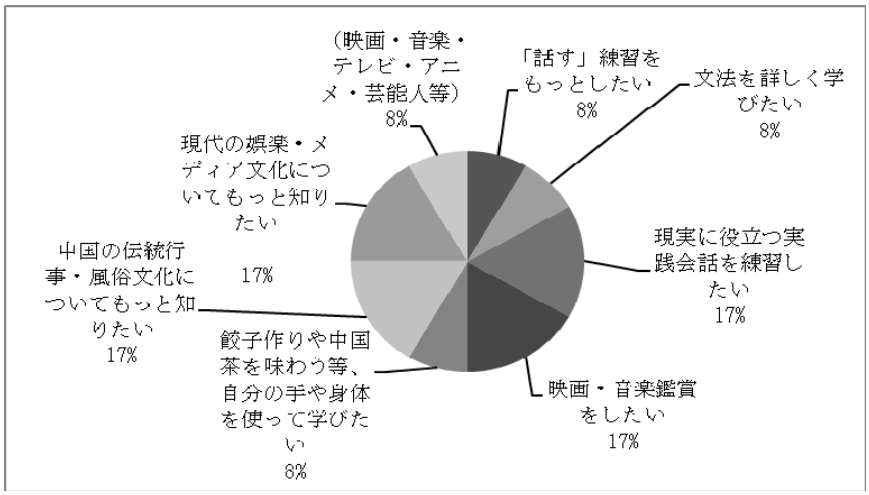


図 2.1　中国語の授業について学生からよく出される意見・要望

なお、「行っていない」場合の理由としては、「授業評価アンケートを行っていない理由としては、単にタイミングを逸しているだけです」、「まだ立ち上げたばかりの愛好会なので、年度末のフィードバックはしておりません」との回答が得られた。

また、北海道地域の高校中国語教育における ICT 活用授業を行うにあたり、人材の確保及び人材育成が十分かどうかについて、「システム管理やコンテンツ制作の技術者不足」、「教師側のシステム管理やコンテンツ制作の知識・技能不足」、「ICT 教材を使って効果的

に教えられる人材不足」、「ICT 教材を使った教授法の研修・交流の場が不足」という声もあり、人材そのものの不足を嘆くだけでなく、中国語担当教員自身が自身のスキルアップの必要性を感じていながらも、そのための研修・交流の場が十分ではないと感じているようである。

以上のアンケート調査結果から、北海道地域の高校中国語教育における ICT 活用授業の実践はまだ少なく、その原因として、「ICT 教育環境・設備」、「中国語 ICT 教材」、「中国語教授法・教師人材」における不足が原因であることがわかった。経済産業省、文部科学省、総務省等の政府機関がいかに情報化社会と教育の情報化を推進し、様々な政策や戦略を打ち出しても、遠い地方の初等・中等教育の現場まで浸透するには相応の年数がかかる。また、ICT 産業も教育も、いったん環境が構築されればそれで完成というわけではない。技術の革新は日進月歩であり、教員や学習者の置かれた状況は絶えず変化し、時代の推移によって求められる知識や技能も多様化、専門化し続けている。時代に流れに取り残されず、より効果的な教育、学習方法を追求するためにも、新しい技術を活用した授業を積極的に実践し、現状の課題を知り、教員と学習者のニーズを確認しながら、教育、学習内容を改善するというサイクルを継続しなければならない。第 3 章では、これまで行われてきた中国語の ICT 活用教育・学習の事例について、主に国内外の高等教育機関における過去の研究を俯瞰し、具体的な研究分野、内容、成果等について総括する。

第３章　高等教育における中国語教育情報化

３.１　日本における ICT 活用の中国語教育・学習研究

日本国内における ICT 活用の中国語教育・学習研究は、主に大学を中心とする高等教育機関で行われており、高等学校における実践事例は近年増加してきているものの、事例数も少ない。このため、本章では、高等教育機関の先行研究事例を総括する。

2000 年以降、国策としての教育分野の情報化推進が本格化している。これに伴い、教育改革に ICT を活用することの重要性に対する認識も高まり、高等教育機関においては、マルチメディア教材や素材の電子化、データベース化も充実し、ICT 活用の教育・学習環境が整備されてきている。通信制大学のように、インターネットを通じて遠隔個別指導を行い、単位取得できる教育体制や、国内外の大学間の単位互換制度も整備されてきている。1999～2002 年度（平成 11～14 年度）には、早くも科学研究費補助金特定領域研究（1）「高等教育改革に資するマルチメディアの高度利用に関する研究」として、4 年間の研究が実施され、研究成果報告書が発行された。「研究項目 A01：教育マルチメディア技術の高度化とその効果に関する研究」、「研究項目 A02：外国語教育の高度化の研究」、「研究項目 A03：メディア教育・情報教育の高度化の研究」の三大研究項目を柱としており、ICT を活用した中国語教育・学習研究に関する先駆的な成果報告である。

同科研報告書掲載論文のうち、中国語教育・学習に関する研究事例は次の通りである。

論文タイトル	著者/所属	研究成果
Chinese Pronuciation Training System（中国語発音学習システムの開発について）（p.269）	Robert SANDARS/ 東北大学大学院	日本人学習者が中国語を話す際、最も習得困難であると考えられ、またコミュニケーション上の障害が最も起こりやすい発音に焦点を当てて、ネイティブ・スピーカー並びに日本人学習者の発音データベース構築とその音響分析を行い、その結果に基づき、四声、有気・無気の閉鎖音、音節末の-n・-ng 音について、発音の相違を視覚的に対照させながらインタラクティブに学習を支援するコンピュータソフトウェアを開発。発音指導に導入した結果、初歩的研究としては学習者の発音理解と改善に一定の成果が見られたが、教材として活用するには、発音評価の水準を更に精緻化し、評価の信頼度を向上させる必要がある。
中国語 CALL 教材の開発とオンライン化のための研究（p.397）	三枝　裕美/ 京都大学	中国語CALL教材の開発の過程で、いつでもどこでもマルチメディアの外国語教育を行うための、より効率的な、自発学習を促すオンライン教材のありかたを追求している。全ての中国語CALL教材及びドリルに音声と画像を付加した「パンダと中国語」教材を開発。学生の評価アンケートにより、時間的・空間的制約がないというインターネットならではの評価、音声・画像があってわかりやすいというマルチメディアのメリット、ゲーム感覚で反復練習可能というパソコンならではの特徴がプラスの評価として報告されている。逆に、

		出欠の評価を重視する必要性、データ容量と通信速度の問題によるストレス、パソコン端末ごとのトラブルや環境依存の問題、入門や旅行会話だけでなく文法項目増強の要望の根強さが今後の課題として報告されている。

なお、公募研究には、中国語教育における ICT 活用に関する研究として、平成 13 年度に「ネットワークを利用した双方向型中国語コミュニケーション授業の開発」（研究代表者：田邉鉄・北海道大学）がある。この他、「外国語教育」全体を対象としているものは複数あるが、いずれも英語、日本語を中心としており、中国語教育に特化した研究はほとんど見られなかった。

日本国内の代表的な中国語関連学会には、「日本中国語学会[20]」（以下、「中国語学会」と略）と「中国語教育学会[21]」（以下、「中国語教育学会」と略）の 2 つがある。「中国語学会」は、1946 年（昭和 21 年）に設立され、総会員数 1,165 名（2009 年 3 月 31 日現在）にのぼる、中国語学の分野において権威ある学会である。歴史が古いゆえに、語彙・文法・音声研究や日中間の言語比較研究等、伝統的な中国語学の研究分野において多大な成果を上げている。全国大会の分科会において、ICT 活用の事例、特にネットワークを活用したコミュニケーション型授業の研究事例や授業実践は、「文法」「語彙」「音声」「中国語史」等とは別の「総合・教育分科会（2002 年以降は「教育法開発部会」に改変）」に分類されている。日本の教育機関における ICT 活用の外国語教育が普及し始めたのは 90 年代後半以降であるが、中国語学会の全国大会予稿集が 2001 年以降に作成されているため、これ以降の予稿集掲載論文を分析した結果、ICT 活用の事例、特にネットワークを活用した研究事例や授業実践に関する論文発表は次の通りである。

表 3.1　中国語学会全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

全国大会開催年	コミュニケーション型ネットワーク活用	発表数	発表者	その他 ICT 活用	発表数	発表者
2001 年（第 51 回）	-	0	-	ネットワーク対応の字幕配信システムを利用した中国語のディクテーション教育について	1	鈴木靖(法政大学国際文化学部)
2002 年（第 52 回）	国際遠隔中国語チャットの実践と語学教育効果	2	砂岡和子（早稲田大学）他	発音習得補助システム開発への試み	2	湯山トミ子（成蹊大学）他
	遠隔授業における中国語学習の新しい可能性と問題点		牧田英二（早稲田大学）他	ネットワークを利用したリスニングトレーニングシステム ACTS について		鈴木靖(法政大学国際文化学部)
2003 年（第 53 回）	コーパスを利用した遠隔授業の分析及び教学支援の試み	1	牧田英二（早稲田大学）他	面向互动型汉语教学的语料库建设及相关支持平台的研究	4	劉松（早稲田大学）他
				中国語レベル分けのための Web 上での中国語能力診断テスト		村上公一（早稲田大学）他

[20] http://www.chilin.jp/
[21] http://www.jacle.org/

				バーチャル助手を活用したウェブ版中国語学習システムに関する研究		呉剣明(早稲田大学)他
				マルチメディアデータベース型語学教育のシステムの開発		石毛文茂(明海大学)他
2004 年 (第 54 回)	-	0	-	発話能力を測定するための中国語 Web テストの開発	1	村上公一(早稲田大学)他
2005 年 (第 55 回)	-	0	-	CALL 教授法による中国語学習の指導法及び実践的研究効果	4	朱虹(琉球大学)
				中国語声調の音響的特性に基づいた四声弁別 CAI 自習システム		砂岡和子(早稲田大学)他
				E-Learning による中国語教育の展開		沈国威(関西大学)他
				コンピュータ適応型テスト(Conputerized Adaptive testing)による中国語 Web テストの開発		村上公一(早稲田大学)他
2006 年 (第 56 回)	-	0	-	中国語のブレンド型学習導入のための学習管理について	3	鈴木靖(法政大学国際文化学部)
				音声合成技術の語学リスニング教育への応用と課題		砂岡和子(早稲田大学)他
				CALL から LMS へ		氷野善寛(関西大学)
2007 年 (第 57 回)	-	0	-	リスニング能力に応じた音声合成技術の語学教育への活用法	4	石見田均(富士通研究開発中心)他
				オンライン教育とカリキュラム改編の可能性		鋤田智彦(早稲田大学)他
				コンピュータによる正誤判定に柔軟性を持たせるには		鈴木靖(法政大学国際文化学部)
				地域文化に密着したマルチメディア教材の開発		渡邉ゆきこ(沖縄大学)
2008 年 (第 58 回)	–	0	–	教員の技術的負担を増やすことなく中国語のブレンド型学習を実現するには	2	鈴木靖(法政大学国際文化学部)
				中国語四声弁別 CAI 自習システムの利用効果の確認と学習過程の考察		孫琦(早稲田大学)他
2009 年 (第 59 回)	-	0	-	カナを媒介として中国語音節を学ぶコンピュータ教材(ポスター発表)	1	田邉鉄(北海道大学)
2010 年 (第 60 回)	コミュニケーション創出に寄与する教室内 Chat と発話支援者および教材の役割	1	拓殖大学 鄭偉，中央大学 植屋高史，日本大学 谷川栄子，早稲田大学 砂岡和子	コーパスに基づく名詞修飾構文の機能差に関する日中対照	1	東京大学(院) 西原史暁

一方、「中国語教育学会」は、「中国語学会」よりも新しく、2002 年に設立され、より「中国語教育の研究、普及、発展」に重点を置いた学会である。

表 3.2　「中国語教育学会」及び「中国語学会」会則の比較[22]

日本中国語学会　会則	中国語教育学会　会則
第 2 条［目的］ 本会は，中国語学及び関連諸領域の研究を通じ，言語の科学的研究と中国語教育に貢献することを目的とする。	第２条（目的） 本会は中国語教育に従事する者が研鑽と交流を深めるとともに、わが国における中国語および中国語教育の研究と、中国語教育の普及発展を図ることを目的とする。

全国大会は 2003 年以降、毎年開催されており、初中等教育機関における中国語教育の研究報告も比較的盛んに行われている。ただし、ICT 活用については、個人学習用のソフトウェアアプリケーションやコーパス等の事例が多く、ネットワーク活用の交流型学習・教育に関する研究はまだ少ない。中国語教育学会の全国大会予稿集は 2010 年度に初めて作成されたため、これ 2002～2009 年については、同学会公式ホームページに掲載されているプログラムを参照した。

表 3.3　中国語教育学会全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

全国大会開催年	コミュニケーション型ネットワーク活用	発表数	発表者	その他 ICT 活用	発表数	発表者
2003 年 (第 1 回)	該当研究発表なし			該当研究発表なし		
2004 年 (第 2 回)	該当研究発表なし			該当研究発表なし		
2005 年 (第 3 回)	該当研究発表なし			パソコン・インターネットを活用した中国語教育	1	中西千香 (愛知大学)
2006 年 (第 4 回)	該当研究発表なし			該当研究発表なし		
2007 年 (第 5 回)	該当研究発表なし			パソコン・インターネットを活用した中国語教育−応用編	3	中西千香 (愛知大学)
				课堂教学中运用 Podcast 辅助发音教学之实践报告		郭修静 （大阪外国語大学）
				ポッドキャストによる中国語音声教材及びテキスト教材のインターネット配信について		清原文代（大阪府立大学）
2008 年 (第 6 回)	該当研究発表なし			該当研究発表なし		

[22]日本中国語学会（http://www.chilin.jp/）及び中国語教育学会（http://www.jacle.org/）による。

2009 年 (第 7 回)	学生を主体とする異文化交流遠隔教育シラバスデザイン	1	林虹瑛(東京外国語大学 GCOE リサーチフェロー),林俊成(東京外国語大学)	木構造図を利用したピンイン分析と日本人学習者に対する中国語音韻教育-CTT と Mindmap を応用して-	1	丁雷(広島大学)
2010 年 (第 8 回)	日中高校生の交流型学習のための中国語学習支援サイトの構築	4	杉江聡子 (北海道大学)	異文化理解教育としての語学教育-インターネット流行語を教材として	2	山口　莉慧 ((株)フォーラム)
	遠隔システムを用いたコミュニカティブアプローチ語学教授法の実現と比較		林虹瑛(東京外国語大学 GCOE リサーチフェロー),林俊成(東京外国語大学)			
	中国語学習のための ID に基づくブレンディッドラーニングの開発の試み		趙秀敏(東北大学)他	ピンインの自律的な習得を促すカナの利用と学習教材の開発		田邉鉄(北海道大学)
	e-Learning を利用した語法学習の試み-授業同期型演習問題の導入と運用効果		湯山トミ子(成蹊大学)			

このように、日本国内の大学を中心とした高等教育機関における中国語学習・教育研究分野では、ICT 活用、特に NBLT のための中国語学習・教育は、まだ十分に普及しているとはいえない状況にある。個人用パソコンやネットワークが普及したのは 1995 年以降であり、これらのツールを活用した外国語学習・教育は、複数の領域をまたがる新しい研究分野として、15 年程度の歴史しかない。ビジネス、観光等の産業界では、経済のグローバル化とシステム開発やネットワーク技術の進歩の速度に比例して、コンピュータやインターネットを活用した外国語学習が急速に普及しているが、学術研究分野における ICT 活用の中国語学習・教育が認知され、英語教育・学習と同水準まで普及するには、更に時間が必要であろう。

中国語教育情報化の代表的な研究会としては、「漢字文献情報処理研究会[23]」がある。同会は、「コンピュータの日本語環境における多言語処理・漢字処理が困難であったこと」や「コンピュータへの理解不足」による、日本国内の東洋学分野における情報化の後れを取り戻すべく設立された、同研究分野の先駆的な研究会である。同会ホームページの設立趣旨にもある通り、科学技術と ICT の急速な発展により、一般的なパソコンでも簡単に中国語を扱えるようになり、米国・中国・台湾・シンガポール等では、急速に東洋学分野の電子化が進展しているのに比べて、日本は大きく立ち遅れており、世界の潮流から取り残されつつあるという危機的状況にある。「東洋学分野におけるコンピュータ利用方法の研究・紹介および関連情報の交換／研究・教育現場でのコンピュータ活用・普及の促進／関連諸分野の人材交流／海外における同種の学会、プロジェクトとの積極的な交流・協同活動」

[23] http://www.jaet.gr.jp/

を目的として、オンライン上の「バーチャル研究会」を指向し、掲示板システムでの各種交流、意見交換、情報公開を中心に活動している。2000 年 10 月より、機関誌「漢字文献情報処理研究」を毎年発行しており、東洋学研究・教育の電子化に関する論文と最新情報が紹介されている。

表 3.4　漢字文献情報処理研究会全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

年度	発表数	発表題目	発表者
2009	1	検索エンジン(Lucene)による中国語用例抽出最適化―北京大学中国語語料庫を利用して	詹善斌，小川利康(早稲田大学)
2008～2006	該当なし		
2005	2	講読授業における検索エンジン活用 Podcast と中国語教育	小川利康(早稲田大学) 清原文代(大阪府立大学)
2004～2000	該当なし		

なお、中国語関連以外の学会・研究会でも、ICT 活用の中国語教育に関する研究成果報告は行われている。「日本教育工学会（JAPAN SOCIETY FOR EDUCATIONAL TECHNOLOGY 、通称 JSET）[24]」、「教育システム情報学会（Japanese Society for Information and Systems in Education、通称 JSiSE）[25]」、「情報教育研究集会 [26]」のような情報処理・システム開発等の高度科学技術分野を中心とする学会・研究会でも、外国語教育情報化に関する研究発表が増えてきている。

「日本教育工学会（JSET)」は、人文社会系、理工系、人間に関する学問分野を融合した「教育工学」を対象に扱う学会である。同学会のホームページによれば、「教育工学」を、「人と人がかかわり、教え・学びが生じるあらゆる場面の中で生じる問題に対して、理論と実践を踏まえて問題解決情報を提供する学問」ととらえ、狭い意味の「工学」だけでなく、「教育学、心理学、社会学、生理学、情報科学、建築学などさまざまな分野からアプローチを取り入れ、協調的に進める必要」があり、「ひとつの対象領域や方法論をもつ研究者集団ではなく、複数の方法論をお互いに認め合った『研究者の束』」であるとしている。1984 年 11 月設立、2009 年 3 月時点での会員数は 2,550 名で、教育情報化推進が開始された 90 年代後半と比べると、約 2 倍に増加している。機関誌「日本教育工学会論文誌」（年 4 回)、「日本教育工学会誌（ショートレター特集)」（年 1 回)、及び英文論文誌「Educational Technology Research」（年 1 回）を発行しており、全国大会（年 1 回)、シンポジウムや研究会（年数回）を開催、ニューズレターの発行等、積極的に研究成果を公表している。

[24] http://www.jset.gr.jp/
[25] http://www.jsise.org/
[26] 2005 年以前は「情報処理教育研究集会」という名称であった。

表 3.5　JSET 全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

年度	発表数（件）	発表題目	発表者
2009	1	学習者の母語と日本語の差異に着目した漢字学習システムにおける漢字 DB サーバの構築	林 敏浩，垂水 浩幸（香川大学），盧 颯（寧波工程学院），富永 浩之，山下 直子（香川大学），山崎 敏範（放送大学）
2008	3	中国における ICT 活用授業プロジェクト「跨越」の実践―大学による教師共同体の支援とシステム的なインストラクショナルデザインを通して	張 海（大阪大学），何 克抗（北京師範大学），前迫 孝憲（大阪大学）
		外国語 CALL 授業におけるチャータボットの活用	田邉鉄（北海道大学）
		ePen－An innovative tool for teaching and learning Chinese calligraphy	Chin-Hwa Kuo, Wen-Bing Horng, Ben-Huang Chang, Chen-Hsiang Chen（Tamkang University）
2007	2	中国語発音入門 CALL 教材の開発と評価	高安 真理子，平岡 斉士，坪田 康，壇辻 正剛（京都大学）
		ICT を活用した中国語 CALL 教材の開発およびその実践的利用	坪田 康，津志本 陽，赤松 紀彦，壇辻 正剛（京都大学）
2006～2004	公開情報無し（ホームページリンク無効）		
2003	1	中国語語順学習支援システムの開発	平山亮，根岸洋司，小坂武史，星野裕子（金沢工業大）
2002～2000	公開情報無し（ホームページリンク無効）		
1999	該当研究発表なし		
1998	1	中国語教育初期におけるヒアリング・発声重視のコンピュータ教材の開発	上地宏一・森本真紀子・関根健三郎・重松淳(慶應義塾大学)

「教育システム情報学会」は、「教育分野におけるコンピュータ利用等に関する学術研究・調査および情報交換を行い、コンピュータの調査・研究を援助し普及することを目的」とした学会である。1974 年 8 月に設立され、会員数は 2,000 名近くにのぼる。全国大会（年 1 回）での研究発表会、日本語論文誌（年 4 回）及び英文誌（年 1 回）の刊行、講演会や研究会（年 6 回）の開催、国内外の教育分野におけるコンピュータ利用に関する調査及び資料の収集、研究業績の表彰・関連団体との連携・研究論文のデータベース化等を通じて、広く積極的に活動している。

表 3.6　JSiSE 全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

年度	数(件)	発表題目	発表者
2010	2	中国語学習のための ID に基づくブレンディッドラーニングの試行と評価	趙秀敏（東北大学大学院），今野文子(東北大学教育情報基盤センター、メルボルン大学高等教育研究センター、日本学術振興会特別研究員),稲垣忠(東北学院大学)，大河雄一（東北大学大学院），三石大（東北大学大学院、東北大学教育情報基盤センター)
		多様な漢字学習システムを利用できるための学習環境の設計と開発	林敏浩・垂水浩幸（香川大学)，盧颯(寧波工程学院)，富永浩之・山下直子（香川大学)，山崎敏範（放送大学)
2009	該当なし		
2008	1	moodle 上に構築した遠隔協調字幕付与支援システムによるＤＶＤの多言語字幕化	大倉孝昭(大阪大谷大学教育福祉学部)，廣瀬洋子（メディア教育開発センター)
2007	該当なし		
2006	1	e-Learning 環境における字形認知漢字学習システムの利用評価	柳 定浩,林 俊成（東京外国語大学)，山本 樹（尚美学園大学)
2005	1	中国語と日本語の差異に着目したドリル型日本語学習システムの開発	盧颯(香川大学工学部)･山下直子(香川大学教育学部)・富永浩之(香川大学工学部)・林敏浩(香川大学総合情報基盤センター)・山崎敏範(香川大学工学部)
2004	1	3 次元バーチャル空間を用いた空間認知体系による中国語マルチメディア教材の開発	尹明，楊達（早稲田大学）他
2003～1998	該当なし		

「情報教育研究集会」は、「国公私立大学等の教職員の参加を求め，教育内容，教育方法，教育支援方法等について研究協議する機会を与え，もって大学等教職員の資質の向上と教育および教育支援の充実を図ることを目的とする研究集会」（学会公式ホームページより）である。1988 年に「情報処理教育研究集会」として開始され、以降、国立大学情報（処理）教育センター協議会設置大学により、毎年交替で開催されている。2009 年 7 月時点で、国立大学法人 12 大学の情報（処理）教育センター[27] により構成されている。

[27] 北海道大学情報基盤センター／室蘭工業大学情報メディア教育センター／東北大学教育情報基盤センター／東京大学情報基盤センター／名古屋大学情報メディア教育センター／名古屋工業大学情報基盤センター／京都大学学術情報メディアセンター／和歌山大学システム情報学センター／大阪大学サイバーメディアセンター／広島大学情報メディア教育研究センター／九州大学情報基盤研究開発センター／九州工業大学情報科学センター。

表 3.7　情報(処理)育研究集会全国大会　ICT 活用の中国語学習・教育に関する研究発表

年度	数(件)	発表題目	発表者
2009	1	NBLT による中国語学習支援サイトの構築	杉江聡子，田邉鉄，山本裕一(北海道大学)
2008		該当研究発表なし	
2007	1	留学生向け中国語教材作成(情報リテラシー)	平川幹和子（福岡国際大学 国際コミュニケーション学部 デジタルメディア学科)，張偉（(株)アイク)，牧幸浩，古市恵美子（福岡国際大学 国際コミュニケーション学部 デジタルメディア学科)
2006	該当研究発表なし		
2005	公開情報無し（ホームページリンク無効)		
2004		日中同形語に注目した日本語学習支援システム:Wiki を利用した文脈の中での語彙学習用教材開発	佐藤　修(北海道大学･院)
2003～2001	公開情報無し（ホームページリンク無効)		
2000		授業支援におけるストリーミング技術の活用と導入	吉川剛･樋口裕嗣(愛知大学)
1999	公開情報無し（ホームページリンク無効)		
1998	2	中国語 CAI（Windows 95 対応）の開発と導入	吉川剛，樋口裕嗣（愛知大学)
		テレビ会議システムによる遠隔地授業−中国語入門を事例として−	大元誠，園田貴章，山下宗利，角和博，近藤弘樹（佐賀大学)

一方、海外の中国語教育関連学会では、日本国内とは異なり、ICT や NBLT に関する相当数の研究事例が報告されている。この研究分野を専門とする学会もあり、世界各国での中国語教育熱、特に ICT、NBLT を活用した研究の急速な発展が感じられる。中国語教育情報化に関する海外の代表的な学会・国際会議としては、「世界漢語教学学会[28]」、「中文教学現代化学会[29]」、「国際漢語電脳教学検討会[30]」等がある。

「世界漢語教学学会」は、世界の中国語教育研究分野において最も代表的な学会である。1987 年に設立され、会員数 3221 名、2010 年までに合計 9 回の国際シンポジウムを世界各国・地域で開催している。

中文教学現代化学会は、特に中国語教育情報化や e ラーニングに特化した研究分野における先進的な学界である。1995 年に設立され、2000 年以降隔年で国際シンポジウムを開催している。

[28] The International Society for Chinese Language Teaching、通称 ISCLT（http://www.shihan.org.cn/）
[29] The Association for Modernization of Chinese Language Education、通称 AMCLE（http://www.amcle.org/）
[30] The International Conference and Workshops on Technology and Chinese Language Teaching in the 21st Century、通称 TCLT（http://www.tclt.us/）

表 3.8　中文教学現代化学会（AMCLE）　過去の国際シンポジウム

年度	開催地	論文集タイトル（シンポジウムの主要テーマ）
1995	米国・サンフランシスコ	《论文提要》（論文要綱）
2000	中国・桂林	《现代化教育技术与对外汉语教学》（現代化教育技術及び外国人に対する中国語教育）
2002	中国・南京	《E-Learning 与对外汉语教学》（E-Learning と外国人に対する中国語教育）
2004	中国・北京	《数字化对外汉语教学理论与方法研究》（外国人に対する中国語 e ラーニングの理論と方法の研究）
2006	中国・香港	《数字化汉语教学的研究与应用》（外国人に対する中国語 e ラーニングの研究と応用）
2008	韓国・大田	《数字化汉语教学进展与深化》（中国語 e ラーニングの進展と深化）
2010	中国・煙台	《数字化对外汉语教学实践与反思》（外国人に対する中国語 e ラーニングの実践と反省）

※（　）内の訳は筆者による。

「国際漢語電脳教学検討会」は、主にアメリカを中心とした、ICT 活用の中国語学習・教育に関する国際シンポジウムである。ICT 等の高度科学技術と中国語学習・教育との架け橋となり、技術活用の中国語教育（technology-based Chinese language）を推進することを目的としている。2000 年以降隔年で国際シンポジウムが開催されている。

表 3.9　国際漢語電脳教学検討会（TCLT）　過去の国際シンポジウム

年度	開催地	研究対象領域・主要テーマ
2000	Hamilton College	• Issues on multimedia and web course material design, on-line course delivery • Issues on interactive multimedia instructional materials for the Chinese language at different proficiency levels • Issues on distance learning programs and curriculum design • How to move multimedia and web-based Chinese courses to the next level • How to bridge the gap between technology and teaching methodology, as well as curriculum • How to evaluate and assess existing multimedia and web-based materials in the Chinese language teaching field • Other topics relating to teaching technology
2002	Yale University	• Multimedia and web-based course design • On-line course delivery • Issues on interactive multimedia instructional materials for Chinese language teaching • Distance learning programs and curriculum design • Language testing with multimedia program on Internet • Roles of instructors in on-line courses • How to increase interactivity in multimedia and

		web-based materials • How to evaluate and assess existing Chinese multimedia and web-based materials • Other related topics to Chinese language teaching and technology
2004	Columbia University	• Digital instructional material development • Web-based course design • Research on multimedia instruction and language acquisition • New technology and its application to teaching Chinese as a foreign language • Distance learning programs and curriculum design • Language testing on Internet • Roles of instructors in computer-based language and culture courses • How to increase interactivity in multimedia and web-based teaching materials • How to evaluate and assess existing Chinese multimedia and web-based materials • Other related topics to Chinese language teaching and technology
2006	University of Southern California	
2008	University of Macau	
2010	Ohio State University	

３.２　ICT 活用の中国語教育・学習のメリット・デメリット

上記の先行研究からわかるように、中国語教育・学習における ICT 活用には、オンライン学習用の公開コンテンツ（デジタル教材）としての e ラーニングサイト、LMS、SNS（Social Networking Service）・電子メール・BBS による非同期型の直接交流活動、文字チャットやビデオチャット（Windows メッセンジャーや Skype 等）を利用した同期型の直接交流活動、ビデオ会議システムを利用した比較的大規模な遠隔地間の直接交流活動等がある。また、教師個人が運営する小規模な外国語学習用の WEB サイトでも、Moodle や Wiki 等の CMS（Course／Contents Management System）や LMS の導入が進められている。

これら ICT 活用の e ラーニングは、大きく 2 つに分類できる。１つは、学習者の自主学習支援を目的として、学習コンテンツを公開したり、オンラインテストを実施したりする e ラーニングサイトであり、学習コンテンツの公開と学習者管理・成績評価までを一元化したシステムも増えてきている。もう 1 つは、遠隔協調学習を目的とした取り組みであり、高精細映像とクリアな音声を配信できるビデオ会議システム（Polycom [31] や Lifesize [32]等）を利用して、国内外の複数地点を広帯域ネットワークで接続し、大画面に相互の教室内の映像を表示して同期型の遠隔授業を行うものである。これには、個

[31] Polycom 社（http://www.polycom.co.jp/）から販売されているビデオ会議システム。本体にカメラが内蔵されており、テレビやプロジェクタとインターネットのブロードバンド回線を接続するだけで、世界中どこからでも映像と音声による相互通話を行うことが可能。

[32] 日立ハイテクノロジーズ（http://www.hitachi-hitec.com/jyouhou/hitec-vision/product/）で製造されているテレビ会議システム。HD 画質のビデオ品質でコミュニケーションの活性化を促進するハイエンドモデルで、最大 6 拠点に接続可能な内蔵 MCU（多地点接続機能）を搭載。PC データ送信機能を標準搭載しているため、中規模から大規模でのテレビ会議に適しており、低コストでリアルなコミュニケーション空間を構築し、海外拠点との遠隔会議、工場との製品会議、商品企画会議、大学での遠隔講義等、国内外で広く活用されている。

別のパソコン端末ごとにビデオチャットを利用して行なうという小規模なものもある。

自主学習支援タイプの場合は、学習コンテンツ編集上の利便性が高いことや、学習者の成績管理、理解度や進捗状況、習得レベルの解析等、教師にとっての学習者管理上のメリットが非常に大きいことが挙げられる。学習者にとっては、重い教科書や辞書が不要となり、いつでもどこでもアクセス可能で時間的・空間的制限がないこと、成績や習得度の分析も自動的に行われて、自分の学習管理やレベル分析が簡単になること等のメリットがある。しかし、教科書を電子化しただけのデジタル教材やゲームタイプの練習問題等のコンテンツを公開して成績を評価するというだけでは、一方向型の情報提供サイトにとどまり、コミュニケーション能力の育成を重視した外国語教育情報化の目的には十分な支援ツールとは言えない。

遠隔協調学習タイプの場合、同期型であれ、非同期型であれ、学習者間の直接コミュニケーションを実現する舞台として、非常に有効性が高い。しかし、最大の課題はコストである。ビデオ会議システム本体で最低でも約 60 万円（PolycomVSX5000 の場合）、教室内を高精細映像で表示するための大型ディスプレイに数十万～100 万円程度必要である。高品質の映像・音声配信のためには、日本と海外に跨る広帯域ブロードバンドネットワークを使用するため（永岡, 2008）、専門機関への協力依頼も必要となる。ネットワーク及びシステム管理者、機器を操作する技術者等の人件費もかかる。相手国も同等の人材・設備・技術・資金を備えていなければならない。これを考えると、外国語教育専門で情報技術力の高い大学・研究機関で大規模な研究費がなければ、ビデオ会議システムによる協調学習環境は構築できない。一方、Skpe 等を利用した小規模なビデオチャットシステムは、学内のパソコン端末とインターネット回線、フリーのソフトウェアを利用して低コストで導入できるが、通信速度によってはパケットロスによる音声・映像の乱れが発生すること、画面が小さく臨場感に欠けること、個別のパソコン端末で孤立してしまい全員がひとつの教室で協調学習するという雰囲気になりづらい等のデメリットがある。

いずれの手法を採用するにせよ、常に現実的な課題はあるものの、ICT 活用の外国語授業に対する学習者の反応は概ね肯定的であり、学習効果が実感されている。母語話者とのインタラクション活動があることで、自分自身の課題に対する気付き、コミュニケーションの楽しさ、相手の実力を目の当たりにすることで良い意味での競争心を抱いている場合が多く（西堀, 2005-2008）。また、クラスメートや親しい先生相手にコミュニケーションをとる場合とは異なり、「本当のコミュニケーションの場」という緊張感も強く意識している（林, 2008）。これらはいずれも、インタラクション活動が外国語習得のための足場作りとして有効であることを示していると言えよう。

ICT 活用の中国語教育・学習により、学校の教室内という限定的で閉鎖的な学習環境では難しい、異文化の世界に開放されたコミュニケーションの場、「協調学習場」（西堀, 2005）を生み出すことが可能となる。写真や映像等の素材や各種マルチメディアツールを活用してフレキシブルに編集可能な教材を作成すれば、学習内容の興味を喚起しやすく、理解を助けられる。何よりも、インターネットの向こう側に「本物の」コミュニケーションの相手がいるという現実のインタラクションがあるということは、にあらかじめ設定されたコンピュータの問いに答える模擬的なコミュニケーション活動とは全く異なる。学習者自身が学んだ言語を真に活用し、「生きた」意味のやり取りが達成

できたことによる自信や喜びを実感できる機会となる。

当然のことながら、ICT 活用の学習コンテンツやマルチメディアツールそのものが外国語教師にはなり得ないし、実際に教室内にいて現実のインタラクションを先導する教師の存在が必要なことは明らかである。しかし、ブレンディッド・ラーニング（Blended Learning）のための「使える資料」、新たに情報化に対応しようと試みる教師にとっての「強力な右腕」を増強していくことには大いに意味がある。開発したコンテンツやシステム構築のノウハウをインターネット上に公開し、情報共有するという積極的な取り組みを継続することで、コンテンツの内容が更に豊富になり、いずれデータベースとして十分な量が蓄積されれば、高校中国語教育に関わる教師全体にとって貴重な情報資産にも発展し得る。

本章では、ICT 活用の中国語教育・学習に関する先行研究について、国内外の学会発表の記録に基づき分析した。第 4 章では、ICT 活用の授業を実践するために構築した高校生向けの中国語学習支援サイトについて、構築の目的と概要、必要システムとソフトウェア、準備作業、コンテンツと特色、ユーザーと画面デザインについて述べる。

第４章　中国語学習支援サイト構築

４.１　「中日学生交流網」構築の目的と概要

本研究では、日本国内の高等学校で中国語を第二外国語として選択している学習者がインターネットを通じて中国の高校生と直接交流する機会を増やし、母語話者とのインタラクションを通じて、外国語学習における ICT 活用技能の向上、意識の変化（気付き）、学習意欲（動機付け）にどのような影響を与えるのかを探索することを目的として、学習支援サイト「中日学生交流網」を構築した。必修ではない第二外国語であるという理由で、ICT 環境・設備等の条件や人材確保の面で、学校側からの理解や積極的な支援が得にくい場合でも、教師個人の負担をできるだけ低く抑え、時間と労力をかけず低コストで、比較的手軽に構築、運営、管理、保守できることを重視した。

第 3 章で述べた先行研究では、主に外国語大学で中国語を専攻している学生や中国語を公用語とする国・地域（中国本土及び台湾、香港、シンガポール、世界各地の華人居住区等の中華文化圏を含む）への留学経験者等、習得度の高い学習者を対象としている事例が多い。しかし、高校の第二外国語で中国語を選択している学習者は、大部分がゼロから学習を開始する入門レベルから学習歴半年～1 年の初級レベルまでの間にいる。このレベルの学習者は、対面式の会話を同期的に行うには力不足であるが、だからといってインタラクションが不可能なわけではない。教師の一存で、一定以上のレベルに達しなければ母語話者とのコミュニケーションはできないと判断し、学習者の可能性を閉ざしてはならない。中国語を選択した高校生たちは、早く自分たちが学んだ中国語を使って中国人と交流してみたいと感じており、教師はその願いを実現するための機会を授業内外の活動で増やす努力をしなければならない。ただし、高校は大学等の中級レベル以上のクラス編成と異なり、１クラスの人数が比較的多く（十数名～二十数名）、1 回の授業時間が 50 分間と短いため、限られた短時間内に全員が均等に発話する機会を与えることは難しい。したがって、「話す」、「聞く」技能を中心とする同期型のインタラクションよりも、「読む」、「書く」技能を中心とした非同期型のインタラクション活動が適している。非同期型であれば、言語情報のインプットの面で、何度も読み返したり語句の意味を調べたりする猶予があり、アウトプットの面では、学習者同士で相談したり、時間をかけて語彙や文法の組み合わせを考えたりして、マイペースで進めることができる。習得が早く、アウトプットが得意な学習者は、複雑な表現に挑戦し、書き込みを増やして母語話者とのやり取り回数を増やしてもよいし、アウトプットが苦手な学習者は、簡単な語彙、文法、テキストにある表現等を使って、復習しながら少しずつ進めればよい。活動時間に余裕があれば、レベル差のある学習者どうしをペアにして、相互に助け合い、学び合いながら、協調学習を行うのもよい。クラス内で学習者のレベルに差異があっても、比較的ストレスの少ない学習環境を提供することができる。

「読む」、「書く」技能を中心としたインタラクションに適したツールとしては、電子メールや BBS が代表的である。ただし、インターネットの性質上、完全に匿名の自由活動にしてしまうと、授業として全体の統制が取れなくなる恐れがあるため、遊びではなく授業の一環であることを学習者に注意喚起すべきである。電子メールは 1 対 1 のインタラクションを深める上では効果的であるが、複数名どうしの交流には向かない。教師は e ラーニ

ングサイトの運営管理者として、交流しやすいテーマやトピックの範囲を選定し、インタラクションの過程を確認しながら、人数のバランスを考慮して適切に配置する、言語上の問題で行き詰っていれば適宜アドバイスしてできるだけスムーズにやり取りが進むよう流れを調整する等、インタラクションを支える影の進行役としての役割を果たさなければならない。この作業を行いやすいのは、トピックスレッド型の BBS である。

４.２　必要なシステムとソフトウェア

日本、中国ともに高等学校のパソコン端末環境は Windows OS が主であるため、北海道大学の UNIX サーバ上に e ラーニングサイトを構築した。学習者は高校のパソコンから WWW ブラウザを介して「中日学生交流網」を訪問・閲覧し、インタラクションのための文字入力等の操作を行う。従来、個人が設計するホームページ型の e ラーニングサイトでは、HTML オーサリングツールで作成した HTML ファイルやグラフィックソフトで加工した画像等の素材ファイルを、FTP クライアントソフト等を利用してサーバにアップロードするという手法が一般的であった。この場合、HTML 作成に必要な各種ソフトウェアをインストールした特定のパソコン端末から、サイトのデータを保持・管理している担当者が、コンテンツの追加・変更・削除等の編集作業を行なう必要があり、融通性の低いサイト管理環境であった。このため、近年では、MySQL データベースを利用し、サーバ上にインストールすれば、WWW ブラウザから直接編集操作可能な、オープンソースの CMS ソフトの利用が増えてきている。教育目的として普及している Moodle、ブログソフトとして普及している WordPress、BBS やブログ等の多機能型 CMS の Joomla!や Magic3 等が代表的である。本研究では、デザインテンプレートが豊富であること、HTML ファイル作成・編集や BBS 等の初期搭載機能が揃っていること、パスワードによるログイン権限付与等のユーザー管理、セキュリティ管理が容易なことから、Magic3（バージョン 3.1.8.3）を使用している。

図 4.1　Magic3 の管理画面

４.３　サイト構築の準備

第一に、サイトを構築するためのサーバを確保する必要がある。本研究では、UNIX サーバとして北海道大学情報基盤センターに設置されている学内サーバの一部を使用している。一般的には、高等学校の学内サーバや、市販のレンタルサーバで代用可能である。レンタ

ルする場合、無料のサーバレンタルサービスも存在するが、広告の表示や動作環境条件等に制限があることが多いため、有料でも信頼性の高いレンタルサーバを探すことが望ましい。また、事前に、導入を予定しているソフトウェアやプログラムが動作するか、各種条件をシステム管理者やレンタルサーバ運営会社に確認する必要がある。

第二に、MySQL データベースの作成が必要である。Magic3 を使用する場合、ソフトウェア本体のインストールに先だって、まず MySQL データベースの作成が必要である。phpMyAdmin を利用すると、サーバのコマンドライン等の専門知識がなくても、比較的簡単に MySQL データベースを作成できる。phpMyAdmin は、公式ホームページからダウンロードして入手できる。

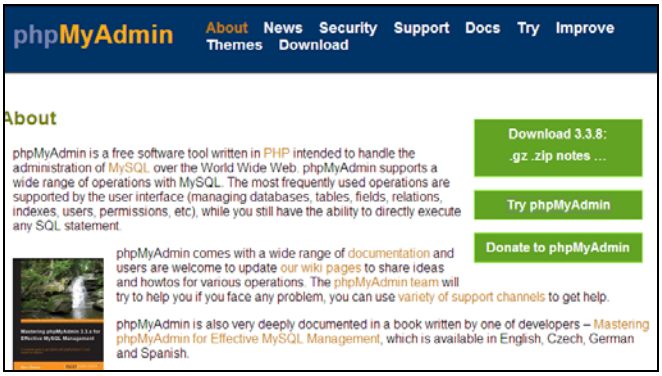


図 4.2　phpMyAdmin 公式ホームページ（http://www.phpmyadmin.net/home_page/index.php）

第三に、CMS ソフトウェア本体を入手し、インストールする必要がある。Magic3 は、公式ホームページからダウンロード可能であり、インストール方法や必要な環境条件等の詳細情報も公式ホームページ上で公開されている。HTML ファイル作成及び BBS 管理機能は初期設定で Magic3 に含まれており、ブラウザを通じてコンテンツページの作成、編集、削除を行うことができる。情報セキュリティに対する配慮及び中国語の授業で使用するための e ラーニング教材という位置付けから、パスワードによるログイン権限付与でユーザー管理する必要があるが、Magic3 では、サイト本体のログイン権限と BBS のログイン権限とを個別に設定できるため、同一サイト内でコンテンツを利用するユーザーを分類したり、一部のみを制限したりすることも可能であり、サイト管理上の利便性が高い。

図 4.3　Magic3 公式ホームページ（http://www.magic3.org/doc/）

インストールを行う上で、教師自身がサーバの設定やソフトウェアのインストールについて権限を持たず、サイト構築のための準備作業ができない場合は、サーバ管理者権限を持つ教師あるいは技術スタッフに協力を依頼し、MySQL データベースの構築及び Magic3 本体のインストールまでの作業を完了する必要がある。

費用について、市販のレンタルサーバを使用する場合は多少（月額で数百円～数千円程度）の使用料実費が発生するが、学内のサーバを使用する場合であれば、Magic3 等のオープンソースの CMS ソフトウェアは無料のため、e ラーニングサイト構築に際して特に費用は発生せず、構築・運営コストの面でも非常に経済的である。

４.４　コンテンツと特色

インターネット上で日本と中国の高校生どうしが中国語でインタラクションを行うためには、パソコンで中国語（簡体字）を入力できるという前提が必要である。本研究では、あくまでも日本国内の教師・学習者のための中国語教育・学習支援サイトを構築することが目的であるため、主要コンテンツとして、パソコンを利用した中国語入力・表示の技術習得のための自習用コンテンツ及び中国語によるインタラクションのための交流用コンテンツを設計した。

・自習用コンテンツ

（１）ピンインによる中国語（簡体字）入力技術習得支援。パソコンでの中国語入力環境設定方法及びピンイン入力方法の説明と、簡単な自己紹介文の入力練習（一部、Microsoft Word を使用）。

（２）教科書等で学んだ単語・短文の入力練習問題。ブラウザを通じてオンラインでできるピンイン入力練習問題を作成。ツールとしては、多言語対応で HTML ファイル形式の自動採点型練習問題を作成できる HotPotatoes [33] を利用した。

・交流用コンテンツ

（１）異文化比較投票アンケート（投票＋コメント記入機能付きアンケート）。中国・日本の行事や高校生の日常生活に関する話題について、教師側が複数選択肢を設定し、学生に投票してもらう。投票と同時に具体的なコメントを記入できる。先生の話、教科書、新聞、テレビ等のメディアを通じて見聞きする内容に基づき、実際に現代社会に生きる高校生どうし、生の感覚や意識を直接知るためのコンテンツ。

（２）中文 BBS（多言語対応の BBS）。主に中国語（補助的に日本語）を用いて、中国と日本の高校生どうしが自由に交流する BBS。中国語学習の一環として授業で使用することを考慮し、主なトピックは教師が設定するが、インタラクションの内容や流れについては学習者主導で、教師による統制はしない。自己紹介（氏名、年齢、学年、趣味、地域、行事、学校生活等）を中心に、学習者が過去に学んだ中国語を実際のコミュニケーションに応用して相互交流するためのコンテンツ。

---

[33] カナダのヴィクトリア大学で開発されたソフトウェア。自動採点型の WEB ベースの練習問題 6 種類（選択問題、並べ替え問題、穴埋め問題、マッチング問題、クロスワード、複数問題ページの統合）を作成できる。

・学校紹介用コンテンツ

（1）「写真・映像ギャラリー」と「年賀状」。「写真・映像ギャラリー」は、より深く相手を知り、リアリティのある交流を実感してもらうために、中国側と日本側、それぞれの授業風景写真や、中国語関係の発表会などイベントがあった際の記録を写真と動画で紹介するコンテンツ。「年賀状」は、授業中に中国の年賀状（イラスト付きのカード）を配布して、2010 年の年賀状を中国語で書く練習をしたので、クラスの中からいくつかを選んで紹介したもの。

４.５　ユーザーと画面デザイン

本研究の段階では、ユーザーは中国と日本の高校生で、互いに第二外国語として中国語、日本語を学んでおり、学習歴の短い入門～初級レベルの学習者を想定している。この年代は日常的にインターネットに親しんでおり、パソコン以外の各種モバイル端末、携帯電話、ゲーム機などでインターネットを利用している者も多い。また、高等学校での情報科目の必修化や英語科目での CALL 教室利用が増えてきていることから、インターネットを利用した情報閲覧・収集、タイピング・文字入力に対する抵抗感や支障が少ない。また、見た目の「カワイさ」がやる気や閲覧の意欲に影響すると考えられるため、文字情報過多で無機質なイメージのデザインになることを避け、親しみやすい暖色系・パステルカラー等を用いた配色やデザインテンプレートを採用した。原則的には日本人学習者向けの中国語学習支援サイトであるが、コミュニティーサイトとして有効に機能するよう、相手校の要求にも配慮した。相手校のユーザーは、日本語を学び、日本文化に関心が高い中国の高校生であるため、日本語学習の一助となるよう、共通利用するメニュー、説明、注意事項は日本語だけでなく中国語の対訳も表示させ、日本側の学習者が BBS で交流する際には、できる限り日本語と中国語で併記するよう指導した。

図 4.4　「中日学生交流網」トップページ（ログイン後）

以上、本章では、中国語学習支援サイト「中日学生交流網」の構築の目的、必要な準備、主要コンテンツの内容と特徴、ユーザーとデザインに関する配慮について解説した。現実には、e ラーニングサイトを構築する場合、教師と学習者が利用可能な学校のパソコン環境や設備機器等、個別のインフラ整備の程度によって必要な作業も異なるため、それぞれの環境でまずは構築を試み、作業の過程でトラブルが発生した場合には個別に対応することになる。想定外の作業が発生する可能性もある。そのため、一概にどのシステムとソフトウェアを使用すれば万全とは言い難い。このような、「走りながら考える」式の作業が伴う ICT 活用の分野では、「パソコン」と聞くや、「専門知識や技能が必要で、詳しくないので手を出しにくい」と感じてしまう教師が多いことも確かである。しかし、教育情報化が推進される中で、これらの専門知識や技能を備えた教師や技術者が身近に多数配置されるようになってきているはずである。もはや、やる気と根性のある教員が孤軍奮闘する時代ではない。担当教科や職位の垣根を越えて、周囲の様々な人材との人的ネットワークを広げ、互いに協力して ICT 活用のための環境を構築、運用しながら、より効果的な外国語教育・学習のあり方を模索する態度が必要である。第 5 章では、「中日学生交流網」を活用した授業実践の詳細について報告する。

第５章　NBLT による交流型中国語授業

５.１　授業実践校の紹介

本研究では、北海道札幌国際情報高等学校[34]（以下、「国際情報高校」と略）と北京市求実職業学校[35,36]（以下、「求実高校」と略）との間で、NBLT（Network-Based Language Teaching）による交流型の授業を実践した。国際情報高校は、筆者が中国語の授業を担当している札幌市内の高校である。1995 年設立の比較的新しい高校で、公立高校としては珍しく、「普通科」「国際文化科」、「情報技術科」、「情報システム科」、「流通サービス科」の専攻に分かれており、各専門に合わせた授業を選択履修する方針を採用している。求実高校は、1989 年設立の「省級重点職業高中（省クラスの重点職業高校）」であり、「BTEC 国際課程（BTEC ナショナル・ディプロマ課程）」、「金融商貿専業（金融ビジネス専攻）」、「航空服務専業（航空サービス専攻）」、「計算機専業（コンピュータ専攻）」、「文秘専業（秘書専攻）」の専攻に分かれている。この下にさらにコースが設定されており、本研究における交流の相手は「文秘専業（秘書専攻）」の「商務日語秘書（ビジネス日本語秘書）」コースの学生である。

５.２　中国語のクラス編成とパソコン環境

国際情報高校では、国際文化科の 2 年生、3 年生及び情報システム科、流通サービス科の 3 年生が、第二外国語として中国を選択履修している。履修単位数は 2 単位、週 2 回授業を行う。クラス編成は、国際文化科 2 年生の入門クラス（初学者のみ）が 20 数名、国際文化科 3 年生の基礎クラス（2 年生から継続履修して 2 年目）が数名～十数名、商業科 3 年生の基礎クラス（初学者のみ）が数名である。担当教員の体制としては、日本人の非常勤講師 1 名（筆者）と中国人の非常勤講師（ALT）1 名の計 2 名でティーム・ティーチングを行っている。通常は、教室内で、紙の教科書を利用した文法解説と会話練習を中心に授業を行っている。主に、テキストの音読、教師主導による語彙・文法解説、補助教材を利用した練習問題の解答、シナリオプレイ等の模擬コミュニケーション練習、DVD や音楽等の視聴覚教材による文化理解、中国の伝統文化に関する知識の理解と実践（中秋節前後に月餅試食、文化比較として中国茶道の DVD 鑑賞と中国茶の試飲、春節前後に餃子作り等）を組み合わせた授業を展開している。

しかし、北海道のような地方における第二外国語としての中国語で、週 2 単位の授業時間内では、学習者が主導となって、学んだ中国語を活用し、中国語の母語話者と実際にコミュニケーションを行う機会はほとんどない。この状況を改善すべく、2009 年 10 月～2010 年 2 月、北海道札幌国際情報高校と北京求実中学との間で、NBLT による交流型の授業を実践した。日本と中国の高校生間の直接交流の機会を増やすことを目的に構築した「中日学生交流網」を通じて、異文化比較投票及び BBS 交流によるインタラクションを試みた。

---

[34] http://www.sit.ed.jp/

[35] http://www.bjqszx.com/

[36] 中国の教育制度では、初等教育が「小学」、中等教育が「初級中学（初中）」（日本の中学校に相当）、「高級中学（高中）」（日本の高校に相当）に分類され、高校であっても学校名には「中学」と付く場合が多い。なお、「高級中学（高中）」には、普通高級中学の他、職業高級中学、普通中等専門学校、技術労働者学校、就業者専門学校、就業者高級中学が含まれ、本研究の相手校は職業高級中学である。

NBLT による交流型授業のクラス編成は下記の通りである。

表 5.1　NBLT による交流型授業に参加した学生の構成

地域	学年、人数	学習暦
日本 (札幌)	2 年生（25 名）／3 年生（11 名）	6 ヵ月～1 年半 （中国語選択履修・週 2 回）
中国 (北京)	1 年生（24 名）／2 年生（19 名）／3 年生（9 名） ＊中国側の参加者は一部学生	1 年～2 年 （日本語専攻）

パソコン環境としては、中国側、日本側、共に学内の CALL 教室を利用した。CALL 教室内のパソコンは 68 台、OS のバージョンは Windows XP、インターネットブラウザや Microsoft Office 等の基本的なソフトウェアがインストールされており、中国語の閲覧や入力操作には支障のない、基本的なパソコン環境と言える。CALL 授業専用システムが導入されているため、学生側は、1 名につき 1 台のパソコン端末を利用して、学内 LAN 及び学外へのインターネット接続とホームページ閲覧、電子メール、オンライン上の各種ソフトウェアのダウンロードとインストール、文字入力、学内ネットワーク上フォルダへの課題提出等が可能である。教師側からは、この他にも、学生の出欠管理（ログイン PC とユーザー名の把握)、学生が利用しているパソコン端末に対する各種操作（画面上への教材表示切り替え、教師側からの画面モニタリング、音声録音と視聴等）も行うことができる。

なお、学校全体としてのネットワークセキュリティ対策のため、一部接続できないサイトもあるが、本研究で使用する「中日学生交流網」サイト（北海道大学のサーバ）への接続、必要はソフトウェアのインストールには支障なかった。インターネット接続の速度も遅く感じられるが、授業で使用するサイト上のコンテンツを閲覧・操作できないというほどではない。

５.３　NBLT による交流型中国語授業の位置付け

2 年生と 3 年生の中国語の授業は同一曜日に行われ、事前に CALL 教室の使用予約が必要である。CALL 教室の使用については、情報系科目や英語が優先であり、中国語の授業で使用可能な時間数が希望通りには確保できない。そのため、授業実践期間中は、教室内での通常の授業形式と、月に 1～2 回の NBLT による交流型の授業を組み合わせたブレンディッド・ラーニングを実施した。授業の一環ではあるが、正規の授業計画として組み込むには条件が整わないという厳しい現実がある。

年間学習計画は、3 年生の進捗に合わせて NBLT による交流型中国語授業の時間を設定・確保した。3 年生は大学受験や就職試験等の準備のため 12 月で正規の授業が終了し、選択履修科目である中国語の授業時間が少ないため、彼らのスケジュールを優先する必要があったためである。しかし、実際には、中国側のスケジュールもあり、年内にはそれほどやり取りが進まなかったため、受験シーズンに入ってからも日程を調整し、放課後の時間帯を利用して、希望者による交流活動を継続した。2 年生は 1 月以降も中国語の授業が行われるので、授業時間内に CALL 教室を利用して授業を行った。2009 年度、3 年生の学習計画表は下記のとおりである。

表 5.2　中国語（3 年生）の年間学習計画表（2009 年度）

月	学習項目・内容	学習ポイント（機能別・場面別等の到達目標）	学習方法（予習復習方法･試験対策等）
5	中華料理、飲料	自分が食べたい／飲みたい中華料理と飲料を表現できる／相手に質問できる	配布された副教材を事前に読んでおく
	発音（母音・子音・声調・ピンイン・声調の変化・アル化）	発音練習をする	教科書を予習・復習する
	授業中に使う中国語（あいさつ・先生の指示・やりとり）	授業中に先生と学生が頻繁に使用する中国語を理解する	全体で会話練習
6			教科書：文法訳読 教科書の練習問題（宿題）
	第一課　自己紹介 人称代名詞 「是」構文 副詞の「也」 依頼、懇願の「請」	自分の名前を名乗る、相手の名前を聞く場面の会話ができる 簡単な依頼の表現ができる	ALT との会話練習 生徒同士の会話練習 ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に身の回りの物を使って会話練習
	定期考査（第一～二課）	ヒアリング・筆記試験	テキストの練習問題と CD で復習
	第二課　これは何ですか 指示代名詞 疑問文 否定文 助詞の「的」	「こ・そ・あ・ど」を使って肯定・疑問・否定の表現ができる	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に文房具や服などのカードを使って会話練習
7			
	第三課　これはいかがですか 指示代名詞 形容詞述語文 疑問詞「怎么样」	買物の場面での簡単なやりとりができる（品物の確認、サイズと色、推薦、受け入れ・断りの表現）	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に食べ物や飲み物と貨幣のカードを使って会話練習
8			
9			
	第四課　買い物 数詞 催促、勧誘の助詞「吧」 数量詞、動量詞 お金の数え方	買物の場面での料金交渉ができる（数の数え方、貨幣単位、値段の確認、値切り交渉）	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に室内の図や観光地図を使って会話練習
	第五課　どこにありますか 場所指示代名詞 存在の動詞「在」 希望の助動詞「要」「想」 方位詞	物の場所を確認できる 簡単な道案内ができる（目的地を伝える、目的地の方位や場所の簡単な説明・案内）	テキストの練習問題と CD で復習 ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に料理のメニューを使って店員と客の会話練習
10	定期考査（第三～五課）	ヒアリング・筆記試験	
	10 月中旬～下旬　CALL 中国語　授業（1 回目・2 回目）		
	第六課　何がありますか 存在の動詞「有」 「どんな～」の疑問表現 助数詞（量詞）	所有、存在の表現が理解できる レストランでの注文ができる（料理名、飲料、数、依頼の表現）	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に目的地と待ち合わせ時刻・場所のカードを使って会話練習
11			
	第七課　何時に行きますか 時刻、時間 時量の表現 時を表すことば	待ち合わせの約束ができる（時間、場所） 時刻と時量を区別できる	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に宿泊客とホテルフロントのシナリオプレイ
	11 月下旬　CALL 中国語　授業（3 回目）		

	第八課　ホテルのフロントで 　完了の助詞「了」 　選択疑問文 第九課　タクシーに乗る 　前置詞「从」「到」 　二重目的語をとれる動詞 定期考査（第六～九課）	ホテルでチェックインできる（予約者名を名乗る、チェックインに必要な手続き、カード記入） タクシーに乗って目的地に行ける ヒアリング・筆記試験	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に乗客とタクシー運転手のシナリオプレイ テキストの練習問題とCDで復習
12	第十課　試着と支払い 　可能・許可の助動詞「可以」「能」「会」 　場所を表す前置詞「在」 　試みを表す動詞の重ね型	服の買物ができる（商品の提示、試着、支払い方法）	ﾊﾟﾀｰﾝﾌﾟﾗｸﾃｨｽの他、実際に客と店員のシナリオプレイ
	1～2月　CALL中国語　授業／課外活動（4回目）		

５.４　授業実践の内容

５.４.１　３年生の授業実践

3年生は、全4回、CALL教室でのNBLTによる交流型中国語授業を行った。各回の実施日時は下記の通り。1回目～3回目は交流授業のための準備及び交流活動を行い4回目以降は交流活動の最後に授業評価のオンラインアンケートを行った。

（1）2009年10月22日（木）1時限目（8:50～9:40の50分）
（2）2009年10月29日（木）1時限目（8:50～9:40の50分）
（3）2009年11月26日（木）1時限目（8:50～9:40の50分）
（4）2010年2月9日、2月16日、2月18日の放課後（17:00～18:00の60分、参加可能な日を事前確認し、数人ずつ配分）

クラス編成は女子学生のみ11名、2年生から継続履修している応用クラスで、約1年半の学習歴を持つ。このうち1名はオーストラリア留学のため、2年次後期から休学しており、3年次後期から復学したため、他の学生に比べて学習歴が1年分少なかった。

中国語の文法能力としては、通常授業により、テキストにある基礎的な語彙と文法は学習済みである。ピンインが書かれた文章であれば、スムーズに読み、日本語に訳すことができる。名前や趣味などの簡単な自己紹介とそれに関する質問であれば、何も見ずに自分の言葉だけで「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」の4技能ともに対応できるが、母語話者の一般的な速度で発話された中国語（既習語句を組み合わせた文）を即時に理解することはできない。

CALL教室での授業実践までの2年半では、テキストおよび補助教材をプリント配布し、原則的に教師主導型の文法訳読法が中心であるが、テキストの章ごとに学習済みの内容を活用し、学習者の身近な話題を含めた4技能の総合練習を工夫して行ってきた。「書く」技

能の訓練としては、中国語から日本語への翻訳、日本語から中国語への翻訳、中国語の質問に対し自分の答えを中国語で書くという練習を行ってきた。自分の考えのみを自分の考えた中国語で書く（教科書や辞書を使用してもよい）練習としては、2 年次に台湾の高校生宛の手紙を 2 回書いた経験がある。学習した語彙、文法を使って自己紹介を書く練習に加えて、学生たちが自分で聞きたい質問項目を日本語で発表させ、それを教師が中国語に翻訳してから、学生たちに自筆で書かせた。

授業を実施するにあたり、教師側が事前に準備した内容としては、前章に記載したサイト構築、コンテンツ実装、動作確認、デバッグ、修正のほか、セキュリティに配慮したユーザー管理を行うために学生 ID を事前に登録しておき、URL、各自のユーザー名、パスワードを併記したカードを作成して、授業時に個別配布した。

【1 回目】2009 年 10 月 22 日（木）1 時限目（8:50〜9:40 の 50 分）

1 回目の授業の流れは以下の通りである。

（1）パソコンの起動、ネットワークへのログイン

CALL 教室を使った授業は、英語ですでに行っているだめ、学生たちもパソコン端末の使用方法にはある程度慣れている。パソコン操作の習熟度に個人差はあったが、お互いに教え合い、助け合って作業していたので、特に問題はなかった。

（2）Firefox のインストール

学校側で設定しているブラウザは Internet Explorer 6 で、簡体字が文字化けするため、学生のパソコン端末ごとに Firefox をインストールさせた。プログラムファイルのダウンロードに時間がかかるため、事前に学内ネットワークの中国語授業用フォルダ内にプログラムファイルを保存しておき、学生はそのフォルダからインストール作業を行うという方法で対応した。

（3）「中日学生交流網」へのログイン

ユーザーID、パスワード、サイト URL を書いたカードを 1 人ずつ配布し、Firefox でサイトにアクセスさせ、ID とパスワードを入力してログインさせた。

（4）中国語 IME への設定変更

自習用コンテンツのうち、「中国語を使用するためのパソコンの設定方法」（図 5.1）、「ピンインの入力方法」、「ピンイン入力練習」を行った（図 5.2）。各自、サイト上の説明文を見ながら、中国語 IME への設定変更及びワード上でのピンイン入力練習を行った。入力する自己紹介文は、ピンインと変換後の例文をサイト上に掲載しており、その通りに入力するというもので、全員が難なくこなしていた。キーボードのローマ字入力には非常に慣れており、日本語 IME と中国語 IME で若干異なる漢字変換操作に多少戸惑っていたが、10 分ほど入力するうちに慣れたようである。

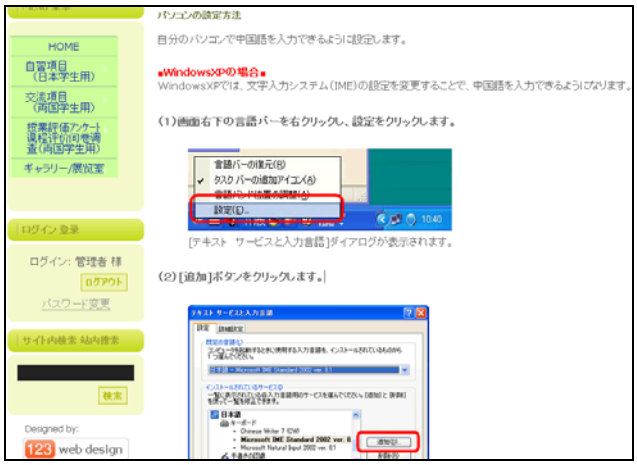


図 5.1　中国語を入力するためのパソコンの設定方法

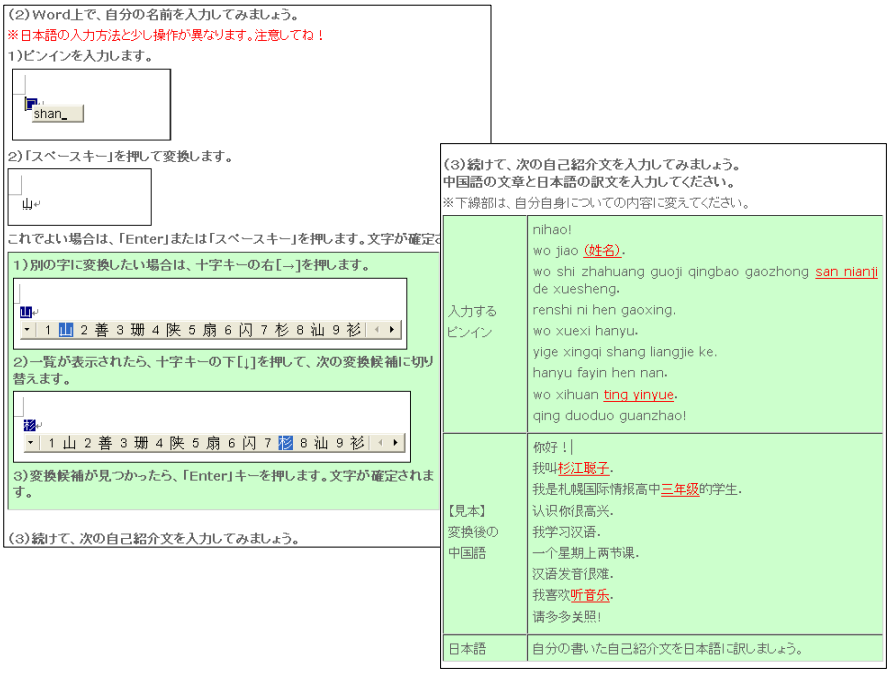


図 5.2　ピンインの入力方法（左：説明、右：自己紹介文の入力練習）

授業中に観察された学生の反応としては、「このホームページはなんかすごいな」、「なんかイイ感じ」、「自分がすごく中国語できるようになった気がする」など、コンテンツに対する純粋な驚きを感じ、中国語入力の方法がわかっただけでも相当の技能を身につけたように感じたようである。

1 回目の授業の問題点としては、学校のシステムにデフォルトでインストールされているブラウザのバージョンが古いため（Internet Explorer 6 以下）、簡体字が文字化けしてしまい、わざわざ他の簡体字対応ブラウザ（Firefox）をインストールしなければならないことがわかった。また、学校のインターネット回線速度が遅いと、ブラウザのインストール用ファイルのダウンロードとインストール作業で 10 分ほどかかってしまうので、事前にプログラムを共有できる場所に保存しておき、すぐにインストールが実行できるような事前準備が必要である。

図 5.3　3 年生 CALL 中国語授業風景　ピンイン入力練習

【2 回目】2009 年 10 月 29 日（木）1 時限目（8:50～9:40 の 50 分）

2 回目の授業の流れは以下の通りである。

（1）パソコンの起動、ネットワークへのログイン

（2）Firefox のインストール

（3）「中日学生交流網」へのログイン

上記の手順は前回と同様に行い、特に問題はなかった。

（4）中国語 IME への設定変更

サイトの説明を見ながら自分達で設定を変更できていた。どうやるか忘れていた学生も、できた学生に教わりながら設定できていた。

（5）ピンイン入力練習

通常の授業での既習事項について、1 音節の単語、2 音節以上の単語、基礎的な文法事項の穴埋め問題、簡単な表現の一文翻訳の練習問題をやった（図 5.4）。作業中にわからない点は学生どうして相談しながら解決してよい旨を指示したが、大部分の学生が、最初のうちはできるだけ自力で取り組み、集中して作業を進め、時に、「あー、これなんだっけ？」、「授業でやったってことだけは覚えてるけど忘れた」などと聞き合いながら、和やかな雰囲気で作業していた。実質作業時間は 40 分程度だったが、用意していたコンテンツのうち、5 つは完了した。

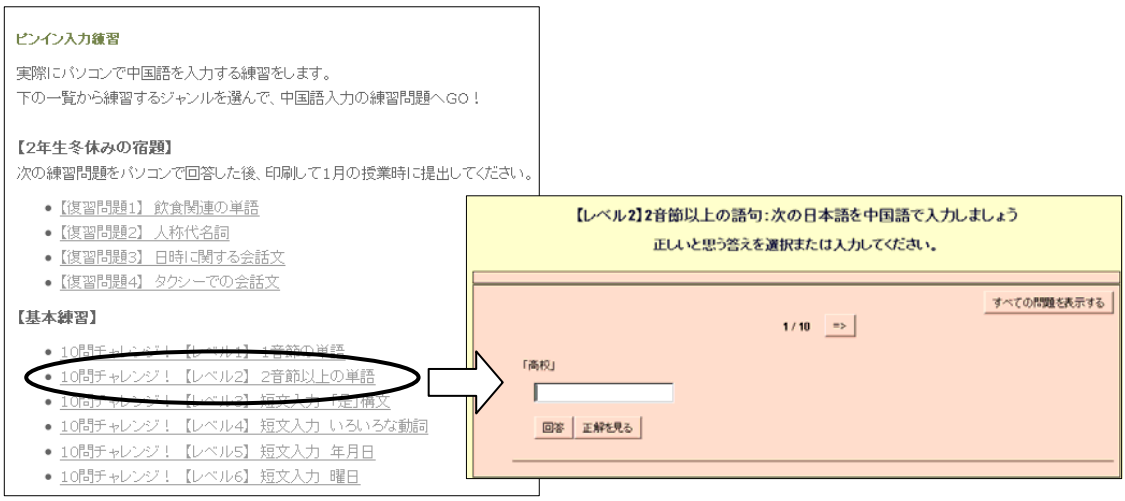


図 5.4　ピンイン入力練習

（6）中国側への質問を考える

各自、BBS の事前準備用掲示板に、中国側に聞いてみたい質問を日本語で書きこんだ。これをもとに、教師側で投票アンケートとライティング交流コンテンツに分類し、実装する。その後、中国側に連絡し、投票または書き込みをしてもらう流れとした。

2 回目の授業の問題点としては、「？」などの記号を半角で作成していたため、全角で入力してもエラー表示となっていた。記号類は全角入力に統一する必要がある。

【3 回目】2009 年 11 月 26 日日（木）1 時限目（8:50～9:40 の 50 分）

3 回目の授業の流れは以下の通りである。

（1）パソコンの起動、ネットワークへのログイン

（2）Firefox のインストール

（3）「中日学生交流網」へのログイン

（4）中国語 IME への設定変更

上記の手順は前回と同様に行い、特に問題はなかった。

（5）BBS の日本語を中国語に翻訳

前回、日本語で書きこんだ質問を中国語に翻訳する作業を行った。双方の意思の疎通ができるだけ適切に行われるよう、書き込みはできるだけ日本語と中国語を併記するよう指導した（図 5.5）。

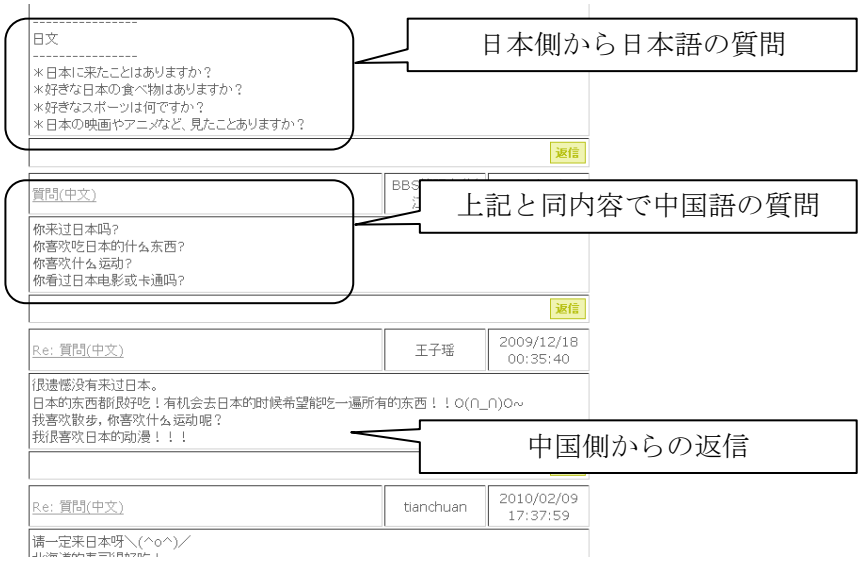


図 5.5　中文 BBS でのやり取り（日本側の自己紹介と中国側からの返信）

「～が好きですか」、「どのように～しますか」などの基礎的な構文は通常の授業での既習項目なので、教科書の単語などを確認しながら自力で熱心に取り組んでいた。また、比較的理解度の高い学生に聞きながら、似たような質問は教え合って入力していた。「将来の夢」、「ダイエット」、「受験勉強」、「ビジュアル系（及び具体的なバンド名の列挙）」など、教科書で学んだことのない語彙や表現は、教師が随時サポートして解決した。例えば、「ラルクアンシエルの中国語名があるはずなんだけど、虹の何とか…」ということを知っていた学生がいたので、教師が学生のパソコン端末を利用して一緒に調べたところ、「彩虹乐团」であった。また、「飛輪海」という台湾のアイドルグループについての書き込みをした学生

がおり、それに対する返信が一気に 10 レス以上付いており、本人も驚いていた。多くの返信が来ると、その分のコメントを返信しなければならず、大変だが、手の空いている学生とも協力して返信を完了させていた。

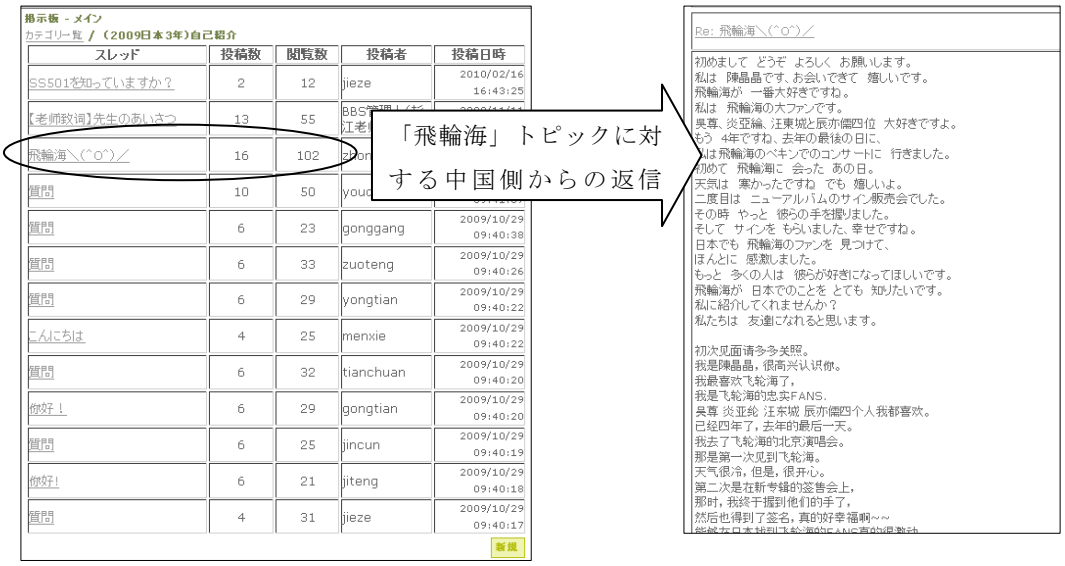


図 5.6　掲示板トピック一覧

会話を成立させる流れとして、自分のことを説明、紹介してから相手に質問するというコミュニケーションの基本は理解しており、全員が実践できていた。

（6）異文化比較投票とコメント記入（日本語と中国語の両方）

時間の関係上、「お昼ご飯」と「家庭学習時間」の 2 トピックのみ行った（図 5.8）。投票して、コメントを日本語と中国語の 2 ヶ国語で記入するという流れは問題なく理解し、作業もスムーズに進められた。「お昼ご飯」については、クラス全員が「お母さんの作ったお弁当」であったが、これに対する中国側との違いについて、授業評価アンケートで日中双方から驚きの声や違いが印象に残ったという報告がなされた。「家庭学習時間」については、3 年生は受験勉強があるため、全員が 1 時間以上の家庭学習を行っていた。中国に比べると大幅に少ないと予想されたが、中国では放課後も学校に残って勉強し、帰宅後はあまり学習時間をとらないということに、日本側の学生は感心していた。日本人どうしでも、お互いの書き込み内容に興味があり、楽しみながら読んでいた。

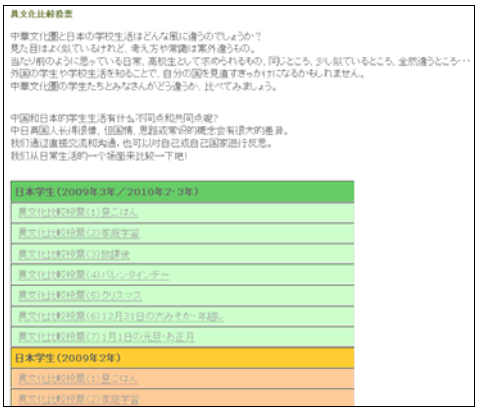


図 5.7　異文化比較投票（トピック一覧）

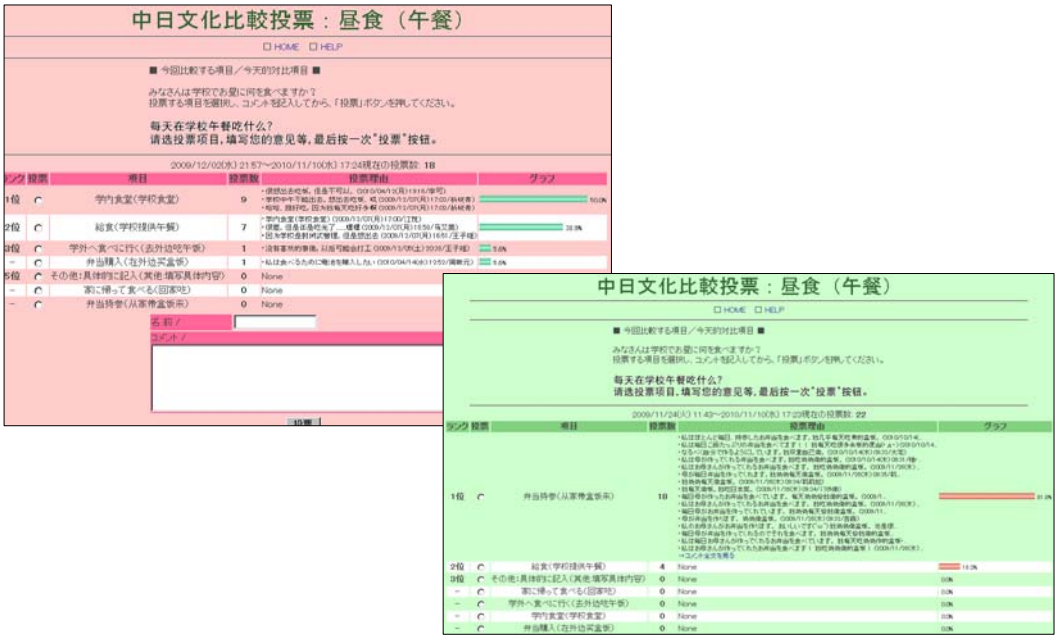


図 5.8　異文化比較投票「昼ごはん」（左：中国／右：日本

【4 回目】2010 年 2 月 9 日、2 月 16 日、2 月 18 日の放課後（17:00～18:00 の 60 分）

中国側の学校行事、試験などスケジュールの都合もあり、年内はやり取りが思うように進まなかったため、授業時間外での活動を追加で行った。3 年生は受験シーズンのため、都合のつく学生のみ、メールで連絡を取り、希望日を選択してもらい、放課後に CALL 教室に集合して作業した。各回の参加者は 5 名程度となった。

4 回目の授業の流れとしては、3 回目までと同様にログインし、パソコンの設定を変更して、BBS で中国側からの返信を確認後、コメントを書き込んだ。また、異文化比較投票の残りのトピック「放課後」、「バレンタインデー」を実施した。最後に、授業評価のオンラインアンケートを実施した。アンケート結果については第 6 章で詳述する。

ちょうど大学受験の試験日と重なり、受験のために東京まで行っていた学生もいたが、試験が終わり東京から札幌に戻って帰宅後、すぐに作業のためにかけつけてくれるという一幕もあった。自分たちが学んだ中国語を活用して直接交流することに対する関心の高さと熱意がクラス全体に伝わり、感動的であった。

図 5.9　3 年生 CALL 中国語授業風景　BBS 交流

５.４.２　２年生の授業実践

2 年生は、全 4 回、CALL 教室での NBLT による交流型中国語授業を行った。各回の実施日時は下記の通り。1 回目～3 回目は交流授業のための準備及び交流活動を行い、4 回目は授業評価のオンラインアンケートを行った。

（1）2009 年 10 月 29 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）
（2）2009 年 11 月 26 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）
（3）2010 年 1 月 28 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）
（4）2010 年 3 月 18 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）

クラス編成は全 25 名（女子 20 名、男子 5 名）、2 年生から履修を開始した基礎クラスで、6 ヵ月の学習歴を持つ。

中国語の文法能力としては、通常の授業でテキストを用いて基礎的な語彙、文法を学習中である。テキストで学んだ語彙とテキスト本文に限り、ピンイン付きの文を音読し、中国語から日本語に訳すことができる。自分の氏名、日常的な動作（動詞＋目的語の組み合わせ）、授業中によく使う単語・表現であれば、繰り返し聞けば理解できるが、自分の言葉で自分の考えを即座に表現することはできない。このため、BBS 交流の際には、学生が必要な単語や短文を各自で調べて文を作り、教師が正しい語順やより適切な表現に校正するという手順で作業を進めた。

CALL 教室での授業実践までの 6 ヶ月間は、テキストおよび補助教材をプリント配布し、教師主導型の文法訳読法を中心に授業を行った。テキストの章ごとに、既習内容を使った「聴く」、「話す」、「書く」の総合練習を行っているが、定着度はやや低く、学生によって差がある。テキストやプリントに書かれたものを見て、時間をかければ、教師から中国語での質問にも答えられる。

授業を実施するにあたり、教師側が事前に準備した内容は、3 年生と同様である。

【1 回目】2009 年 10 月 29 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）

1 回目の授業の流れは、基本的に 3 年生と同様である。

授業中に観察された学生の反応としては、3 年生と同様、「このホームページは先生が作ったの？」、「日本語も中国語も書けるのすごくない？」など、中国語が表示されたコンテンツ自体に新鮮な驚きを感じていたようである。自分達のために特設されたホームページ及びコンテンツであるということに対し、純粋に喜んでいた。また、中国語のピンイン入力練習で、初めて自分の名前や学習したことのある語句が中国語に変換されたとき、「すごーい、ほんとに中国語だ！」という声が数名から上がった。普段、計算やワープロとしてエクセルやワードを使うことはあっても、自分の手で、パソコンを使って中国語が使えるという経験に対し、喜びを感じていたようである。

1 回目の授業の問題点としては、3 年生に比べて人数が多かったためか、あるいは学内ネットワーク設定上の制限のせいか、サイトにアクセスできるパソコン端末とできないパソコン端末があった。また、全体的に CALL システムの起動が遅く（学生のパソコン端末により異なる）、全員の統率がとれず、作業中のずれが生じて歩調が乱れてしまった。ネットワークのトラブルは学校側に報告し、システムのアップデートや業者による対応を待つほ

かないが、多めにパソコンを起動しておき、ネットワークがつながらないなどのトラブルが発生した場合には、すぐに別の端末に移動して作業を継続できるように学生たちに伝えておく必要がある。

図 5.10　2 年生 CALL 中国語授業風景　パソコンの設定とピンイン入力練習

【2 回目】2009 年 11 月 26 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）

2 回目の授業の流れ（1）～（4）までは 3 年生と同様である。

（5）BBS に日本語・中国語で自己紹介と質問を書き込む

簡単な挨拶、氏名、学年、趣味など、通常の授業での既習項目を活用して書き込み、同時に短い質問文を書き込んだ。ほぼ全員、教科書を見直したり単語リストから語句を探したりして自力で入力していた。随時、教師が教室内を巡回し、学生が呼び止めて質問すれば、それに対応した。趣味の紹介として、「～が好きだ」という表現で、「好」という漢字をそのまま中国語として使っている学生が多く、既習項目が定着していないことがわかり、残念である。「バームクーヘン」など、中国語に定着してない単語の訳は、そのまま日本語で入力し、今後中国側から質問されたら詳しく説明することにした。

2 回目の授業の問題点としては、大部分の学生が集中して作業しているが、3 年生に比べると人数が多いため、おしゃべり中心になって手が動いていない学生が数人いた。このような学生には、都度、傍に立って具体的な作業指示をこまめに与えるよう心がける必要がある。

【3 回目】2010 年 1 月 28 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）

3 回目の授業の流れ（1）～（4）までは 3 年生と同様である。

（5）BBS に日本語・中国語で自己紹介と質問を書き込む

BBS を確認し、中国側からの返信があれば、各自コメントを返信した。返信がたくさん来ている学生、返信が来ていない学生とばらつきがあったが、数人の学生で一緒にコメントの内容を話し合って入力するなどして、全員が何らかのインタラクションに参加できるよう作業を割り当てた。中華料理、漫画・アニメ・映画、北海道の冬など季節の話題、好きな芸能人など、身近な話題で盛り上がっていた。特に、中国側の学生が日本の芸能人に詳しいことに驚いていた。自分たちもインターネットで中国のアイドルや俳優について調べてコメントするなど、積極的に返信する内容を考えていた。

3 回目の授業の問題点は特に見られなかったが、十分なインタラクション時間を確保することを優先したため、時間配分が難しく、異文化比較投票コンテンツを実施できなかった。

【4 回目】2010 年 3 月 18 日（木）2 時限目（9:50～10:40 の 50 分）

4 回目の授業の流れ（1）～（4）までは 3 回目と同様である。

（5）異文化比較投票とコメント記入（日本語と中国語の両方）

2 年生は 3 年生に比べて人数が多く、2～3 回目の授業時に個別の BBS 交流に対応していたところ、異文化比較投票のコンテンツを実施する時間がなかった。そのため、授業評価アンケート直前に実施した。全員がひととおり投票した後、授業評価のオンラインアンケートを行った。

4 回目の授業の問題点は、教師側の課題として、パソコン環境（パソコンの起動やネットワーク接続の速度が遅い）、人数、作業量、所要時間を考慮した適切な作業フローの統率が適切に行えなかったことである。教師が説明し、学生が理解してから作業する、という流れがスムーズにいかず、理解できた学生はすぐに投票とコメントを記入できたが、理解に時間がかかった学生に説明しているうちに時間が過ぎてしまった。ひととおりの投票のみで、十分な時間を取って中国側のコメントを読むことができず、本来の異文化比較の意図が達成できなかったことが悔やまれる。

５.５　学校紹介用コンテンツ

中国語を活用したインタラクションのために、授業中に学生が実際に使用するコンテンツ以外にも、お互いの高校紹介や学習成果発表の場として、「写真・映像ギャラリー」と「年賀状」を設置している。

「写真・映像ギャラリー」では、日中双方の授業風景や中国語関連イベントの写真と動画を掲載している。日本側は、CALL 教室での授業風景の写真、毎年 10 月開催の学校行事である中国語学習成果発表会（2009 年～2010 年）の写真と動画、2010 年 7 月に筆者が給求実高校訪問のために学生を撮影したビデオメッセージの動画、2010 年 11 月開催の北海道高校生中国語スピーチコンテストの動画を掲載している（図 5.11）。中国側は、求実高校の教師から送られてきたパソコン教室での授業風景の写真、2010 年 7 月に筆者が求実高校訪問時の交流会における日本語学習成果発表などの動画を掲載している（図 5.12）。

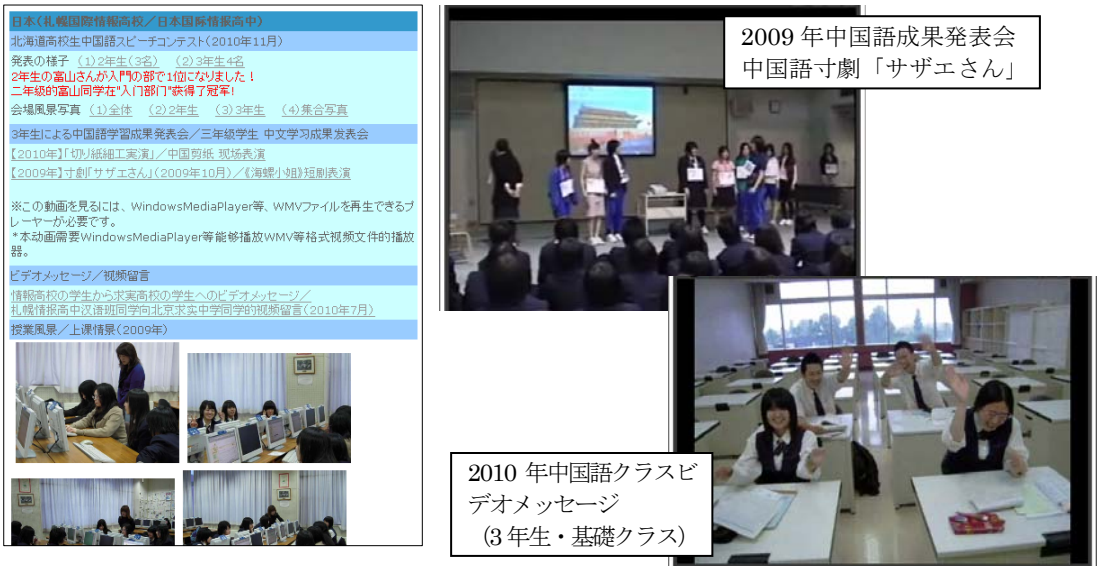


図 5.11　写真・映像ギャラリー（日本側）

図 5.12　写真・映像ギャラリー（中国側）

以上、本章では、2009 年から現在にかけて、国際情報高校と求実高校との間で行っている、NBLT による交流型の授業実践詳細について報告した。第 6 章では、授業評価オンラインアンケートに対する中国と日本の学生の反応や意見フィードバックについて分析する。

第６章　授業評価アンケート結果分析

６.１　授業評価オンラインアンケート概要

NBLT による交流型の授業について、中国と日本の学生に対し、授業評価アンケートを行った。国際情報高校は、2009 年 2 月、CALL 教室での最後の授業時間内にオンラインアンケートを実施した。求実高校は、当初オンラインアンケートを実施する予定であったが、中国側のパソコン教室の利用制限により、2010 年春に同内容の紙のアンケートを準備して中国側の教師に実施を依頼し、7 月に筆者が高校を訪問した際に回収して、帰国後、オンラインアンケートに入力した。オンラインアンケートは、Moodle[37]で作成した。その理由は、ユーザー管理及びデータの収集、分析、加工が容易であること、多言語対応しており日本語と中国語の両方を１つのサイト上で同時に管理できるためである。アンケートの質問項目及び説明文は、日本側用（日本語）と中国側用（中国語）で個別に作成した。

Moodle は、CMS（Course Management System）、LMS（Learning Management System）、仮想学習環境（Virtual Learning Environment）などを構築するためのフリーのオープンソースソフトウェアである。教育関連の e ラーニングサイトやコンテンツ作成、運営、管理用のソフトウェアとして普及しており、デザインテンプレートも豊富で、問題作成、成績評価、アンケート作成など授業内で使用する各種活動モジュール（Activity Module）が搭載されており、オリジナルの e ラーニングサイトを低コストで比較的容易に構築できる。フォーラムも充実しており、日本語化に関する情報も多数提供されている。導入時のトラブルなどをユーザー間で交流して解決し合うコミュニティとしても充実している。Magic3 と同様、PHP が動作する環境であればどのコンピュータでも利用できるので、「中日学生交流網」サイト構築時に作成した MySQL データベースを利用して、アンケートページ専用のサイトを新たに構築した。Moodle 本体は公式ホームページからダウンロードして入手できる。各アンケートページの作成にあたり、「フィードバック（Feedback）」活動モジュールを追加で設定した。各種の活動モジュールは、公式ホームページの「Modules and plugins」[38]からダウンロードして入手できる。この活動モジュールは、質問項目の種類が豊富で編集の自由度が高く、アンケート結果を自動的に集計しグラフ表示するなど、一定の分析機能を備えており、アンケートと調査や分析に時間をかけられない多忙な高校教師にとって非常に有効なツールである。

[37] http://moodle.org/
[38] http://moodle.org/mod/data/view.php?d=13&rid=95&filter=1

図 6.1　「高校中国語教育・学習改善のためのアンケート調査」トップページ（ログイン後）

授業評価アンケートは、アンケート調査同意書（アンケート趣旨の説明及び同意署名）と質問 3 項目で構成されている。質問 3 項目は、「中日学生交流網」サイトのコンテンツのまとまりに対応している。

(1)　アンケート調査同意書
(2)　自習項目（パソコン設定・ピンイン入力・入力練習）に関するアンケート
(3)　交流項目（異文化比較投票）に関するアンケート
(4)　交流項目（中文交流 BBS）に関するアンケート

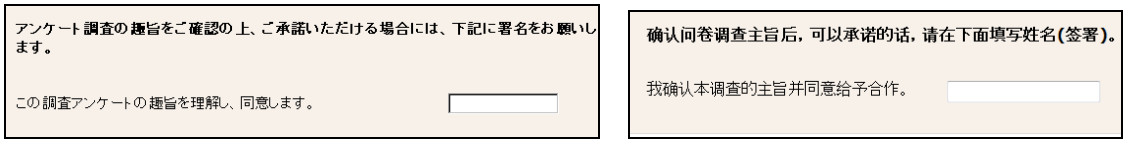


図 6.2　アンケート調査同意書（左：日本語／右：中国語）

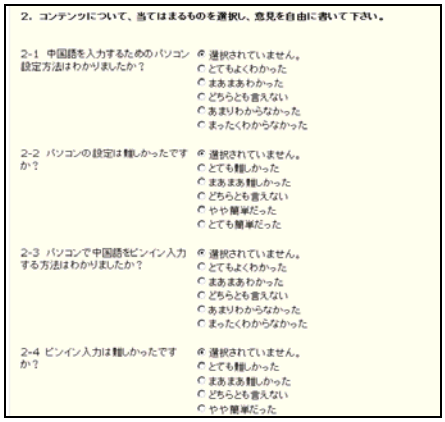


図 6.3　自習項目（パソコン設定・ピンイン入力・入力練習）に関するアンケート

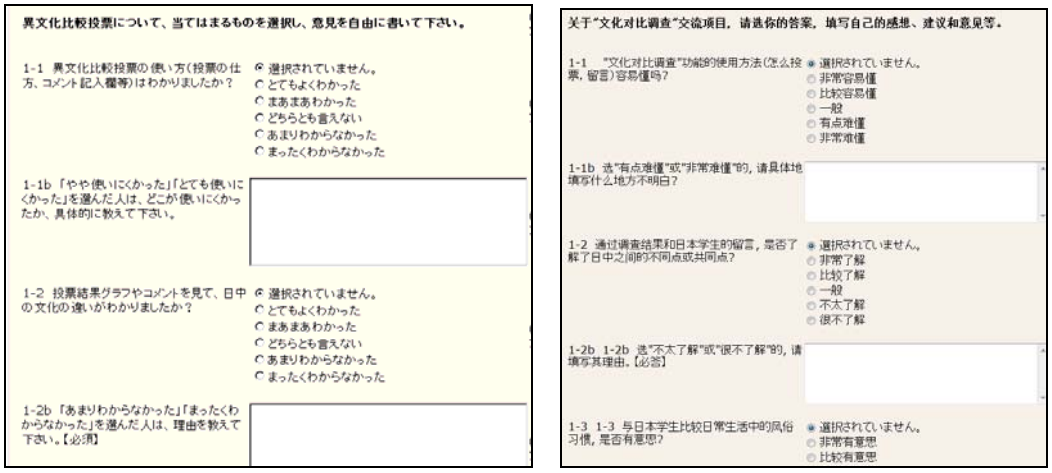


図 6.4　交流項目（異文化比較投票）に関するアンケート（左：日本語／右：中国語）

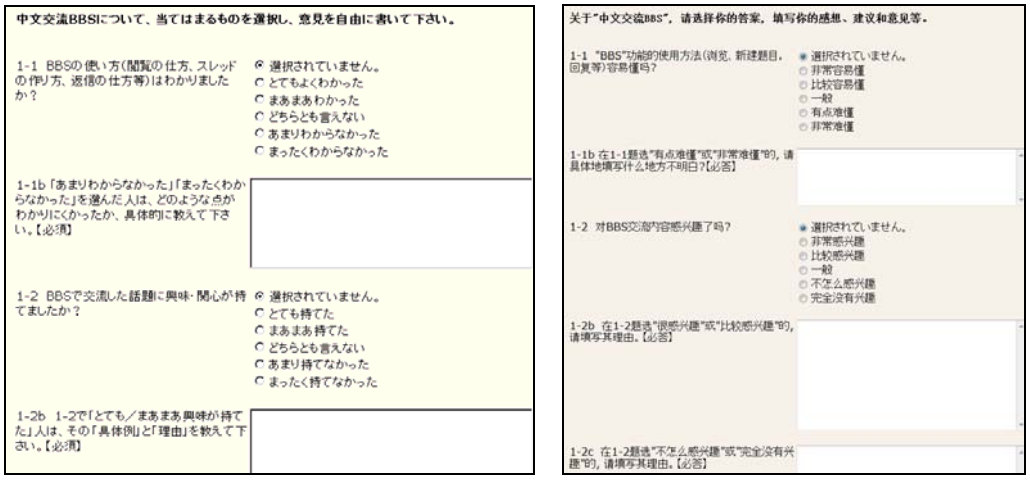


図 6.5　交流項目（中文交流 BBS）に関するアンケート（左：日本語／右：中国語）

アンケートは基本的に、5 スケールの質問項目及び自由記述回答で構成した。質問項目の内容については、インストラクショナルデザイン（ID）モデルの中で、「魅力」に関する要素としてジョン・ケラーが提唱する ARCS モデルが（Keller, 1984）を参考とし、学習意欲を、「注意（Attention）」、「関連性（Relevance）」、「自信（Confidence）」、「満足感（Satisfaction）」という 4 つの側面でとらえる方針を採用した。具体的には、学習意欲の要因（鈴木, 1995）を参考とし、以下のような学習意欲のデザインの要素を取り入れて設定した。

表 6.1　学習意欲デザインの第一原理

1．学習への意欲は、学習者の好奇心が現在の知識の中のギャップを知覚して刺激されたとき、増進される。【面白そう、何かありそう】
2．学習への意欲は、学ぶべき知識がその人のゴールに有意義に関連があると気づいたとき、増進される。【課題がわかる、将来的価値がありそう、プロセスにやりがいがある】
3．学習への意欲は、学習者が学習課題をマスターすることに成功できると思うとき増進される。【初期に繰り返し成功体験、やればできる】

4．学習への意欲は、学習者が学習課題に満足な結果を予想し経験するとき、増進される。【振り返ってみて努力が実を結んだ、やってよかったという満足感、次への意欲喚起】
5．学習への意欲は、学習者が彼らの意図を保護するために意志（自己調整）の方略を使うとき、増進され、かつ、維持される。【自分なりの工夫、思い通りやって問題解決に成功】

※鈴木 克明（2010）より引用（Keller, 2008 第 1 章における訳出）、【　】内の解釈は筆者による。

6.2　自習項目に関するアンケート

本項目は、日本側の学生のみが使用するコンテンツについての質問内容である。デザイン、使いやすさ、説明文などのわかりやすさについては、「デザインがかわいい」、「シンプルで見やすい」、「説明がわかりやすい」、「目に優しい」、「日本語と中国語の併記がわかりやすい」などの肯定的（プラス）評価が過半数以上を占めたが、「印象に残っていない」、「文字が小さい」、「目立つようにした方がよい」などの否定的（マイナス）評価もいくつか出された。フィードバックを受けて、文字のサイズや色の設定を変更し、やや大きく修正した。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.1 に掲載している。

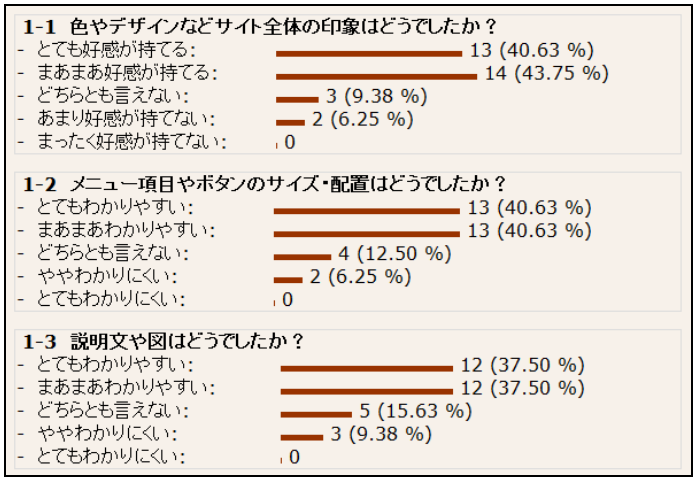


図 6.6　デザインなどのわかりやすさに関する回答

ピンイン入力練習については、「中国語 IME の設定方法、ピンインの入力方法がわかった」という肯定的評価が 26 名となったが、同時に「設定方法が難しい」が 17 名と半数以上、「入力方法が難しい」は全員となり、全員がピンインを使った中国語の入力に苦戦していたことがわかる。高校生たちは、英語や日本語のローマ字入力には慣れているので、ピンインを覚えていない、あるいは先生の発音を聞いてもピンインを思い出せないという定着度の低さによるものと考えられる。自由記述回答では、肯定的評価として、「教室・教科書での授業でよくわからなかったピンインの確認・練習ができてよかった」、「難しかったが逆に覚えられて、勉強になった」、「家でもできるようになってよかった」などがあった。否定的評価として、「ピンインを最初のころにもっとしっかりやった方がいい」、「ピンインがわからなくててこずることもあった」、「ピンインを先生が言ってそれを打つだけではあまり身につかない」などがあった。どちらの意見からも、学習初期段階でのピンイン練習の重要性が再認識された。

ピンイン入力の練習問題（複数回答可）については、「とても／やや難しかった」を合わせると 27 名で 8 割以上、「普通」は 4 名で 1 割強となった。練習問題の内容については、単語や短文の練習が勉強になったと感じた回答が多く、「是」構文のように単調なパターン練習や、年・月・日、曜日の練習はそれほど効果が実感されなかったようである。

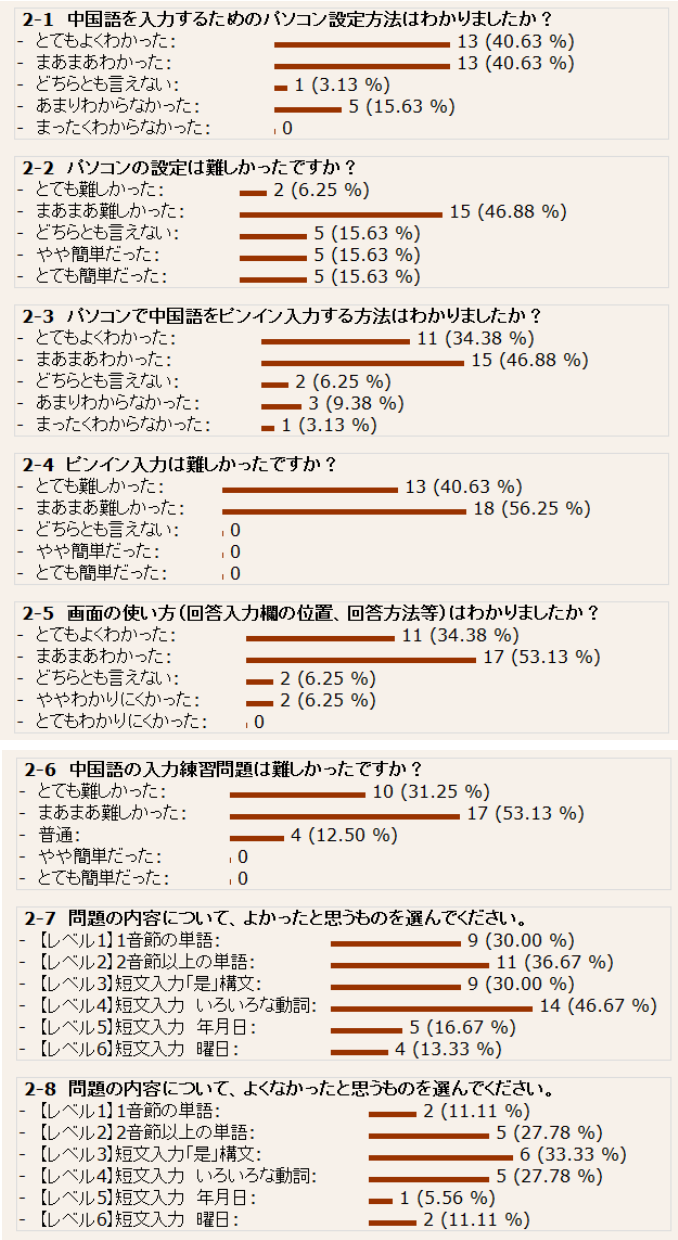


図 6.7　ピンイン入力練習に関する回答

今後やってみたい練習問題（複数回答可）については、「あいさつや実践会話」が最も多く、次いで「日常生活に関する単語や表現」、「場面別（旅行、タクシー・列車、レストラン、ホテル、買物等）の単語や表現」、「教科書で勉強した単語／文法の復習」の順に多かった。やはり、教科書に沿って学習した内容を復習すること、また、日常生活で実践的に使えるあいさつや会話を重視していることがわかる。自分自身のことを表現するために、「高校生活」、「プライベートや趣味」、「北海道」に関する単語や表現を使って詳しく自己紹介でき

るようになりたいのではないかと予想したが、これらについてはそれほど関心がなかったようである。このほか、自由記述回答には、「若者用語など」、「あまり勉強にはよくないかもしれませんが、歌詞などの入力練習をしたいです」、「スラングとか」、「もっと日常生活や中国のサイトで知り合った友達と会話できるような単語や表現を知りたかったです」といった意見が出された。

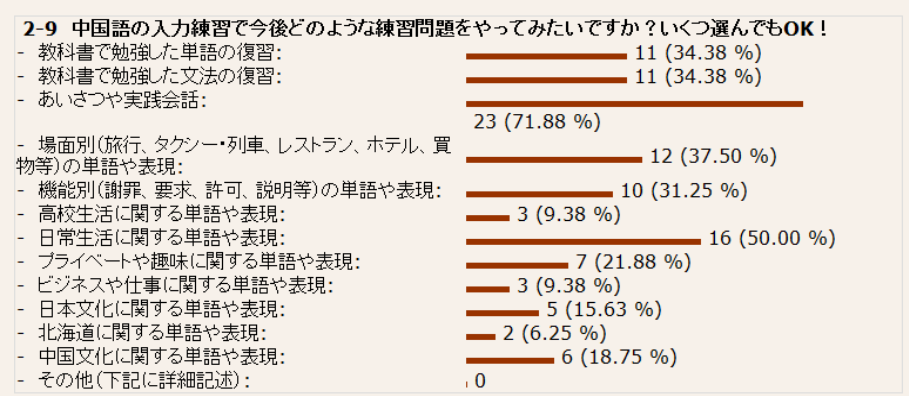


図 6.8　今後やってみたい練習問題に関する回答

「教室で行う教科書・文法中心の授業と比べて、よかった点、いまいちだった点、気付いた点、感じたこと」については、多くの学生から様々な感想や具体的な実感が得られた。自由記述回答の全文は巻末の付録 6.2 に掲載している。主に、「実際に中国語を使えて楽しかった」、「中国人と交流できて楽しかったのでまたやりたい」、「習ったことを活用できた」、「普段の生活ではできないことができていい勉強になった」、「中国の生徒と交流し、自分で文章を作り、実践的に学習できるのでよい学習方法」、「最近の中国の学生について知れたし、中国人に対する親近感もわいた」、「今後パソコンで中国語を用いる場合があったときのために役立った」、「パソコンで中国語を打つのはちょっと難しかったけど楽しかった」、「パソコンを使うと実際に中国の人たちと交流ができるので、さらに中国語への興味や関心が湧いた」、「中国語で例文を打つやつは、ピンインと漢文の勉強ができるので良かった」、「中国人とチャットすることで中国語が身近なものに感じた」、「実際に中国の人と話せて、生きた中国語と接することができたのがよかった」、「繰り返し練習できるのでよい」、「中国の方がすごく日本に興味があるんだなぁとびっくりした」など、肯定的な意見が多かった。否定的な意見としては、システムやインターネットなど ICT 環境に対する不満、入力操作にてこずったという操作上の課題、ピンインが難しくてわからないという限界、語彙数そのものが非常に少ないので文にできない（もっと基本的な語彙・文法を学習してから BBS で交流したい）という限界、教師の発音が聞き（書き）取れないという限界、教師が発音するピンインをそのまま入力しても身につかないのではないかという疑問、CALL 教室での授業回数が少ないので練習や深い交流ができないのが残念、という意見が出された。しかしその反面、「ピンインを覚えていないので難しかったが、勉強になった」という気づきもあったようである。

６.３　交流項目（異文化比較投票）に関するアンケート

異文化比較投票コンテンツの画面デザインや機能の使い方について、日本側は、ほとんどの学生が、「よく／まあまあわかった」と回答し、問題なく理解できたようである。「使

いにくかった」と回答した理由には、「項目などほとんどが中国語だったので、少しわかりにくかったです。でもそれは自分の力不足です、、、笑」、「中国語のピンイン入力が少し難しかった」とあり、デザインや機能ではなく、表記や操作上の問題が挙げれられた。中国側は、日本に比べてやや難しいと感じたようである。記述回答にも、「ちょっとわかりにくかった、読めなかった」、「ログインできなかった」、「日本の学生にコメントする時に少しわからないところがあった」とあった。中国側の教師からの報告によると、教師自身が説明を事前に聞いてはいたものの、このサイトにログインして使用したのは初めてだったので、最初のうちは説明が難しかったようである。ログインできなかった学生は、ユーザー登録時に氏名の誤りがあったため、すぐに修正して使用できるようにした。

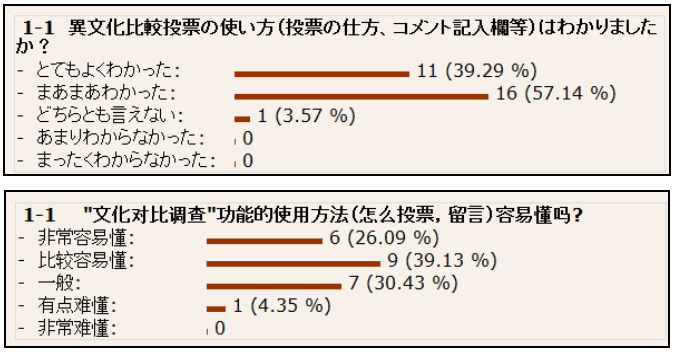


図 6.9　異文化比較投票の画面デザインなどに関する回答（上：日本／下：中国）

文化を比較することによって日本と中国の文化の違いに対する「気づき」があったかどうかについて、日本側は、「とてもよく／まあまあわかった」の回答が 22 名となった。また、2 年生の一部学生は時間配分の都合上、異文化比較投票のコンテンツを実施できていなかったため、「見方がよくわかりませんでした、、、自分が悪いです笑」、「そもそも投票結果やグラフを見ていません。」という回答もあった。中国側は、「とてもよく／まあまあわかった」の回答が 14 名となった。残りの 9 名は、「どちらとも言えない」と回答しており、自由記述にも、「あまりわからなかった、読めなかった」、「日本の高校生が普段放課後に何をしているかあまりわからなかった」という回答があった。

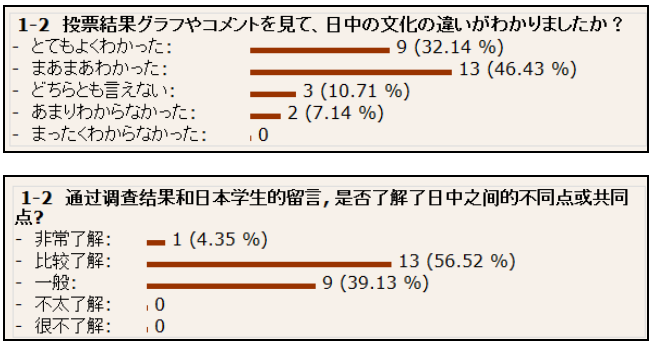


図 6.10　異文化比較投票の内容に関する回答（上：日本／下：中国）

中国と日本の文化間比較による自国や自分たちの生活に関する「気づき」をどう感じたかについて、日本側は、「とても／まあまあ楽しかった」の回答が 24 名となった。自由記

述回答で、肯定的評価には、「日本とはぜんぜん生活や考え方が違うので、それを知るのは面白かった」、「中国の子は高校で学食を食べるのが普通みたいでちょっとうらやましかった」、「放課後そのまま帰宅する子も多く、きっと勉強するんだなって思うと自分の生活を正さなきゃいけないな～と思った」、「中国の人も日本の有名人が好きだという人がいっぱいいておもしろかった」、「日本人では当たり前と思っていることも中国など外国の人と比べると大きな差が出ているところにおもしろさを感じた」などの感想があった。否定的評価には、異文化比較投票のコンテンツを実施できなかった 2 年生の一部学生から、「中国人の回答を見れなかった」、「文化・習慣を比較した覚えがない」という回答があった。いわゆる「伝統文化」ではなく、身近な話題で比べた内容を楽しいと感じたようである。中国側は、「とても／まあまあ楽しかった」の回答が 10 名、「どちらとも言えない」が同程度の 10 名、「あまり／まったく楽しくなかった」という回答も 3 名あった。自由記述回答としては、「民族が違えば習慣も違うので、文化や習慣を知って理解を深めるべき」、「時間がなかったけど面白そうだった」、「日本の学生の習慣も受け入れられそう」、「とてもよい、日本についてわかる」、「違うところがたくさんあった」、「日本では自分で弁当を持って来て友達と一緒に食べていいんだ、中国では閉鎖的で学校に管理されている」、「だいたい似ているけど、日本では放課後に部活動がある」、「日本の学生は放課後の活動がいろいろあるね～」、などの回答があった。日本側に比べると、身近なところでの文化的差異の発見はなく、楽しいとは感じられなかったようである。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.3 に掲載している。

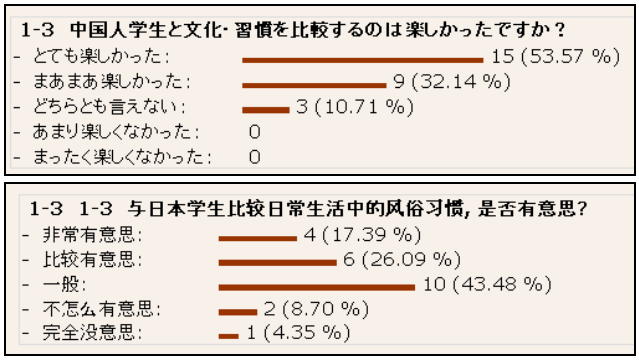


図 6.11　文化の違いをどう感じたかに関する回答（上：日本／下：中国）

比較した内容のうち、興味関心が持てたもの／持てなかったものについては、次の通りである。日本側、中国側、ともに「昼ごはん」、「放課後」、「バレンタインデー」には比較的関心が強いが、「家庭学習」については、それほど興味がないことがわかる。放課後の活動についても、より具体的にわからないと面白さが感じられないので、今後は単純な項目の比較ではなく、BBS 交流のトピックにして、より自由に事例を出し合える方向にすべきであろう。

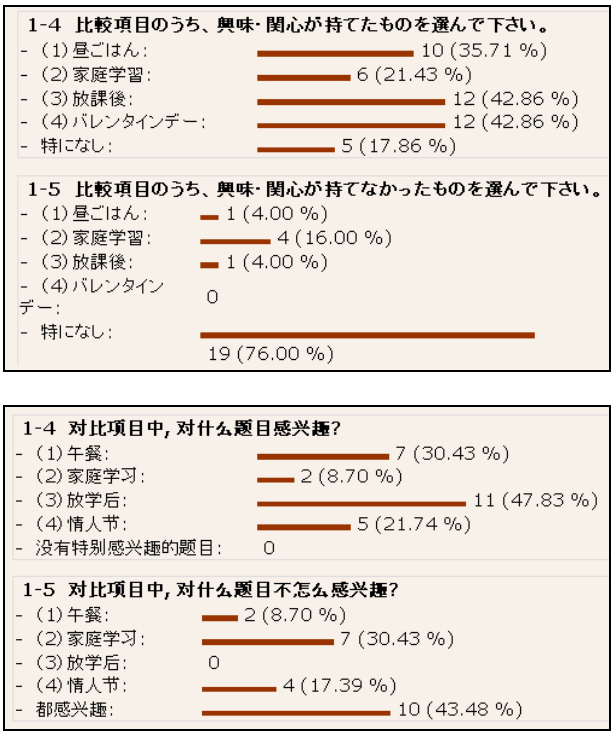


図 6.12　興味が持てた／持てなかった内容に関する回答（上：日本／下：中国）

お互いの投票結果およびコメントに驚きや興味を感じたかどうかについて、日本側は、「とても／まあまあ驚いた・興味を感じた」が 13 名、「どちらとも言えない」が同程度の 12 名、「あまり驚かなかった・興味を感じなかった」という回答も 1 名いた。自由記述回答としては、「もっと違いがあれば交流して知ってみたい」、「お昼ご飯は日本とはやっぱり違うんだなと思った」、「自分たちとやっぱり感覚が違うところもあって初めて知れた」、「日本のものを意外とたくさん知っていた」、「特に大きな差はないけれど、昼食はある程度自由なんだ」、「食堂や給食を選んでいうところを見ると、学校の体制自体が違うんだなぁ」、「昼食に弁当を持参しない人が多くて驚いた」、「食堂があるとは」、「日常の生活からまったく違うんだな」、「同じ年代ということと国が近いということもあってか、国は違ってもものの考え方の違いはあまりないように感じた」、「本の漫画やアニメ、芸能人のことを知っていたり好きだということがわかった」、「自分が読んでいるマンガが外国でも読まれていると思うと、少しうれしい気分」、「漫画などの中国語名がユニーク」、「日本では中国人で有名な人はあまりいないと思うけど、中国では日本の有名人が好きだという人がいっぱいいてびっくりした」などがあった。中国側は、「とても／まあまあ驚いた・興味を感じた」が 9 名、「どちらとも言えない」が 14 名で過半数を超えた。自由記述回答としては、「比べてみて違っていた」、「日本の学生の放課後の活動に興味がある」、「日本の美味しいものに興味がある」、「とても面白かった、友達もできて、日本語も学べる」、「自分たちの国と違う特徴があった」、「交流してみて、中国と日本の家庭での学生の地位が違うことがわかった」、「日本の学生は放課後の活動が豊富で学生生活が充実している」、「中国と日本の行事が違うことわかった」などがあった。どちらかと言うと、日本側に比べると、中国側の興味・関心が薄く、今後は、興味のありそうなジャンルや内容について、中国側教師及び学生からのヒアリングに基づき再検討する必要がある。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.4 に掲載している。

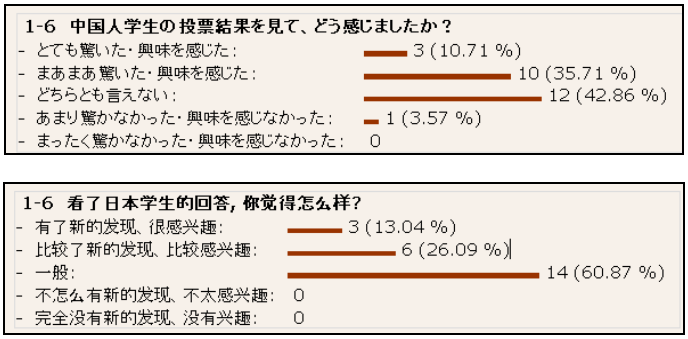


図 6.13　驚きや興味を感じたかどうかに関する回答（上：日本／下：中国）

今後、比較してみたいトピックについては、次の通りである。今後、より高校生の興味・関心の的を射たトピックを設定するためのコンテンツ企画の参考としたい。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.5 に掲載している。

日本	中国
• 友達との遊び方、彼氏、彼女（恋人）との付き合い方 • 一人っ子の割合 • 食べ物、中国のお菓子について • 流行の音楽、好きなドラマ、好きな歌手、芸能人 • 中国人と日本人が好きな漫画 • 趣味 • 将来のゆめ • 具体的な学校生活、登校方法、部活の種類、好きな学校行事 • クリスマス、お正月、夏休み、冬休み、誕生日の過ごし方などイベントについて • 休日の過ごし方 • 英語や日本語の勉強方法 • １日どれくらいテレビを見るか、パソコンの使用時間、睡眠時間 • 家での生活の違い、おこづかいの額 • 中国のスポーツ	• 可以更加了解一些对方的性趣爱好等 • 学校学习,学习方法 • 美食 • 日本动漫,想了解"多拉 A 梦"的结局以及在日本受欢迎的程度和具体事情 • 日本推理小说,作家"东野圭吾"的小说作品 • 爱好,流行,节日 • 日本演员,艺人,明星,赤西仁,飞轮海在日本的发展 • 日剧,专辑 • 中日茶道对比 • 日本的一些特别的节日习俗 •

６.４　交流項目（中文交流 BBS）に関するアンケート

中文 BBS 交流の画面デザインや機能の使い方について、日本側は、ほぼ全員が「よく／まあまあわかった」と回答している。日常的にインターネットを利用し、チャットや BBS で交流することに慣れているようで、画面の見方やインターフェースの使い方はすぐに理解できていた。中国側も、QQ 等のインスタントメッセンジャーを利用して頻繁にチャットをしているので、特に問題はなかったようである。自由記述回答には、「一部、読めなかった」とあったが、「しょっちゅうインターネットをやっていない人は他の人に教えてもらう

必要がある」という回答もあり、学生間で協力して作業している様子が伺える。

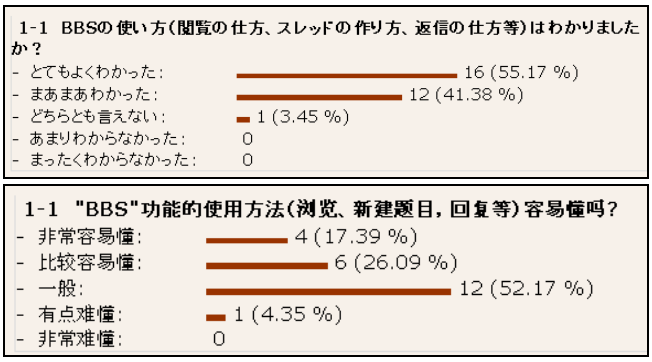


図 6.14　BBS のデザインや機能のわかりやすさに関する回答（上：日本／下：中国）

BBS で交流した話題に興味・関心が持てたかどうかについて、日本側は、「とても／まあまあ持てた」が 21 名、「どちらとも言えない」が 6 名、「あまり持てなかった」という回答も 1 名いた。肯定的評価の理由としては、「中国の高校生が日本の漫画、ドラマ、芸能人などを知っていて話ができた」、「台湾のアイドルについて、日本人が知っているのがうれしいと言ってもらえた」、「自分たちの質問に直接答えてもらえた、質問されて答えられた」、「自分たちと違う考え方や趣味を持った中国人と交流ができた」、「中国で日本の文化が想像以上に知られていたことに驚いた」、「好きな食べ物でもけっこう同じものもあって共通点を見つけられてうれしかった」などがあった。否定的評価の理由としては、「同じような話題が多すぎるし、話がかみ合わない。興味のない話なので続かない。」があった。お互いの自己紹介以降の話題のふくらませ方が個人で異なるので、レスのたくさん付いた学生は楽しんで交流を発展させられるが、定型文を入力しただけの学生は、それ以上のインタラクションが発生しない可能性が高い。このため、個別の自己紹介交流以外に、少人数のグループを作り、特定の交流トピックを設定し、課題や作品を完成させて相手側に見てもらい、コメントをもらったり比較交流をしたりするという形式のコンテンツなど、工夫の余地がある。中国側は、「とても／まあまあ持てた」が 4 名、「どちらとも言えない」が 19 名と大半を占めた。肯定的評価の自由記述回答としては、「おもしろかった」、「文化・イベント、生活習慣などもっと知りたい」、「同年代の日本の学生と交流で来て、知識も増えたし、日本文化についてもわかったし、日本語のレベルも上がったと思う」、「日本の学生の日常生活についてあまり知らなかったが、交流してみてわかった。文化や生活習慣についてもっと交流したい、とても興味がある」、「日本語の練習にもなるし、リアルな状況を具体的に知ることができる」があった。否定的評価の記述回答は無記入であったが、基礎レベルでの表現力の限界や、お互いの授業時間の調整が難しく、自分たちが書き込んでもすぐに返信が来ず、やり取りがスムーズにいかないという現実的な環境の制限によるところも大きい。今後、その理由を具体的にヒアリングするなどして、対策を検討する必要がある。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.6 に掲載している。

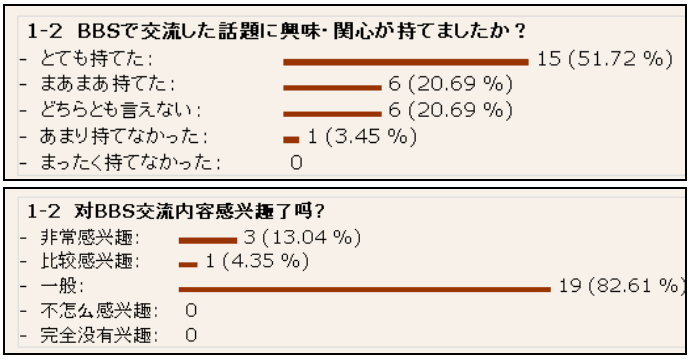


図 6.15　BBS の交流内容に興味・関心が持てたかに関する回答（上：日本／下：中国）

中国側（日本側）の高校生が書いた中国語を読んで理解できたかどうかについて、日本側は、「ほとんど／まあまあ読めた・理解できた」が 14 名、「どちらとも言えない」が 5 名、「あまり読めなかった・理解できなかった」が 8 名であった。その理由としては、「習っていない、難しい漢字、単語、文法がたくさんあった」がほとんどであった。中国側は、「ほとんど／まあまあ読めた・理解できた」が 16 名、「どちらとも言えない」が 7 名であった。やはり、自分の考えを表現するのに十分な語彙や文法能力がないため、母語話者の中国語は難しく感じ、理解できないという感想が多かった。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.7 に掲載している。

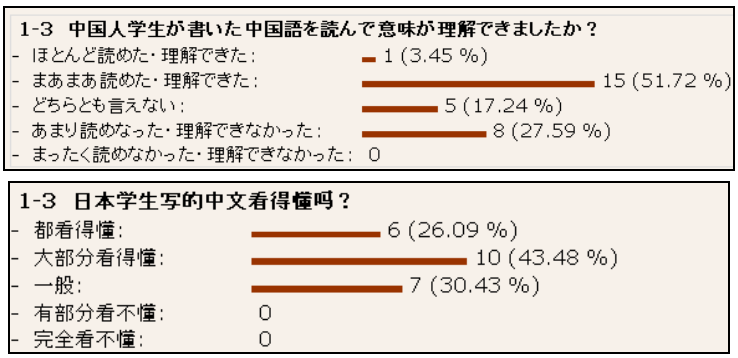


図 6.16　中国の学生の中国語（日本人学生の日本語）を読めたかに関する回答
（上：日本／下：中国）

パソコンを使って自分の考えを中国語で表現することの難しさについて、日本側は、「とても／まあまあ簡単だった」が 5 名、「どちらとも言えない」が 1 名、「やや／とても難しかった」が 23 名と大半を占めた。その理由としては、「ピンインがわからない」、「単語がわからない」、「文法がわからない」、「うまい表現がわからない」、「タイピングが苦手」、「時間が足りない」の順となった。約 8 割の学生が、ピンインと単語の力不足を原因と考えており、通常の授業で初期の段階にピンインや単語の習得を強化することが重要である。中国側は、「とても／まあまあ簡単だった」が 8 名、「どちらとも言えない」が 11 名、「やや難しかった」が 3 名であった。その理由としては、「単語がわからない」、「文法がわからない」、「うまい表現がわからない」、「タイピングが苦手」、「時間が足りない」の順となった。中国側も、単語と文法の力不足が原因と考えており、日本語の読みや作業時間上の問題はそれほど感じていないようである。

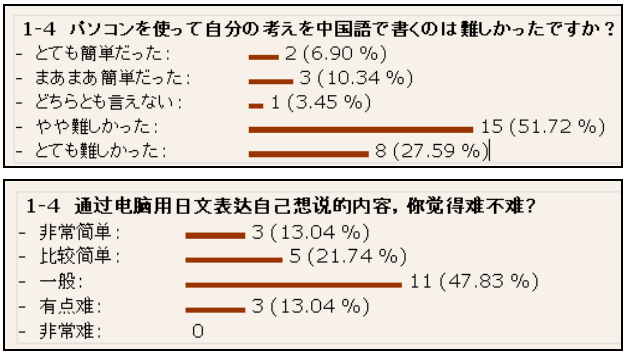


図 6.16　中国語（日本語）で考えを表現する難しさに関する回答（上：日本／下：中国）

BBS による交流をどう思うかについて、日本側は、「とても／まあまあ面白かった」が 27 名と 9 割以上を占めたが、「あまり／まったく面白くなかった」という回答も各 1 名いた。肯定的評価の理由としては、「共通の話題について話したり、今まで知らなかったことについて知ることができたのでとても興味が持てた」、「自分で中国語を書くことができたし、相手の中国語を読むことができた」、「質問や回答を考えるのは難しかったけど、返信を見るのが楽しかった」、「自分の質問に答えてくれるのがうれしかったし、中国の学生が一生懸命日本語を使って書いてくれてるのがわかってうれしかった」、「台湾芸能人についての書き込みにたくさんの返信をもらえたのでそれが嬉しかった、書き込むことで同時に単語や文法の勉強にもなったのでそれがよかった」、「日本に興味を持ってくれてるのがわかってすごいよかった」、「分たちの習った中国語を実際に試せたのが、楽しかった」、「初めて中国人と中国語で交流した」、「国の学生のリアルな流行などを知れておもしろかった」、「中国の人と交流できる機会がなかなかないので、インターネットを通じて、自分で中国語を使って交流できてよかった」などがあった。否定的評価の理由としては、「返信まで期間があるので話題が続かない、同じ人と交流したほうが楽しかった」、「ただ質問して答えるだけなのでよくあるような無難な質問ばかりになってしまった」、「聞きたいことが自力では聞けない」、「交流すること自体は趣味について語り合ったり出来てとても楽しかったが、解読出来ないものが多々あったので苦戦した」、「まだ自分で中国語の文法を上手に使うことができないので、読むのも書くのも難しかった」、「交流のできる回数が少なかった」、「話題が興味なかった」などがあった。中国側は、「とても／まあまあ面白かった」が 10 名、「どちらとも言えない」が同程度の 10 名、「あまり／まったく面白くなかった」が 3 名であった。肯定的評価の理由としては、「日本の学生と BBS 交流することで彼らの日常生活は中国とかなり違うことがわかってとても面白かった」、「日中友好にもなり、勉強にもなる」、「日本人と交流するのが好きだし、知識が増えるだけでなく、見識も広がるから」、「たくさんの日本人と友達になれて、自分が知りたい話題や文化について話せるから」、「楽しいことを情報交換できるから」、「実際に合わなくても日本人と交流できて、文化や最新事情を知ることができるし、友達がたくさんできて、自分たちの情報も共有できるから」、「日本のアニメについて知ることができた」、「言いたいことを日本語で入力できて、すごく達成感があった」などがあった。否定的評価としては、「やっぱり実際に会って交流したい」、「誰もかまってくれない（書き込みにレスが付かなかった）」、「日本からの返信が遅い」、「まあまあだけど、そんなに頻繁に使っていないのでわからない」などがあった。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.8 に掲載している。

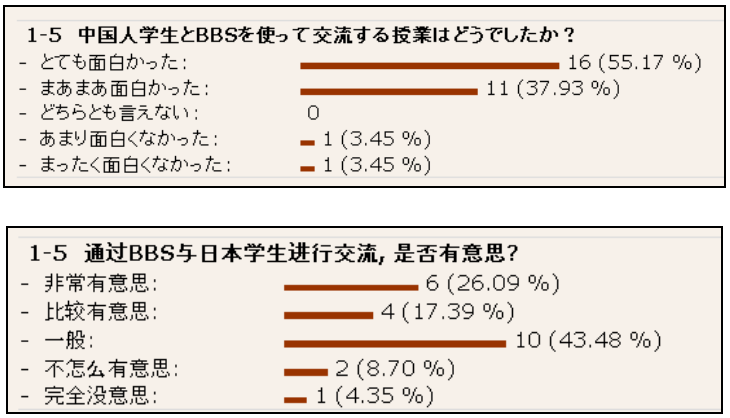


図 6.17　BBS 交流をどう思うかに関する回答（上：日本／下：中国）

BBS 交流を通じて、自分の語学力を認識したかについて、日本側は、「とても／まあまあわかった」が 21 名で 7 割程度、「どちらとも言えない」が 7 名、「あまりわからなかった」も 1 名いた。中国側は、「とても／まあまあわかった」が 20 名で 8 割弱、「どちらとも言えない」が 4 名、「あまりわからなかった」も 1 名いた。お互いに、自分たちが学習した語彙や文法のうち、どのような表現を頻繁に使うかという習得の優先度を感じ、母語話者が同じような内容を表現する時どう書くのかという現実を目にすることで、学習した外国語を実際のインタラクションの中で活用しながら、自らを振り返る機会になったようである。

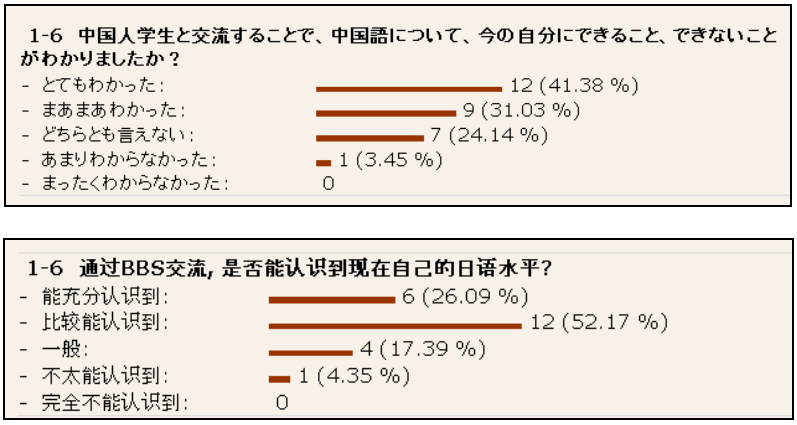


図 6.18　BBS 交流により自分の語学力を認識したかに関する回答（上：日本／下：中国）

BBS 交流のために活用した資源について、日本側は、基本的に教科書で探し、教師に質問したり学生間で話し合って解決したりするという方略を採用している。中には電子辞書を持っている学生もいたが、全員持っているわけではないので、持っている学生が調べて他の学生に伝えるという場面もあった。エキサイト翻訳など、インターネット上の多言語翻訳サイトを活用して下訳を完成させてから、教師に適切かどうかを確認して、適宜修正する学生も多かった。中国側も概ね同じ傾向にあるが、学生どうしで話し合うよりは、辞書やインターネットのリソースを活用して自力で解決する傾向にあるようである。また、「その他」を回答した学生の自由記述回答はそれぞれ、「何も使わなかった」、「兄に聞いたり、自分で想像したりした」であった。

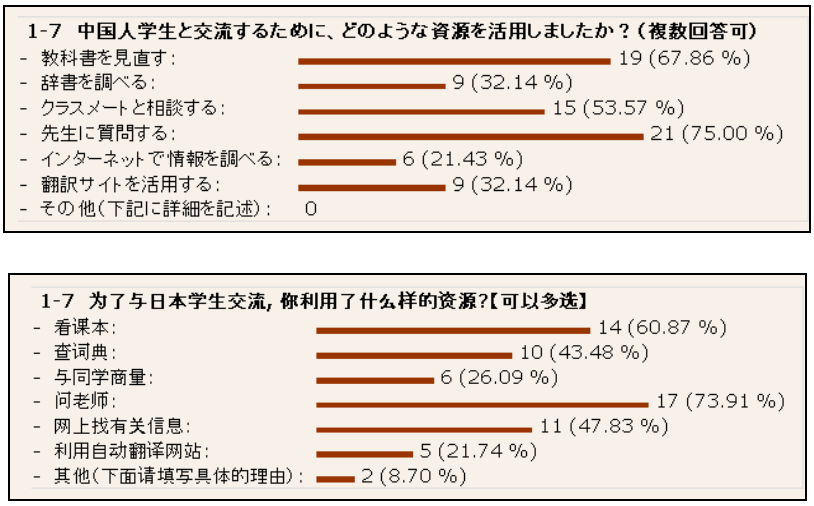


図 6.19　BBS 交流のために活用した資源に関する回答（上：日本／下：中国）

中国人（日本人）学生と交流する中で、自分の中国語（日本語）が通じた／相手の中国語（日本語）がわかったと感じたかどうかについて、日本側は、「けっこう／まあまああった」が 22 名で 8 割弱、「どちらとも言えない」が 5 名、「あまりなかった」も 1 名いた。中国側は、「けっこう／まあまああった」が 9 名、「どちらとも言えない」が同程度で 9 名、「あまりなかった」が 5 名であった。日本側に比べて中国側の方が、言語上の問題により通じ合えなかったという印象が強いようである。

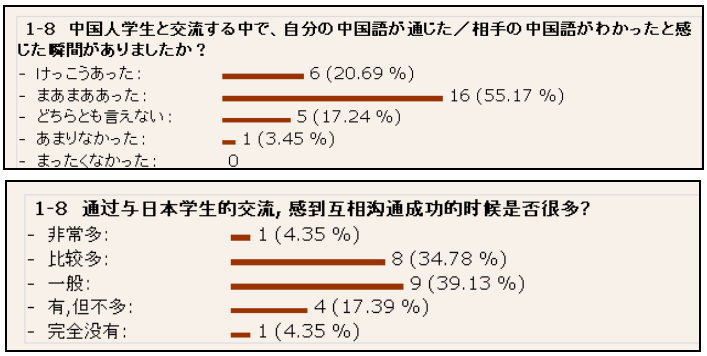


図 6.20　BBS 交流の中で自分の中国語（日本語）が通じた／相手の中国語（日本語）がわかったと感じたかに関する回答（上：日本／下：中国）

中国人（日本人）が相手になることで、中国語（日本語）を積極的に使う気になったかどうかについて、日本側は、「とても／まあまあなった」が 24 名で 8 割程度、「どちらとも言えない」が 5 名であった。中国側は、「とても／まあまあなった」が 15 名、「どちらとも言えない」が 8 名であった。双方ともに、「あまり／まったくならなかった」という回答がなかったことから、やはり「本物の母語話者」がインタラクションの相手であることで、その言語を使用しようとする態度が積極的になることがわかった。

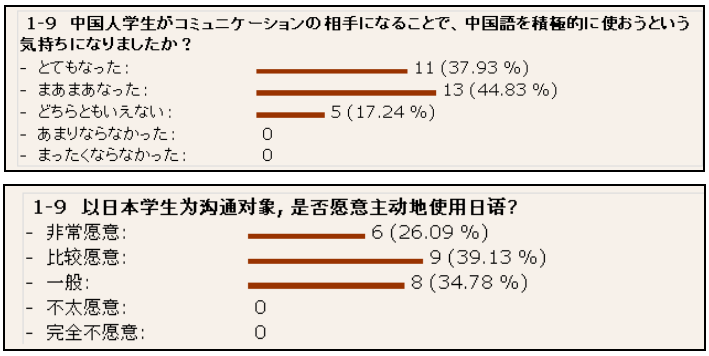


図 6.21　母語話者が相手になることでその言語を積極的に使う気になったかに関する回答（上：日本／下：中国）

BBS 交流をすることで、中国語（日本語）の学習意欲が向上したかどうかについて、日本側は、「とても／まあまあ思った」が 21 名で 7 割強、「どちらとも言えない」が 5 名、「あまり思わなかった」が 2 名となった。中国側は、「とても／まあまあ思った」が 12 名で約半数、「どちらとも言えない」が 7 名、「あまり思わなかった」が 4 名となった。母語話者との BBS 交流による学習意欲の向上は、日本側では比較的顕著であるが、中国側では約半数とやや低くなっている。お互いの自己紹介で時間切れになってしまい、十分な交流ができないまま卒業してしまう状況を不満に感じている様子が、他の回答からも感じられるので、今後の運営手法として、スレッドの立て方や内容を工夫する必要がある。

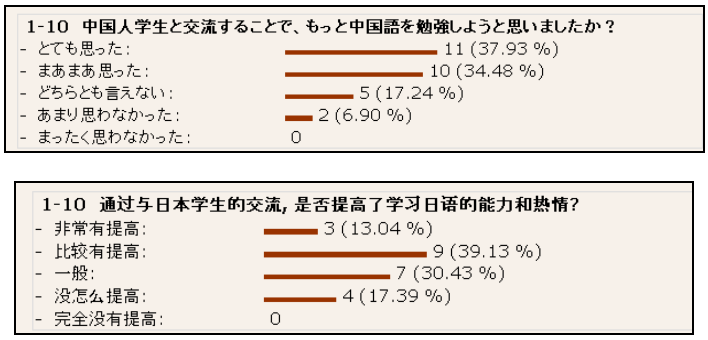


図 6.22　BBS 交流をすることで学習意欲が向上したかに関する回答（上：日本／下：中国）

パソコンや ICT を活用した中国語（日本語）の授業によって、新たな知識や技能が習得されたかどうかについて、日本側は、「とても／まあまあ思う」が 19 名、「どちらとも言えない」が 9 名、「あまり思わない」も 1 名いた。その理由としては、「少しずつ単語を覚えていくうちに、もっと使ってみたいと思うようになった」、「知らない単語を覚えることができたし、今まで習った単語や文法を思い出すこともできた」、「ピンインとどの漢字を使うかがとても勉強になった」、「自分のわからない中国語など、先生に聞いたりして、新しい知識をつけることができた」、「何も知らなかったときより中国語にちょっとでも触れることで日本にはない漢字や同じ読み方の単語もあったりして、おもしろかった」、「買い物とか、数字とか、もし旅行に行ったら役に立ちそうだなと思った」、「コミュニケーションのとり方」、「中国語のパソコン入力の方法を学ぶことができたことが一番よかった」、「パソコン入力の仕方を学ぶことで、将来の仕事に役立つ」などがあった。中国側は、「とても／まあまあ思う」が 16 名、「ど

ちらとも言えない」が 5 名、「あまり思わない」も 1 名いた。その理由としては、「日本語が少しできるようになって、読めるようになった」、「日本語のソフトウェアのインストール方法（IME の設定について）」、「日本語のひらがなの入力方法がわかった」、「パソコンで日本語を書く能力が上がった」、「どうやって BBS を使って外国の学生と交流するかわかった」、「知らなかった日本語をどうやって入力するかわかった」、「パソコンで日本語を使えれば日本語の勉強にも大いに役立つし、日本の学生とも交流できる」などがあった。この点に関しては、ビジネス分野の秘書課専攻である中国側の方が、将来的に仕事で活用できる実用的な知識や技能が身に付いたと強く感じていることがわかった。なお、自由記述回答の全文は巻末の付録 6.9 に掲載している。

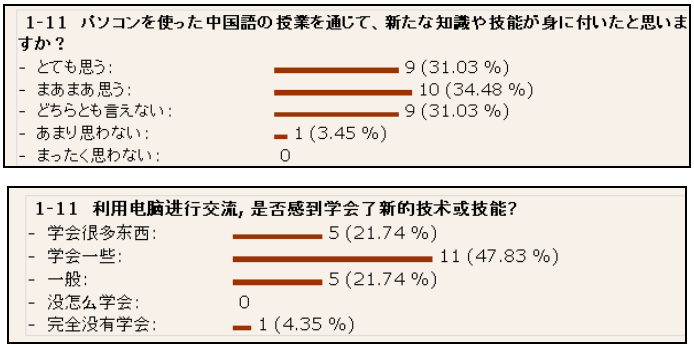


図 6.23　ICT 活用の中国語授業で知識や技能が向上したかに関する回答（上 : 日本／下 : 中国）

BBS 交流が、教室で教科書を使った授業とは違う、新しい中国語学習方法として役立つと思うかについて、日本側は、「とても／まあまあ思う」が 26 名と多数を占めたが、「どちらとも言えない」が 2 名、「あまり思わない」も 1 名いた。肯定的評価の理由としては、「実際に中国人が使う言葉がわかった」、「本当のピュアな中国人中学生との交流ができる」、「交流することで楽しく中国語を使えるし、自分で考えれば自然と覚えることもできる」、「楽しみながらできるので、ただ暗記するより力になる」、「自分で考えて情報を発信できる」、といった、交流の純粋な喜びや楽しさを感じている回答が多かった。この他、「パソコン入力の仕方を学ぶことで、将来の仕事に役立つことができる」、「今は IT 社会だから」、「パソコンを利用できる、中国語を学べるという二面でメリットがある」といった、道具的動機付けの向上に対する効果を感じた回答も見られた。また、「実際に中国語でやり取りする難しさが学べる」、「実際にコミュニケーションをとることによって、教科書で学んだ単語などを活用できる」、「自分で中国語の文を作ったり読もうとして少しずつできていった感じがしてよかった」、「習っていない文法なども使われるので、解読したいと思い、中国語の文法を調べるきっかけに繋がる」、「決まられた文法ばかりではなく、本当自分が伝えたい表現を知る事ができる」、「自分で単語を調べて文を作ると単語が覚えやすいし、中国人の中国語を読めると自信がつく」、「BBS 交流は教科書の例文どおりじゃないから、もっと自分の中国語の幅が広がる」のように、学習方略としての効果を述べた回答もあった。否定的評価の理由としては、「もっと力をつけてから取り組むべきだった」、「CALL の授業が教室の授業に比べて少なすぎたので、よくわかりません。もっと CALL の授業が増えれば効果的かも知れません」、「ピンインを使えるようになるのかもしれないが、趣旨がつかめなくて残念」があった。困難な中から得たものがあると感じ肯定的評価をした学生もいれば、交流を円滑に進めるために一定の基礎力が必要であり、それを

身に付けてから安心して交流したいと考え否定的評価をした学生もいることがわかった。また、授業時間数の少なさに課題を訴える学生もおり、英語や情報化などの必修科目との調整、第二外国語に対する学校側、他教科の教師側の理解を得て、CALL 教室の使用回数を増やせるよう対応することも必要である。また、BBS 交流の意義・効果を学習者に実感させる授業計画をすることが教師側の課題である。中国側は、「とても／まあまあ思う」が 15 名で 6 割強、「どちらとも言えない」が 6 名、「あまり思わない」が 2 名いた。肯定的評価の理由としては、「日本の文化や日常生活がわかる」、「友達が増えて、知識も豊かになる」、「学生どうしが自主的に交流して、言葉に対する興味も高まる」、「実用性が高くて印象に残る」、「日本語レベルも上がるし、日本の学生と実際に会話できるし、自分の今の日本語レベルもはっきりわかる」、「お互いの風俗習慣がわかるし、お互いに中国語・日本語のレベルを高められる」、「伝統的な学習方法は無味乾燥な感じで活気がないし、創意工夫もなく、みんな勉強したいと思わない。（BBS 交流は）学習を促進し、みんなの学習成果も上がった」、などがあった。否定的評価の理由としては、「最後まで徹底してやらなければ（有効ではない）」、「よい面も悪い面もある」があった。自由記述回答の全文は巻末の付録 6.10 に掲載している。

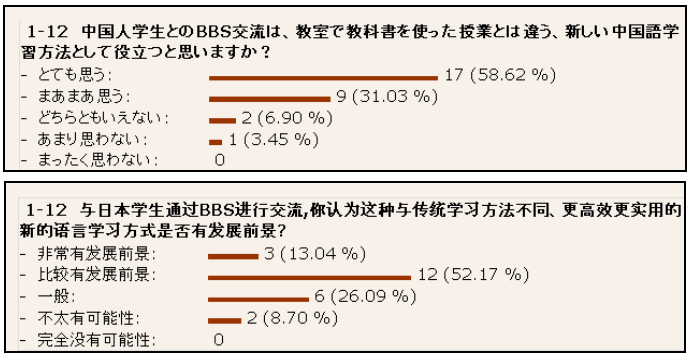


図 6.24　BBS 交流が新しい中国語学習方法として役立つと思うかに関する回答
（上：日本／下：中国）

以上、NBLT による交流型の授業について、中国と日本の学生に対し、授業評価アンケートを行った結果を分析した。日本側については、高校中国語の学習歴 6 ヵ月～1 年半の段階で、現実に中国人とインタラクションを行うには、語彙や文法能力が大幅に不足していることは明らかである。それでも、現実には不十分な語学力でコミュニケーションをとらなければならない状況は発生し得る。中国語のレベルが上がっても、常に準備万端で想定通りに展開するとは限らず、自分の力不足によりコミュニケーションが成功しない可能性は大いにある。そのような状況に陥った時に、どう工夫し、周囲の人々と助け合って、意思の疎通を図るか、そのためのコミュニケーション方略の必要性を意識する機会となったと言える。スムーズなインタラクションが困難であったり、伝達の程度が不十分であったりしても、大部分学生が、中国の高校生と直接交流する楽しさ、教室で学んだ中国語を実際のコミュニケーションに応用することの難しさと共にそれが成功した時の喜びを感じていた。それと同時に、今後、情報化社会の中で中国と日本の交流がさらに密になっていくことを予想し、パソコンと中国語を活用できる技能の重要性を意識し、そのためにパソコンを使って現実の中国人との交流を行うことが有効な学習方法であると考える学生もいた。

NBLT による中国語学習・教育の有効性を、学習者自身が大いに感じていると言えるだろう。

また、授業実践期間中に、中国側の教師から下記のコメント（日本語原文）が寄せられた。

ネットで中日学生が交流できてうれしいです。これからも、もっと多くの学生に参加してもらいたいです。
こちらの学生は日本の高校生からの返信を見て、「先生、これ、私にくれた返信でしょう」と言って、信じられないほど喜んでいました。よかったですね。
メールのこと、学生に伝えます。書き込んでいる学生も返信を楽しみにしていますね。
先ほどギャラリーをクリックして、日本の教室の様子と年賀状を見ました。本当に感心しました。もうダウンロードして、明日の授業で学生に見せて、感心と感謝の気持ちをぜひ伝えましょう。 わざわざ私たちの求実の学生に熱心に年賀状を書いてくれて、ありがとうございます。また、中国の学生の写真も載っていますから、学生はきっと喜ぶと思います。ありがとうございます。 すごいですね。日本の学生は真面目ですし、教室はきれいですし、それに、１週間に２時限だけの授業なのに、よく書けていますね。中国語らしい中国語ですね。
日本の学生と交流してから、中国の学生は日本語の勉強意欲が強くなっていると感じています。

授業中の中国側の学生の様子を観察した結果を報告したコメントである。日本側と同様、中国側にも BBS 交流に対する積極的な姿勢を見せている学生が多数おり、中国と日本の青年交流促進のために、「草の根」的ではありながらも、継続に資する取り組みであったと言えよう。

今後も、伝統的な学習方法・教授法による基礎力の育成と並行して、NBLT による中国語学習・教育を更に展開し、現実社会のニーズを満たすような実用的な技能の習得と共に、高校生ならではの感性で楽しみながら、かつ学生が自主的に取り組めるような教材を開発して授業を行い、学習者の「注意（Attention）」、「関連性（Relevance）」、「自信（Confidence）」、「満足感（Satisfaction）」を満たし、学習意欲をより向上させられるような授業計画の工夫に努めたい。

あとがき

本研究は、日本国内の高校中国語教育における ICT 活用授業の試みとして、NBLT 導入の効果を探索することを課題とした。北海道札幌国際情報高等学校と北京市求実職業学校との間で、高校生どうしのインタラクションを中心とした交流型授業を実施するために、中国語学習支援サイトを構築し、交流型授業における授業中の観察、及び両国の学習者に対する授業評価オンラインアンケートの結果を分析、考察した。その結果、NBLT による中国語学習・教育には一定の効果があることがわかった。第一に、高校の中国語学習者の ICT 活用技能の向上、即ち、パソコンで中国語を使えるように設定する、ピンインを使って中国語（簡体字）を入力する、インターネットを活用して中国語で書かれた情報を探し、読み、理解するという実用的な技能についての向上が学習者によって実感された。この点については、日本と中国の両方で肯定的な評価が多く得られた。第二に、中国と日本の高校生の日常生活に中にある様々な現実の事象について、共通点や相違点を発見することで、正確な知識をただ暗記して教師の説明をうのみにするだけではなく、相手が現実に存在することを感じつつ楽しみながら相互理解を深められたことが学習者によって実感された。第三に、少ない語彙や文法能力を駆使して、現実の母語話者を対象にインタラクションを行い、自分の考えを自分のことばで表現するプロセスにおいて、学習者自身が学習方略を意識し、工夫し、クラスメートどうしの助け合いや教え合いによってコミュニケーションをどうにか成功させ、通じ合うことの楽しさや喜びが学習者によって実感された。さらに、「本物の」母語話者と「本物の」コミュニケーションを行うことで、学習意欲が高まり、「語学の勉強」＋「相手の文化を知る」＋「友達ができる」という総合的な効果に対する肯定的な評価も多く得られた。授業計画や交流用コンテンツの内容等に対しても、中日双方の学習者からフィードバックを得たことで、今後の改善に必要な有意義な情報が得られた。全体的には、語彙数が少なく文法能力が基礎の段階においても、積極的に母語話者との直接交流の機会を増やし、言葉の学びを通じて、お互いを知り、相手を通じて自己のアイデンティティーを見直す機会を与えることが重要であると言えよう。

これを示す 1 つの依拠として、ある学生が卒業後に送ってくれた、本研究に対する感想を紹介したい（個人情報保護のため、一部固有名詞は伏せる）。

> こんばんは!卒業後で会ってお話したいな～思っていたのですが、結局会うことができなかったのでメールをしました! 私は４月から S 県の D 大学 K 学部に進学することになりました。この学部は英語と第二外国語の二言語習得を目的としているので、一年生のうちは各４時間ずつ必修で学ぶことができます。だから、私は第二外国語でまた中国語を選択してこれからも勉強していきます!大学では、もっと勉強して検定も受けてみたいと思っています。そして、もっと中国語がうまくなりたいです。中国語は難しくて発音もリスニングもなかなかできませんでしたが、先生が教科書以外にもパソコンでの交流やプリント、飛輪海とかも使って授業をしてくれたのは本当に楽しかったです!そして、修学旅行で実際に中国に行くこともできたし、高校で中国語を学ぶことができたのは本当によかったと思います。２年間どうもありがとうございました!

このような学生は、決して多くない。大部分の学生は、2 年次に第二外国語として中国語を履修しても、3 年次には大学受験やセンター試験準備のための必修科目を選択し、卒業時には学習した中国語をほぼ忘れてしまう。上記のような「思い」の種まきがどこまで実るかは学習者による部分が多く、教師の側から制御することは困難である。また、その実りを定量的に評価することは難しい。それでも、1 人でも多く、学習初期の段階でプラスの印象を持ち、今後の人生において少しでも中国や中国語を意識するようになり、中国と日本の関係に目を向けてくれる学習者が増えれば、それこそが高校の第二外国語としての中国語教育の最大の意義と言えるのではないだろうか。

高校中国語の授業を担当する教師は、学校内の教科や職位を越え、学外との人的ネットワークを広げることで、学習者が少しでも多く、中国語の母語話者と直接交流できるような活動を授業に取り入れ、支持するような取り組みを展開すべきである。伝統的な学習方法・教授法による基礎的な文法能力の育成と共に、どこまでコミュニケーション能力の育成を追求できるか。これは、効率が優先され、時間や環境の制限に依存するところが多い、高校の第二外国語を担当する教師にとって永遠の課題とも言えるが、困難であればこそ、少しの努力を積み重ね、少しの工夫や成功体験を持ち寄ることで、高校中国語教師全体の情報共有を図ることが重要である。今後も、更に多くの実践を通じて、その課題と解決からの知見を現場の授業に活かし、教師と学習者が共に楽しみながら、充実感、達成感を得られるような学習・教育環境へと発展することを祈念する。

謝辞

本論文は、筆者が北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院メディア文化論コース修士課程に在籍中の研究成果をまとめたものである。北海道大学情報基盤センターデジタルコンテンツ研究部門准教授の田邉鉄先生には、指導教員として本研究の遂行にあたり、教育工学の専門的知見から終始ご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。同研究部門教授の野坂政司先生及び北海道大学メディア・コミュニケーション研究院メディア・コミュニケーション部門教授の河合靖先生には、副指導教員としてご助言をいただくと共に、本論文の細部にわたり、マルチメディアを活用した外国語教育及び第二言語・外国語習得の専門的知見からのご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。北海道大学情報基盤センターメディア教育研究部門助教の山本裕一先生には、サーバ管理及びサイト構築にあたって終始ご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。2010 年 3 月に北海道大学情報基盤センターを退官され、現在北海道大学名誉教授、札幌大谷大学音楽学部教授の西堀ゆり先生には、本研究の原点ともいえる教育工学と外国語教育の専門的知見から、様々なインスピレーションをいただくと共に、研究作業に関連する各種実務を通じて、あらゆる方面からのご指導をいただいた。ここに深謝の意を表する。本研究第 5 章の授業実践では、国際交流基金北京日本文化センター日本語教育専門家の佐藤修氏及び北京市求実職業学校応用日本語担当の張玉秋先生に関連資料を提供していただくと共に有益なご助言をただき、授業実践における献身的なご協力とご助力をいただいた。ここに同氏、同先生に対して心より感謝の意を表する。最後に、本研究の授業実践に参加し、協力的に各作業を実施してくれた北海道札幌国際情報高等学校と北京市求実職業学校の学生たちに、心より感謝の意を表する。

付録

第１章　外国語教育情報化の流れ

付録 1.1　IT 戦略本部による情報化政策推進政策の概要

年度	政策	教育情報化、IT/ICT 活用教育推進に関する内容
2001	e-Japan 戦略	人材育成の強化 【目標】小中高等学校及び大学の IT 教育体制を強化するとともに、社会人全般に対する情報生涯教育の充実を図る。 【推進すべき方策】 ・ミレニアムプロジェクト「教育の情報化」を早期に達成し、小中高等学校のインターネット接続の環境を整備し、ITを利用した教育を可能にする。また、図書館、公民館等の公共施設にインターネット接続可能な環境を整備するとともに、教育用コンテンツの充実を図る。 ・IT を使った授業や IT の倫理・マナー教育を充実する。インターネット時代にますます重要となる英語教育を充実させるとともに、数学や理科などの科目を重視して論理的思考力を育てる。同時に、自己表現能力を培い、創造力の涵養に努める。 ・学校単位でインターネットを活用した国内外の他地域の学校との交流を促進し、異なる文化・立場を持つ人々とも協働できるような人材を育てる。
	e-Japan 重点計画	学校教育の情報化 ・2001 年度に全公立学校をインターネット接続 ・2005 年度までに全クラスで PC を活用 ・2001 年度にすべての公立学校教員が PC 操作に習熟 ・2001 年度に 1000 人の IT 関連特別非常勤講師を任用 ・2005 年度までに学習資源のデジタル化と学校導入
	e-Japan2002 プログラム	教育及び学習の振興並びに人材の育成 【学校教育の情報化等】 高速・超高速インターネットの整備状況等を踏まえつつ、学校のインターネット接続について、ADSL や光ファイバー等による接続への切り替えを推進する。 実際の教育現場で IT が十分に活用されるよう、公共機関が保有する映像コンテンツの活用、学習資源等のデジタル・アーカイブ化の促進、ネットワーク提供型のコンテンツの積極的な開発等により、多様な教育用コンテンツの充実・普及を図るとともに、各種の教育用コンテンツの検索、ダウンロードが可能な教育用ポータルサイトの充実を図るなど、教育用コンテンツの普及のための体制を整備する。 学校教育における IT の活用を一層推進するため、教員の IT 指導力の一層の向上を図る。
	e-Japan 重点計画、 e-Japan2002 プログラムの加速・前倒し	IT人材育成の充実 【学校教育の情報化】 2001 年までに実施： ・学校、図書館等の超高速インターネット接続の推進及び関連するIT環境の整備等 ・小中高等学校等へのIT専門家1万人派遣

		・教育情報ナショナルセンター機能の整備 2002 年度内に実施: ・「IT人づくり計画」の実施(学校の高速・超高速インターネット接続の推進、コンテンツの制作・流通の促進、教員のIT指導力の向上、国民の情報リテラシー向上、IT職業能力開発、専門的IT人材育成等
2002	e-Japan 重点計画-2002	「重点政策 5 分野」に「教育及び学習の振興並びに人材の育成」 【目標】 小中高等学校及び大学等の IT 教育体制を強化するとともに、社会人全般に対する情報生涯教育の充実を図る。 【学校教育の情報化の加速】 インターネット利用環境の向上、IT 活用型教育の本格的実施の推進、教員の指導力の向上、教育用コンテンツの充実・普及、障害のある子どもたちへの対応により、学校教育の情報化を加速する。 【育成すべき IT 人材】 将来を担う子どもたちが IT を活用できる能力を身につけるための「学校教育の情報化等」により、「IT 人づくり」の推進
2003	e-Japan 戦略 II	利活用時代の IT 人材の育成と学習の振興 【目標】 2005 年までに、日本発の遠隔教育がアジア各国において受講可能な体制を整備する。 【政府がとるべき方策】 子どもたちの創造性を育み、かつ、分かりやすい授業等を実現するため、学校の IT 環境の充実の他、良質なネットワーク型の学習コンテンツを初等中等教育機関等へ流通させる環境の整備や国の学習情報ポータルサイト機能の確立を行う。 【民間に呼びかける行動】 学校の IT 環境の充実の他、良質なネットワーク型の学習コンテンツを初等中等教育機関等へ流通させる環境を整備する。(教育関連産業等)
	e-Japan 重点計画-2003	e-Japan 重点計画-2002 を踏まえ、「重点政策 5 分野」に「人材の育成並びに教育及び学習の振興」 【IT を活用した遠隔教育の推進】 IT を活用した遠隔教育は、学習者にとって時間や場所の制約を克服できるものであり、有効な教育方法である。すでに、大学等においてインターネット授業を実施している事例もあるが、今後も IT を活用した遠隔教育を一層推進していく必要がある。 ・大学等の e-Learning の推進 ・e-Learning を活用した教員の IT 指導力の向上 【学校の IT 環境の整備】 ・公立小中高等学校等の IT 環境の整備 ・私立学校の IT 環境の整備 ・在外教育施設の教育コンピュータ整備 【IT 活用型教育の本格的実施の推進】 ・高等学校における情報教育の推進 高等学校において、2003 年度の入学者から、各教科や新たに創設される「総合的な学習の時間」で情報通信ネットワークを活用するとともに、普通教科「情報」を新設し必修化することによ

		り、コンピュータ等を活用して自分の考えを表現することなどができるようにする。 ・e-Learning を活用した教員の IT 指導力の向上 2005 年度まで、教員が自由な時間に必要な IT スキル等を学ぶことができる e-Learning を活用したネットワーク提供型の研修カリキュラムを開発し、その活用を推進する。
2004	e-Japan 重点計画-2004	e-Japan 重点計画-2003 を踏まえ、「重点政策 5 分野」に「人材の育成並びに教育及び学習の振興」 【学校教育でのIT活用】 パソコンの整備やインターネット接続、あるいは教育用コンテンツの開発等の環境整備に取り組み、教育の情報化を進めるための基盤は出来つつある。今後は、これらを有効に活用し、ITの持つメリットを最大限に活用して、いかに教育効果を高めていくかが課題になる。豊富なデジタル教材が提供される工夫など、整備されたIT機器を効果的に活用する経験を蓄積し、そのノウハウを全国的に普及していくことが今後重要になる。高等専門教育では、ITを使うことで、時間、空間の制約がなくなり、教育を受ける機会が大きく広がる可能性があり、急速に革新する技術水準にキャッチアップする必要のある社会人技術者等のニーズに対応することも重要である。 ・IT を活用した遠隔教育の推進 国際的な労働市場における我が国の人材の競争力を向上するため、専門職、社会人等が遠隔教育により継続的に知識の向上ができるようにする。この一環として、2005 年度までに遠隔教育を実施する大学学部・研究科を 2001 年度の約 3 倍とすることを目指す。 ・大学等の e-Learning の推進 ・授業等におけるネットワーク型教育用コンテンツ活用の推進 ・教育用コンテンツの活用・普及 ・デジタル教材の開発 ・高等学校段階における情報教育の推進 将来、IT 分野において活躍できる人材を育成するため、2004 年度中に、10 程度のモデル高等学校における先進的なIT教育を実施するとともに、優れたIT能力を有する生徒を対象に課外セミナーを実施する。
2005	IT 政策パッケージ-2005	学校教育の情報化の推進 ・学校のIT環境の整備の推進 ・情報モラル教育の推進 ・教育用コンテンツの整備と活用 ・教員の評価に関し IT 活用能力の観点の導入 ・大学入試試験における情報科目の導入促進
	IT 新改革戦略	「高度IT人材育成の好循環メカニズムの形成」実現のための方策 大学院等での実践的なIT教育の機能の強化、情報サービス産業等の構造改革の推進、初等中等教育における IT に関する能力の伸長・底上げに資する改革の推進(2007 年度以降)
2006	重点計画-2006	「次世代を見据えた人的基盤づくりー全ての教員へのIT機器の整備、IT 活用による学力向上ー」 ①学校における IT 基盤の整備 教員一人に一台のコンピュータ及びネットワーク環境の整備並び

		に IT 基盤のサポート体制の整備等を通じ、学校の IT 化を行う。 ・教員の IT 活用環境の整備 ・学校における超高速インターネット接続等の実現 ・児童・生徒 3.6 人当たり 1 台の教育用 PC の整備 ・初等中等教育におけるマルチプラットフォーム化の推進 ・学校における情報セキュリティ対策の推進 ・地上デジタルテレビ放送の教育活用の促進 ・情報システム担当外部専門家（学校 CIO）等のサポート体制の在り方の検討 ②教員の IT 活用指導力の向上 ・教員の IT 活用指導力の評価の基準の具体化・明確化 ・教員のIT活用環境の整備 ③ 児童生徒の学力向上のための学習コンテンツの充実 自ら学ぶ意欲に応えるような、IT を活用した学習機会を提供する。 ・教育情報ナショナルセンター機能の充実 ・先進的科学技術・理科教育用デジタル教材等の開発・普及 ④児童生徒の情報活用能力の向上 教科指導における IT の活用、小学校における情報モラル教育等を通じ、児童生徒情報モラルを含む情報活用能力を向上させる。 ・小学校段階からの情報活用能力の向上 ・情報モラル教育の推進
2007	IT 新改革戦略 策パッケージ	2005 年「IT 新改革戦略」参照
	重点計画-2007	「高度 IT 人材育成の好循環メカニズムの形成」 【初等中等教育における改革】 ・IT に関する能力の伸長 学習指導要領改訂に向けた見直し 初等中等教育段階からの高度 IT 人材の早期育成 ・IT に関する能力の底上げ 先進的かつ効果的な教育の推進 IT 環境の整備 「次世代を見据えた人的基盤づくりーすべての子供と教員に最高の IT 環境を、効果的な教育・学力向上を目指してー」 ① 学校における IT 基盤の整備 教員一人に一台のコンピュータ及びネットワーク環境の整備並びに IT 基盤のサポート体制の整備等を通じ、学校の IT 化を行う。 ・教員の IT 活用環境の整備 ・公共ネットワークを活用した教育アプリケーションの展開 ・初等中等教育におけるマルチプラットフォーム化の推進（ ・学校における情報セキュリティ対策の推進 ・地上デジタルテレビ放送の教育活用の促進 ②教員の IT 活用指導力の向上 教員の IT 活用指導力の評価等により教員の IT 活用能力を向上させる。 ・教員の IT 活用指導力の向上 ・教員の IT 活用環境の整備 ③ 児童生徒の学力向上のための学習コンテンツの充実

		自ら学ぶ意欲に応えるような、IT を活用した学習機会を提供する。 ・教育情報ナショナルセンター機能の充実 ・先進的科学技術・理科学習用デジタル教材等の開発・普及 ④児童生徒の情報活用能力の向上 教科指導における IT の活用、小学校における情報モラル教育等を通じ、児童生徒の情報モラルを含む情報活用能力を向上させる。 ・学習指導要領改訂に向けた見直し ・先進的かつ効果的な教育に関する実践研究 ・情報モラル教育の推進 ・先進的な取組を行う諸外国との情報交換 「世界に通用する高度 IT 人材の育成世界に通用する高度 IT 人材の育成－産学官連携体制の構築－－産学官連携体制の構築－」 ②インターネット等を用いた遠隔教育の促進 インターネット等を用いた遠隔教育を行う学部・研究科の割合を 2 倍以上にすることを目指し、大学におけるインターネットを用いた遠隔教育等の推進により、国内外の大学や企業との連携、社会人の受け入れを促進する。 ・大学等におけるインターネット等を用いた遠隔教育の推進
2008	IT による地域活性化等緊急プログラム	人材育成・活用支援 ・教育環境の地域間格差是正のための e-ラーニング等に係る環境整備支援 ・ メディア教育開発センターを通じた大学におけるITを用いた教育の推進による人材育成 ・ 実践的高度 IT 人材育成についての検討 ・ 実践的な PBL（Project Based Learning）教材や高度 IT 人材育成支援プラットフォームの基盤技術の開発 ・ 高度 IT 人材育成のための好循環メカニズムを形成するための総合的な取組 ・ 情報通信分野の専門的な知識及び技能を有する人材を育成する情報通信人材研修事業に対する支援 【能力の伸長】 ・意欲を持った生徒への学習機会の提供 ・大学における専門教育にスムーズに移れる基礎的プログラミング能力等の育成 【裾野の拡大】 ・基礎的なITリテラシーの育成 ・ITを学ぶことの重要性について普及啓発
	IT 政策ロードマップ	「高度 IT 人材育成の規模拡大・定着及び裾野の拡大、並びに日本と海外のバランスの取れた IT 人材の活用」 初等中等教育段階における、発達段階に応じた体系的な情報教育の一層の推進、学校のIT環境整備の促進及び教員のIT活用指導力の向上。高等教育段階における、e ラーニングを行う学部・研究科の割合の倍増に向けた、IT活用教育への支援や教育コンテンツの発信等の推進。 ・IT環境の整備

		・学校のITサポート体制の強化 ・初等中等教育段階からの高度 IT 人材の早期発掘育成
	重点計画-2008	「次世代を見据えた人的基盤づくりーすべての子供と教員に最高の IT 環境を、効果的な教育・学力向上を目指してー」 ①学校における IT 基盤の整備 教員一人に一台のコンピュータ及びネットワーク環境の整備並びに IT 基盤のサポート体制の整備等を通じ、学校の IT 化を行う。 ・IT インフラの整備 IT 環境の整備 教員の IT 活用環境の整備 公共ネットワークを活用した教育アプリケーションの展開 デジタルテレビ等を活用した先端的教育・学習に関する調査研究 ・学校の IT サポート体制の強化 ②教員の IT 活用指導力の向上 教員の IT 活用指導力の評価等により教員の IT 活用能力を向上させる。 ・教員の IT 活用指導力の向上 ③ 児童生徒の学力向上のための学習コンテンツの充実 自ら学ぶ意欲に応えるような、IT を活用した学習機会を提供する。 ・教育情報ナショナルセンター機能の充実 ・理科教材開発・活用支援 ④児童生徒の情報活用能力の向上 教科指導における IT の活用、小学校における情報モラル教育等を通じ、児童生徒の情報モラルを含む情報活用能力を向上させる。 ・新しい学習指導要領改訂の実施に向けた取組み ・先進的かつ効果的な教育に関する実践研究 「世界に通用する高度 IT 人材の育成ー産学官連携体制の構築ー」 ・初等中等教育段階からの高度 IT 人材の早期発掘育成 ②インターネット等を用いた遠隔教育の促進 インターネット等を用いた遠隔教育を行う学部・研究科の割合を 2 倍以上にすることを目指し、大学におけるインターネットを用いた遠隔教育等の推進により、国内外の大学や企業との連携、社会人の受け入れを促進する。 ・大学等におけるインターネット等を用いた遠隔教育の推進 ・高度 IT 人材育成支援プラットフォームの基盤技術開発
2009	デジタル新時代に向けた新たな戦略～三か年緊急プラン～	三大重点プロジェクトの 1 つとして、「デジタル教育の推進とデジタル活用人財の育成・活用」 【概要】 デジタル活用人財の裾野を広げ、教育の質を高めるデジタル教育及びそのための環境整備を実施する。具体的には、初等・中等教育段階を中心としたデジタル活用教育の充実のため、以下の施策を実施する。 ①学校等でのデジタル活用授業等を一層推進するため、校内 LAN、コンピュータ、電子黒板、地上デジタルテレビ等のデジタル

		教育基盤を全国に整備する。また、学校等における地上デジタルテレビ等を活用したわかりやすい授業を促進するため、教育・教養コンテンツの充実、アーカイブ化による教室への配信等の環境整備を推進する。 ②上記の基盤も活用しつつ、モデル地域として教育専門家等によるサポート体制の下で、以下に掲げる先進的なデジタル教育を実施する。当該モデルの成果は、サポートする教育専門家等により全国へ普及、世界への提案を実施する。 ・ コンピュータ、校内LAN、電子黒板、地上デジタルテレビ等のデジタル教育基盤、デジタル教科書やデジタル放送番組等のデジタル教育コンテンツの活用による効果的な教育方法の開発・実施を推進する。 ・ 教員のデジタル活用指導力の向上を図るため、活用指導力の評価と研修、「ICT 支援員」の配置・派遣の促進、e-learning の活用などを実施する。 ・ デジタル技術を活用して、家庭・地域・学校の連携を図り、住民参加の学習などを推進する。 ・ 成績のオンライン一元管理など、校務の情報化を進め、教員の校務処理負担を軽減する。また、低廉な費用による校務情報化を実現するため、ASP・SaaS の活用を図る。その際、成績等の個人情報を含む教育情報の重要性に鑑み、教育機関向けの ASP・SaaS サービスに必要となる安全性・信頼性基準を示し、これを満たしていることを検証するための情報開示指針を策定する。 ③デジタル活用能力の育成が不可欠となっている一方で、ネットいじめなど違法・有害情報に伴う弊害が社会問題化しているため、こうした問題に対し、学校のみならず社会総がかりの取組を推進する。この一環として、デジタル情報・技術の活用だけでなく、ネット上の危険への対処能力を持ちつつ、自らがネット上で与え得る危害の可能性を認識して自制する能力を養うなど、情報モラル教育を充実するとともに、企業等とも連携しつつ、家庭・地域におけるリテラシーの充実のための取組を推進する。 【学校現場が目指すべき成果】 ① 全ての公立小中高等学校等の教員への一人一台のコンピュータ配備の実現による校務の効率化と教員のデジタル技術活用能力等の向上が実現する。 ② 校内 LAN 整備率 100%、児童生徒 3.6 人に 1 台のコンピュータ整備、普通教室や特別教室における地上デジタルテレビ、電子黒板等の配備により、児童生徒のデジタル技術活用能力の向上が実現する。 ③ 学校授業における積極的なデジタル技術の活用と、インターネット上の情報等の適切な活用により、教科書における学習内容に幅と奥行きを持たせたインタラクティブな授業が実現し、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上が図られる。 ④ 初等中等教育段階における情報リテラシー教育の充実を図り、情報リテラシーを「読み書き」と同様、すべての生徒が習得すべき基礎的技能とする。
	i-Japan 戦略 2015	三大重点分野の 1 つとして「教育・人財分野」 2015 年までに、幼保小中高等学校等における教育、大学等にお

		ける人財育成に関し、以下を実現する。 1. 客観的な効果測定の下で、子どもの学習意欲や学力を向上させる。 学校での授業において、各教科の特性に応じたデジタル技術の活用を進め、よりわかりやすく、創造的、発展的な双方向の授業を実現し、デジタル技術を活用した教育手法の効果の客観的な測定の下で、子どもの学習意欲や学力を向上させる。 2. 子どもの情報活用能力を向上させる。 情報教育の充実により、子どもの、①情報及び情報手段を主体的に選択し、活用していくための能力、②情報手段の仕組みなどの理解、③情報化の影の部分に対応できる能力・態度を向上させる。 3. 高度デジタル人財のミスマッチが生じない安定的・継続的な仕組みを確立する。 大学等において高度な教育拠点を広域展開し、国際的にも通用する高度デジタル人財を安定的に育成する。産業界では、各人の経験に応じて更に能力を引き上げていく人財育成を継続的に行う。 4. 大学等における情報教育、デジタル基盤、遠隔教育等を充実する。 大学等における情報教育、デジタル基盤を充実するとともに、先進的なネットワークを活用した遠隔教育や教育コンテンツを活用した授業・学習支援を広く実施する。 【方策】 1. ネットワーク化の進展も踏まえ、各教科の授業におけるデジタル技術の活用及び情報教育を推進し、子どもの学力や情報活用能力の向上を図るため、明確な効果評価の下で、以下の方策を実施する。 (1)教員のデジタル活用指導力の向上 教員のデジタル活用指導力のチェックリストを活用して、各学校や教育委員会等で、教員の実態に応じた研修を組織的・計画的に実施できるようにし、概ね全ての教員がデジタル技術を活用して指導できるようにする。 (2)教員のデジタル活用をサポートする体制の整備全ての教育委員会及び小中高等学校等で、デジタル技術と教育両面に理解があり、教員と共にデジタル技術の活用法や教育の質の向上を考え、支援する人財及び統括責任者を配置する。 (3)双方向でわかりやすい授業の実現双方向でわかりやすい授業の実現に資するハード・ソフトの一体的な整備充実を図る。具体的には、学校における活用の実態や効果の検証も踏まえ、(ア)教育用コンピュータ、校務用コンピュータ、校内 LAN、超高速インターネット接続について、IT 新改革戦略に沿って引き続き整備を進めるとともに、(イ)電子黒板 6 等デジタル機器の教室への普及を進め、これらと一体的に(ウ)教育コンテンツの開発と活用、公的機関の保有するコンテンツの教育利用を推進するとともに、(エ)デジタル技術を活用した効果的な教育方法の開発・普及を行う。 (4)情報教育の内容の充実 新しい学習指導要領を踏まえ、課題や目的に応じて情報手段を

		適切に活用したり、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造したりする能力、情報や情報手段の特性を理解する能力や、情報セキュリティも含む情報モラル等の情報活用能力の育成を図る。 (5)校務の情報化、家庭・地域との情報連携 校務用コンピュータやネットワークを活用した一層の校務の情報化を推進し、業務の軽減と効率化を図り、教育の質の向上と学校経営の改善を図るとともに、家庭・地域との情報連携や、企業の協力により、地域が一体となって教育を推進する体制を構築する。 ＜中略＞ 3. 大学等における情報教育、デジタル基盤の充実を図るとともに、デジタル技術を活用した遠隔教育や授業・学習支援を促進する。 (1)情報教育、デジタル基盤の充実 大学等における情報教育のモデル事例等の普及・啓発を図るとともに、多様な教育活動を可能とするデジタル基盤の整備を図る。 (2)教育コンテンツの充実・活用 高度な教育や補習教育のための教育コンテンツの充実・活用を促進する。 (3)先進的なネットワークの活用 先進的なネットワークを活用し、遠隔地間でも臨場感のある教育環境を実現したり、教材等の教育資源を広く効率的に活用することを可能にする教育環境を実現すること等により、教育効果の向上を推進する。

首相官邸 WEB サイト「IT 戦略本部」（http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/enkaku.html）を元に作成

第６章　授業評価オンラインアンケートの自由記述回答

授業評価アンケートの自由記述回答部分の全文は下記の通りである。基本的に原文どおりであるが、一部の誤字脱字を修正した。

付録 6.1　自習項目（パソコン設定・ピンイン入力・入力練習）に関するアンケート

肯定的（＋）評価	日本のみ	説明文など、わかりやすく書かれていて、中国の生徒との交流が毎回楽しみになりました。 色も落ち着いていて、かわいかったです♪ 目に優しくてとてもよかったです！ 可愛らしくていいと思います！ とてもわかりやすくてよかったです。 中国語と日本語が並んで書かれているので、わかりやすくて見やすいサイトでした。 デザインもかわいらしかったと思います。 すごい見やすかったです！ とても見やすかったです！！ 特にありません。 とても、見やすくてわかりやすかったです。 完璧だと思う 全体的なデザインはシンプルで文章が読みやすかったです。

否定的（－）評価	日本	印象に残っていません。 目立つようにしたほうがいいと思います。 ただ、字はもう少し大きくしたほうがより読みやすいと思います。

付録 6.2　教室で行う教科書・文法中心の授業と比べて、よかった点、いまいちだった点、気付いた点、感じたこと

肯定的（＋）評価	日本のみ	実際に日常で使うような中国語を学べた。中国人との交流はとても楽しいのでまた何回かやりたいです。 とても楽しく中国語を学ぶことができました♪ 中国の餃子やお茶やお菓子を食べたりゲームをしたり、サザエさんの劇を発表したり、中国人とやりとりをしたり、本当に楽しかったです！！ ２年間とても楽しかったです！ 卒業してもまだ習って居たかったです(;_;) 今後は仕事として中国語を使いたいので もっと頑張りたいです！！！！ どうもありがとうございました！！！！ 自分で考えて文を作ることで、習った文法を活用することができたと思います！ 中国語は難しくてなかなか話せなかったですが日常会話がすらすらできるように練習したいと思います！ ピンイン入力だったので、いままでよくわかっていなかったピンインの確認や練習もできてよかったです。 また、実際に同年代の中国の学生にメールを送るなど、普段の生活ではできないことも経験できたのでいい勉強になりました！！ 教科書を読む授業だけだったら少し物足りないけど、パソコンを使って実際に中国人の学生とコミュニケーションがとれて楽しかったです。最近の中国の学生について知れたし、中国人に対する親近感もわきました。 よかった点は、今後パソコンで中国語を用いる場合があったときのために役立ったと思います。 また、中国の学生との交流ができたことが大変よかったです。 いまいちだった点はとくにありません。 パソコンで中国語を打つのはちょっと難しかったけど楽しかったです！ 交流とかもできてよかったのでもっとやりたかったです。 ピンイン覚えてなくてわからなかったことがけっこうありましたが、逆にいろいろ覚えれたりもしました。 パソコンを使うと実際に中国の人たちと交流ができるので、さらに中国語への興味や関心が湧きました。それと、中国語で例文を打つやつは、ピンインと漢文の勉強ができるので良かったです。 特にないです 中国人とチャットすることで中国語が身近なものに感じた。 中国の学生と交流できた事はすごく良い経験になった 本物の中国の方と交流できて、中国語を実践練習できたのでよかったです。 中国の生徒と実際にコミュニケーションが取れるのは凄く良かった（けど、深いところまで関係を持つことができなかったのがもったいない気がした。） 中国の人と実際に交流できてよかったです。 実際に中国の人と話せて、生きた中国語と接することができたのがよかったと思います。（ただ、ピンインを入力する授業に必要性を感じませんでした。） パソコンで中国語を打てるようにする設定の仕方がわかったので、家のパソコンでもやってみることができるようになりよかったです。

		中国人とコミュニケーションをとることができてよかったです。 （でも単語をあまり知らなかったので、文を中国語にするのが難しかったです。） ほかの国の人と交流できてよかった！ 実際に掲示板で中国の学生と交流できたのでとてもよい経験になりました。（単語がわからなくて中国の学生への返事を書くのが難しかった。）でも中国語の入力の仕方とかもわかったし、 学生との交流もできて楽しかった。 繰り返し練習できるのでよい 教科書では書いてある文章しか学習しませんが、中国の生徒と交流を図ることで、自分で文章を作り、実践的に学習できるのでよい学習方法だと感じました。 ピンインがよくわからなかったから、実際に中国語を使って交流できたことはとても楽しかったです。中国の方がすごく日本に興味があるんだなぁとびっくりしました。（インターネットへの接続や設定に時間がかかったり、操作が難しかったりしたのが残念です。）
否定的（－）評価	日本のみ	中国語の入力が難しかったので、もっと頻繁に call で練習したかったです。 仕方が無いことだとは思うのですが、読み込みが遅くて思うように作業がはかどらないのが気になりました。 ピンインを覚えていないと打てないのでやや手こずるときもあった。 ピンインが難しかった （中国の生徒と実際にコミュニケーションが取れるのは凄く良かった）けど、深いところまで関係を持つことができなかったのがもったいない気がした。 趣旨がいまいちわからなかったです。ピンインを先生が言ってそれを打つだけではあまり身につかないと思いました。 ピンインが難しかったので、 リスニングが難しかったです。 （実際に中国の人と話せて、生きた中国語と接することができたのがよかったと思います。）ただ、ピンインを入力する授業に必要性を感じませんでした。 中国語の読み方がわからなくて、ピンインを打っても漢字が出てこないことがあって少し困りました。 （中国人とコミュニケーションをとることができてよかったです。）でも単語をあまり知らなかったので、文を中国語にするのが難しかったです。 もっと単語とか基本的な文法を覚えてから掲示板での交流をしたかった。 単語がわからなくて中国の学生への返事を書くのが難しかった。（でも中国語の入力の仕方とかもわかったし、 学生との交流もできて楽しかった。） ピンインを覚えれなかったので全然パソコンで入力ができなくて困りました。 もっと最初のころにピンインをしっかりやったほうがいいと思う。 （ピンインがよくわからなかったから、実際に中国語を使って交流できたことはとても楽しかったです。中国の方がすごく日本に興味があるんだなぁとびっくりしました。）インターネットへの接続や設定に時間がかかったり、操作が難しかったりしたのが残念です。

※1 人の回答に肯定的評価と否定的評価が含まれる場合、両方に記載し、該当しない箇所には（ ）を付けた。

付録 6.3　中国人学生と文化・習慣を比較することをどう感じたか、その理由

肯定的（＋）評価	日本	日本とはぜんぜん生活や考え方が違うので、それを知るのは面白かったです。 中国の子は高校で学食を食べるのが普通みたいでちょっとうらやましかったです！ あとは放課後そのまま帰宅する子も多く、きっと勉強するんだなって思うと自分の生活を正さなきゃいけないな～と思いました笑 なかなか中国の人とかかわる機会がなかったのでよかったです。 日本人と結構似ているところを発見できたから。

		中国語の勉強にもなったし、少しですが文化の違いも知ることができたので。 中国の人とはいろいろな違いがあって、少しでも相手の文化を知れた気がして、楽しかったです。 自分と違う国の同世代の学生はどのように過ごしているか？ということに興味があるからです。そこでやっぱりみんな同じだ～とか違うとか、わかるからです。 中国人と実際に中国語での質問などができたので楽しかった。 はじめて、中国語で交流できたから もともと文化の違いを学ぶことが好きだから、 直接中国のことを知れて楽しかった。 このような機会がなければ知る事がなかったと思うから、よい経験になった 距離は近いけど文化の違いは大きいことがわかったから。また、お互いの国について知識を深めることが良かったから。 新たな発見があったからです 中国の人も日本の有名人が好きだという人がいっぱいいておもしろかったです。 日本と中国の楽しさ 投票している学生が少なくてあまり比較になっていなかった。 違いがよくわかって面白かったから。 いろんなことを知れたから 見ただけでわかった。 日本と中国の学生の違いがわかったから。 日本との違いを感じられた。 日本人では当たり前と思っていることも中国など外国の人と比べると大きな差が出ているところにおもしろさを感じます。 中国と日本の違いを知るのが楽しかった。 日本文化と違うところをどんな風だろうと想像してみるのが楽しかったからです。
	中国	民族的不同, 风俗习惯不同, 必须知道他们的习俗这样可以加深了解。 没时间关心, 有点意思。 日本学生的日常生活中的习惯也能接受 很好, 可以了解日本 有许多不相同的地方 日本学生可以自己带便当上学。 都差不多一样, 就是放学后日本同学参加社团。 日本班里的同学可以带便当去学校, 和朋友找一个地方一起吃午饭。中国学生封闭式管理, 在校吃饭。 因为他们课外生活很丰富哦~ 放学后, 日本学生会参加学校的社团活动, 丰富自己的课外活动。
否定的（一）評価	日本	中国人の回答を見れなかったです； 文化・習慣を比較した覚えがありません。
	中国	不太了解 没太大要求 没意思 因为都在亚洲, 所以两国文化差异不太大
その他	中国	我比较喜欢日本学生的校服。 日本学生进学校要换校鞋? 回到家洗澡, 长辈到晚辈按顺序洗? 我觉得日本的茶道很有趣, 他们在喝茶之前会吃点心, 但是中国不会, 而且会切成小快吃, 用纸巾垫着吃。

		在中国吃拉面时不出声, 而在日本出声是一种礼貌。

※中国側の学生は、交流活動による中国と日本の文化比較ではなく、自分たちがこれまでに学んだ日本文化に関する知識に基づき回答した学生もいたため、それらを「その他」欄に記載した。

付録 6.4　お互いの異文化比較投票結果およびコメントに驚きや興味を感じたかどうか、その理由

日本	中国と日本の違いを知るのは面白かったです！ もっと違いがあれば交流して知ってみたいと思いました。 上にも書いたように、お昼ご飯は日本とはやっぱり違うんだなと思いました！ 大学では学食だと思うので楽しみです＾＾ 自分たちとやっぱり感覚が違うところもあって初めて知れたことがあったことです あまり詳しく見ていないですが、自分たちと同じだな～と思ったり、違うと思ったりして、そういう比較がおもしろかったです。 日本のものを意外とたくさん知っていたから 特に大きな差はないけれど、昼食はある程度自由なんだと思った。 勉強時間が日本人と同じくらい。 まず、学校の違いを感じました。日本では弁当を持ってくることが主流なのに、中国では弁当持参は誰もいないことには驚きました。食堂や給食を選んでいうところを見ると、学校の体制自体が違うんだなぁと思いました。 昼食に弁当を持参しない人が多くて驚きました。食堂があるんですね… 日常生活からぜんぜん違うことに気づきました。 まず日常の生活からまったく違うんだなと思いました！ 日本の学生の生活を中国の子が見たらきっとびっくりするんだろうなと思いました。 同じ年代ということと国が近いということもあってか、国は違ってもものの考え方の違いはあまりないように感じました。 日本の漫画やアニメ、芸能人のことを知っていたり好きだということがけっこうあることがよくわかりました。 日本のマンガやアニメに興味があるんだなと思いました。自分が読んでいるマンガが外国でも読まれていると思うと、少しうれしい気分でした。 漫画などの中国語名がユニークだった。 日本では中国人で有名な人はあまりいないと思うけど、中国では日本の有名人が好きだという人がいっぱいいてびっくりしました。
中国	比较比较不一样 日本学生放学后的活动让我比较感兴趣。 对日本的美食有性趣 很好玩, 可以交朋友, 学习日语 日本同学放学后的社团活动 我看到了好多与自己国家不一样的特点 了解了日本学生的风俗习惯, 进步与他们有了深的沟通 通过交流了解了日本学生和中国学生在家里地位的不同。 觉得他们放学后的活动很有趣, 学生的生活也很充实。 我了解了他们的节日与中国节日的风俗习惯不同。在中国端午节是要吃粽子的, 在日本的端午节是男孩节。 我懂了中日学生之间生活差异。日本学生放学后课外活动比较多, 午饭时, 日本学生会带便当到学校。 我知道了日本学生放学后参加的活动十分丰富。社团活动很多。

付録 6.5　今後、異文化比較してみたい内容

日本	友達との遊び方、趣味、食べ物とか♪ やっぱり彼氏、彼女のテーマや好きな歌手のテーマが気になります。 将来のゆめ 具体的な学校生活についても比べてみたいです。 休日の過ごし方 比較ではないかもしれませんが、どのように英語や日本語を勉強しているのかその方法を知りたいです。 友達や恋人との付き合い方にも違いがあるのかを知りたいです。 クリスマス、お正月などをどのように過ごすか。 １日どれくらいテレビを見るか。 クリスマス、夏休み、冬休み 中国人との交流をもうちょっとやりたかったです！！ 家での生活の違いについて、おこづかいをいくらもらっているか 流行の音楽など 睡眠時間 一人っ子の割合 中国人と日本人が好きな漫画 好きなドラマとか・・・？ 中国のスポーツ 学校での好きな行事とかを比較してみたい。 好きな音楽 中国のお菓子について パソコンの使用時間 休日は何をして過ごすか。 イベントについて。 学校登校方法、部活の種類 誕生日、クリスマスの過ごし方など （そう言えば中国では燃えやすいからとツリーを飾るのを法的に禁止されたと聞いたのですが…？）
中国	可以更加了解一些对方的性趣爱好等。 多见面 学习方法 美食 能聊天吗? 多学习,不然跟不上进步 日本动漫 日本流行的趋势 爱好,流行,节日 日本明星,赤西仁 希望以后可以多多交流这方面的知识。让两个国家都能很好的学习不同的文化。 学校学习 中日茶道对比 想了解日本的一些特别的节日习俗。 我想了解日本的美食~嘿~ 我想了解日本动漫″多拉A梦″的结局,以及在日本受欢迎的程度和具体事情,以及日本作家″东野圭吾″的小说作品。 想多了解日本演员,艺人,以及日本动漫,日本推理小说,东野圭吾的作品。 想知道飞轮海在日本的发展

	我想了解日本艺人的最新动态,还有一些新的日剧及专辑。 日本艺人

付録 6.6　BBS で交流した話題に興味・関心が持てた、その理由

肯定的（＋）評価	日本	直接交流ができたことすらうれしかったし、日本のアニメや音楽を知っている子が多くてうれしかったので逆に中国のことをもっと知りたくなったので！ 共通の趣味や好きな芸能人について話すのは全国共通で楽しかったです。 もっともっと話せたらいいなと思いました。 自分のコメントに直接返信をくれて、教科書よりもちょっと長いような文も読むことができたから。 中国で日本のアイドルが人気だと知っておもしろかった。 台湾の芸能人についての書き込みをしたので、それに対して「日本にも好きな人がいて嬉しい」など、たくさんの返信をもらって嬉しかったです。 また、中国の学生が日本のどのようなことに興味があるのかを知ることができてよかったです。 日本の漫画や芸能人で知っている人が多くておもしろかったです。 自分が聞きたい質問に実際に中国の学生が答えてくれたので、おもしろかったです。 逆に聞かれるのも、楽しかったです。 自分たちと違う考え方や趣味を持った中国人と交流ができたので楽しかったです。 お互いの生活について知ることができた 好きなアーティスト（しかもマイナー）を知っていたから。 中国で人気の日本人アーティストが知れて面白かったから。 日本のモデルについての話。中国で日本のモデルが人気があるのが意外だった。 自分の趣味について話をしました。 中国の方々とも共通の話題があるとわかって嬉しかったのと、様々な回答を貰えてとても参考になりました。 （ただ、テキストを読んでも解読出来なかった部分が多々あったのですが…） 中国でも、日本のアニメが流行っていて感動した。 中国で流行っている日本人の話題を BBS を通して知ることができた。 中国で日本の文化が想像以上に知られていたことに驚いたから 好きな食べ物でもけっこう同じものもあって共通点を見つけられてうれしかったです。 自分が知っているアーティストなどが話に出てきたから 私も知らないような日本の芸能人を知っていて(モデルとか)、日本の芸能人は中国でも人気なのかーと思った。 中国では流行っていることとか、中国で人気のある日本人とか、自分の興味があることを知ることができて楽しかった。 中国でも日本の歌手とかアニメを知っている人がいて、うれしかったしおもしろかった。
	中国	很感兴趣 想多了解一些文化节日,了解生活习惯 因为可以和年龄差不多的日本学生交流,增长知识,了解更多的日本文化,还能提高日语水平。 因为自己对日本学生的一些生活不是特别了解,但通过交流后,对日本学生的生活有了了解,很期待和他们交流一些文化和生活上的习俗,所以非常感兴趣。 不仅锻炼了日语,还让我把我想知道的事情很具体的了解。

否定的 （－） 評価	日 本	同じような話題が多すぎるし、話がかみ合わない。興味のない話なので続かない。

付録 6.7　中国側の高校生が書いた中国語を読んで理解できたか、その理由

否定的 （－） 評価	日 本	習ってない単語や文法とか、読めない漢字がたくさんありました… やはり教科書とは違って少しくずして文章を書いてたり、知らない単語もいろいろとでできたので、そういうところが少し難しかったです。それ以外では漢字から類推して読むことができました。 授業で習っていない漢字など、わからないものが多かったです。 難しい漢字がたくさんあったから。 習っていない文法などが多くて苦戦しました。 自分の語彙が少なすぎたので、解読するのが難しかった。 相手の中国語が難しかった。 文の成り立ちや単語がわかりませんでした。

付録 6.8　中国人学生と BBS を使って交流する授業をどう思うか、その理由

肯定的 （＋） 評価	日 本	上にも書いたとおりです!!! 共通の話題について話したり、今まで知らなかったことについて知ることができたのでとても興味が持てました。 自分で中国語を書くことができたし、相手の中国語を読むことができたから。 質問や回答を考えるのは難しかったけど、返信を見るのが楽しかったから。 自分の質問に答えてくれるのがうれしかったし、中国の学生が一生懸命日本語を使って書いてくれてるのがわかってうれしかった。 上にも書いたように、私の台湾芸能人についての書き込みにたくさんの返信をもらえたのでそれが嬉しかったです。また、書き込むことで同時に単語や文法の勉強にもなったのでそれがよかったです。 中国の人と自分の好きなこととか話したりいろんなことを聞いたりするのが楽しかったです。 日本に興味を持ってくれてるのがわかってすごいよかったです！ 自分の質問を書けるし、ピンインや漢文の勉強にもなりました。その返信を見るのも楽しみでした。 自分たちの習った中国語を実際に試せたのが、楽しかったです。 初めて中国人と中国語で交流したから。 異文化交流できてよかったと思ったから！ 好きなアーティスト（しかもマイナー）を知っていたから。 中国の学生と実際に交流できてとてもいい経験になったから。 中国の学生のリアルな流行などを知れておもしろかった 中国の人と交流ができてよかった。 めったにできない体験やからね こういう機会はあまりないし、中国人と交流したのは初めてだったのでとてもいい経験になりました。 中国人が実際に使っている中国語を見ることができたから。 いろんなことを知れたから 他の国の人と交流できたから。 中国の人と話す機会は普段ないのでよかったです。 中国の人と交流できる機会がなかなかないので、インターネットを通じて、自分で中国語を使って交流できてよかった。

		普段中国の人と交流することがないから会ったことはないけど返事を考えたりするのが楽しかった。 中国で流行っているものなどがわかったから。
	中国	还可以吧! 跟日本同学通过 BBS 交流觉得他们的日常生活与中国有很大区别,也很感兴趣。 可以增进两国的友谊,对我的学习也有帮助 很喜欢与日本人交流,不但可以丰富知识,还可以让我们见多识广 用一些简单的单词,难的不会 能长知识 能够认识很多日本朋友,聊一些自己想了解的题本文化知识。 能更深的了解日本学生的生活习惯和爱好。 因为可以互相交换有趣的事情 可以不用面对面也可以和日本人交流,了解他们的文化,最新事情,也可以交好多朋友,把我们的事情与他们分享。 可以进一步了解日本文化,更好的学习日语。了解日本的动漫。 把自己想说的话用日语打出来,很有成就感。
否定的（－）評価	日本	送信後、返信まで期間があるので話題が続かない。同じ人と交流したほうが楽しかった。ただ質問して答えるだけなのでよくあるような無難な質問ばかりになってしまった。しかも聞きたいことが自力では聞けない(打てない)。 交流すること自体は趣味について語り合ったり出来てとても楽しかったのですが、解読出来ないものが多々あったのでそのあたりに苦戦した為です。 まだ自分で中国語の文法を上手に使うことができないので、読むのも書くのも難しかった。 交流のできる回数が少なかった。 話題が興味なかった。
	中国	无趣 还是希望能面对面交流 因为没人理我 日本学生回信速度太慢 没什么用 一般吧,不经常接触,不知道

付録 6.9　ICT 活用の中国語授業で知識や技能が向上したと思うか、その理由

日本	少しずつ単語を覚えていくうちに、もっと使ってみたいと思うようになった。 知らない単語を覚えることができたし、今まで習った単語や文法を思い出すこともできたため。 普段の会話で使う単語を書くために、新しく単語を覚えることができた。 ピンインや単語を覚えることができたし、どのような中国語を使えばいいかも学べた。 中国語の入力の仕方を学べた！ 中国語のパソコン入力の方法を学ぶことができたことが一番よかったです。 パソコンでの中国語の打ち方とかまったくわからなかったので、できるようになったのがよかったと思いました。 ピンインとどの漢字を使うかがとても勉強になりました。 自分のわからない中国語など、先生に聞いたりして、新しい知識をつけることができたと思う。 中国語入力の方法がわかった 中国語がすこしできるようになった！ ことばと文化 何も知らなかったときより中国語にちょっとでも触れることで日本にはない漢字や同じ

	読み方の単語もあったりして、おもしろかったです。 買い物とか、数字とか、もし旅行に行ったら役に立ちそうだなと思った。 パソコンで中国語を入力する方法がわかりました。 中国語の入力の仕方がわかった。 コミュニケーションのとり方。 漢字の意味、使い方
中国	学会一些, 看懂了 独立的拼写日语, 安装软件等 打日文假名 日文输入 日文打字 会用电脑打日语的能力有了提高 用日文打字 知道了怎样利用 BBS 与外国学生交流。 学会了日语输入法。 学会了日文输入。 知道了如何用日文打字, 怎样打生僻字。 我可以用电脑打日语, 对日语学习有了很大提高。可以和日本学生交流。 学会了日语输入法

付録 6.10　BBS 交流が新しい中国語学習方法として役立つと思うか、その理由

肯定的（＋）評価	日本	いまどきのことば(実際に使う言葉)も使えるようになったから！ 交流することで楽しく中国語を使えるし、自分で考えれば自然と覚えることもできると思いました！ 楽しみながらできるので、ただ暗記するより力になると思うから。 実際に中国語でやり取りする難しさが学べるから。 実際にコミュニケーションをとることによって、教科書で学んだ単語などを活用できるから。 パソコン入力の仕方を学ぶことで、将来の仕事に役立つことができると思ったからです。 自分で中国語の文を作ったり読もうとして少しずつできていった感じがしてよかったです。 自分で考えた文を打ってみたりして、力試しになると思いました。それと中国の人と実際に交流することで比較もできておもしろかったです。 実際に、中国語を使えるので、習った身ににつけることができると思う。やってて楽しいですしね！ 自分で考えて情報を発信できるから。 実際に使う中国語ができてよかったから。 本当のピュアな中国人中学生との交流ができるから。 習っていない文法なども使われるので、解読したいと思い、中国語の文法を調べるきっかけに繋がると思います。 決まられた文法ばかりではなく、本当自分が伝えたい表現を知る事ができるから。 実際に使う中国語が使えたので良かった。 自分で文章をうって、ほかの国との人と交流することで、学習する意識や意欲があがる。 今は IT 社会だから。 パソコンを利用できる、中国語を学べるという二面でメリットがあるから。 自分で単語を調べて文を作ると単語が覚えやすいし、中国人の中国語を読める

		と自信がつくと思います。 楽しかったから。 授業は教科書の例文に沿って会話などをするけど、BBS 交流は教科書の例文どおりじゃないから、もっと自分の中国語の幅が広がると思う。 もっと中国語がわかるようになったら、ネイティブの人ともっとコミュニケーションがとれるので楽しいと思います。 教科書で習うだけではなく、実際に使うことによって、さらに中国語がわかるようになると思った。 授業をうけるだけじゃなくて自分で文を考えてうったりして単語も覚えるし使うことでピンインも覚えやすくなると思う。 実際に中国の学生とコミュニケーションをとれるから。
	中国	让我们更了解日本的文化与日常生活。 可以多交流一些朋友,丰富自己的知识 两国同学更主动的交流,增加了学习语言的乐趣 实际性很强,能让人印象很深刻 有,语言会有提高,对以后有更好的发展 通过 BBS 进行交流,既能够日高日语水平,又能与日本学生真实会话,还可以清楚自己现在的日语水平。 可以更深的了解两国的风俗习惯,提高学生的日语和中文能力。 这样交流更有利于日文水平提高。 传统学习比较死板,没有创意,大家都不太有想要学习的欲望。可以促进学习,让大家的学习都有所提高。 可以促进学习,学习日语增长了兴趣。不再枯燥,非常想学。
否定的（－）評価	日本	もっと力をつけてから取り組むべきだった。 CALL の授業が教室の授業に比べて少なすぎたので、よくわかりません。もっと CALL の授業が増えれば効果的かも知れません。 ピンインを使えるようになるのかもしれないが、趣旨がつかめなくて残念でした。
	中国	不了解 如果有的没坚持到底的话 有利有不好的地方。

参考文献

Bachman, L. F. (1990). Fundamental considerations in language testing. Oxford University Press.

Brumfit, C. (1981). Teaching the 'general student.' In Keith Johnson and. Keith Morrow (Eds.), *Communication in the classroom* (pp.46-51), London: Longman Group Ltd.

Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richard & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication* (pp. 2-27), Cambridge University Press.

Canale, M., & Swain, M (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing, *Applied Linguistics 1*, 1-47. doi: https://segue.atlas.uiuc.edu/uploads/nppm/CanaleSwain.80.pdf

Conrad, R. M. (2009). Assessing collaborative learning. In P. Rogers et al. (Eds.), *Encyclopedia of Distance Learning* (pp.89-93), PA: Information Science Reference.

Corbel, C. (2007). Teachers' Roles in the Global Hypermedia Environment, *International Handbook of English Language Teaching, 15*, 1113-1124.

Deci, E., & Ryan, R. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior.* New York: Plenum Press.

Ellis, R., Tanaka, Y., & Yamazaki, A. (1994). Classroom interaction, comprehension, and the acquisition of L2 word meanings. *Language Learning 44 (3)*, 449-491.

Gardner, R. C. (1968). Attitudes and Motivation. Their Role in Second-Language Acquisition, *TESOL Quarterly, 2 (3)*, 141-150.

Gardner, R. C., & MacIntyre, P. D. (1991) An Instrumental Motivation in Language Study: Who Says It Isn't Effective?, *Studies in Second Language Acquisition, 13, (1)*, 57-72.

Gass, S. (2003). Input and interaction. In C. J. Doughty and M. H. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition*, (pp.224-255). UK: Blackwell.

Gery, G. (1991). *Electronic Performance Support Systems: How and Why to Remake the Workplace through the* Strategic *Application of Technology*. Boston: Weingarten Publications.

Hymes, D. (1967), Models of the Interaction of Language and Social Setting. *Journal of Social Issues, 23*, 8-28.

Keller, J. M., & Keller, B. H. (1991). Motivating learners with multimedia instruction. *Proceedings of International Conference on Multi-media in Education and Training '91*, 313-316.

Keller J.M. (1983) Motivation design of instruction. In C. M. Reigeluth (Eds.), *Instructional-design theories and models: An overview of their current status.* NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Keller, J. M. (2008). First principles of motivation to learn and e3-learning. *Distance Education, 29 (2)*, 175-185.

Keller, J. M. (2010). *Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach.* Springer US.

Kern, R. & Warschauer, M. (2000) Theory and practice of network-based language teaching. In Warschauer, M. & Kern, R. (Eds.) *Network-based language teaching: Concepts and practice (pp.*1-19*)*. New York: Cambridge University Press.

Khan, B. H. (2005). Managing *e-learning strategies*. Hershey: Information Science Publishing.

Long, M. H. (1981). Input, interaction, and second-language acquisition, Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.

Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics, 4*, 126-141.

Long, M. H. (1985). Input and second language acquisition theory. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 377-393). MA: Newbury.

Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 413-468). CA: Academic Press.

Long, M. H., Inagaki, S, & Ortega, L. (1998). The role of implicit negative feedback in SLA: Models and recasts in Japanese and Spanish. *The Modern Language Journal, 82, iii*, 357-371.

Long, M. H., & Porter, P. (1985). Group work, interlanguage talk, and second language acquisition. *TESOL Quarterly, 19,* 207-228.

Lukmani, Y. (1972). Motivation to learn and language proficiency, *Language Learning 22*, 261-73.

Nunan, D. (1991) Communicative tasks and the language curriculum. *TESOL Quarterly 25 (2)*, 279-295.

Peter and Trudy Johnson-Lenz. (1989) Humanizing Hyperspace, *The Ecology of Media*, 52. doi: http://www.context.org/ICLIB/IC23/JnsnLenz.htm

Skehan, P. (1989) *Individual differences in second language learning*. London: Edward Arnold.

Warschauer, M. (1996) Computer-assisted language learning: An introduction. In Fotos, S. (Eds.) *Multimedia Language Teaching* (pp.3-20). Tokyo: Logos.

Warschauer, M. & Kern, R. (2000). *Networked Language Teaching: Concepts and Practice*. Cambridge University Press

Warschauer, M. & Meskill, C. (2000) Technology and Second Language Teaching and Learning. In J. Rosenthal (Eds.) *Handbook of Undergraduate Second Language*

Education. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Warschauer, M. (2007) Technology and Writing, In Cummins, Jim & Davison, Chris (Eds.) *International Handbook of English Language Teaching*, *15*, (pp.907-917). Springer US.

William W. L., & Diana L. O. (2004) *Multimedia-based Instructional Design: Computer-Based Training; Web-Based Training; Distance Broadcast Training; Performance-Based Solutions (Second Edition)*, CA: Pfeiffer.

张普，谢天蔚，徐娟（主编）(2004)《数字化对外汉语教学理论与方法研究》，第四届中文电化教学国际研讨会论文集，北京：清华大学出版社.

张普，谢天蔚，蔺荪，谢家浩，方称宇，徐娟（主编）(2006)《数字化对外汉语教学的研究与应用》，第五届中文电化教学国际研讨会论文集，北京：语文出版社.

张普，徐娟，甘瑞瑗（主编）(2008)《数字化汉语教学进展与深化》，第六届中文电化教学国际研讨会论文集，北京：清华大学出版社.

张普，宋继华，徐娟（主编）(2010)《数字化汉语教学实践与反思》，第七届中文电化教学国际研讨会论文集，北京：清华大学出版社.

アイティーブースト(2004)『はじめての Fedora Core2 Linux サーバ構築編』，東京:秀和システム.

青山学院大学総合研究所 AML 2 プロジェクト(著)玉木欽也，松田岳士，小酒井正和(編)(2003)『e ラーニング実践法―サイバーアライアンスの世界』東京:オーム社

安部悟，吉川剛(2005)「現代中国学部における中国語 CAI の取り組み」，愛知大学語学教育研究室紀要『言語と文化』第 12 号, 79-96.

石田武士(2009)『Magic3 でつくる!最強の CMS サイト』東京:ソーテック社.

伊藤敏明，植村利英子，橋本慎一，平谷泰美(2007)「第二言語習得の認知プロセスに基づいた内容中心教授法によるコミュニケーション能力の育成」,川崎市総合教育センター『研究紀要』第 21 号, 99-114. doi: www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou21/

今井むつみ，野島久雄(2003)『人が学ぶということ―認知学習論からの視点』東京:北樹出版.

岩井千秋(2000)『第二言語使用におけるコミュニケーション方略』，広島:溪水社.

岡本敏雄，伊東幸宏，家本修，坂元昴偏(2006)『ICT 活用教育』滋賀:海青社.

小川利康(1999)「中国語教育における CALL の可能性」，早稲田大学商学部商学同攻会『文化論集』第 14 号, 311-328.

小川利康(2000)「中国語中級教育における CALL 実践と課題」，MNC 公開シンポジウム「メディアと大学教育」 doi: http://www.waseda.jp/mnc/RESEARCH/mnc_comm/proceedings/0011/10/sample/call0129.htm

小川利康(2001)「電子掲示板を活用した授業 ―協働作業のなかで学ぶ―」，漢字文献情報処理研究会『漢字文献情報処理研究』第二号, 81-90.

片岡昇(2006)「中国語教育におけるサイバーレクチャの実施」,『メディア教育研究』第 3 巻，第 1 号, 27-34.

菅民郎(1998)『すべてわかるアンケートデータの分析』東京:現代数学社.

キャロライン・V. ギップス(著)，鈴木秀幸(訳)(2001)『新しい評価を求めて―テスト教育の終焉』東京:論創社.

子安増生，山田冨美雄編著(1994)『ニューメディア時代の子どもたち―テレビ・テレビゲーム・コンピュータとのつきあい方―』,(pp.176-196) 東京：有斐閣教育選書.
佐伯胖（1999)『マルチメディアと教育―知識と情報、学びと教え』東京：太郎次郎社.
酒井隆（2001)『アンケート調査の進め方』東京：日本経済新聞社.

境一三（2008)「豊かな学びの場としての LMS―ドイツ語学習における『振り返り』と『気づき』を例に―」，吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典（編著)，CIEC 外国語教育研究部会（著)，『ICT を活用した外国語教育』(pp.139-157)，東京：東京電機大学出版局
重松淳，伴野崇生，曾怡華，黄佳瑩（2006)「遠隔会議を取り入れた外国語教育カリキュラムの問題点 ―ヒューマンセキュリティへの基盤研究―」，慶應義塾大学『総合政策学ワーキングペーパーシリーズ』, No.99, 1-53.
JACET SLA 研究会（2000)『SLA 研究と外国語教育 文献紹介』東京：リーベル出版.
JACET SLA 研究会（2005)『文献からみる第二言語習得研究』東京：開拓社.
ジョン・ケラー（著)，鈴木克明（訳)（2010)『学習意欲をデザインする：ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』 東京：北大路書房.
鈴木克明（1995)「『魅力ある教材』設計・開発の枠組みについて―ARCS 動機づけモデルを中心に―」,『教育メディア研究』, 1 (1), 50-61.
鈴木克明（2010)「ARCSモデルからARCS－Vモデルへの拡張」,『第 17 回日本教育メディア学会年次大会発表論文集』, 115-116.
砂岡和子，保坂敏子，Yu Jingsong，河内彩香，山口真紀，藤田真一(2007)「フィラーに対する中国語と日本語の印象評価比較～ クロスカルチャー・ミス・コミュニケーションコーパスの開発～」『電子情報通信学会技術研究報告』(思考と言語)Vol.107, No.323, 20-24.
砂岡和子（2009)『ミス・コミュニケーション学習支援プログラムの開発』,平成 19 年～平成 21 年度科学研究費補助金 基盤研究（B)（課題番号：19320087) 早稲田大学政治経済学術院，doi: http://www.f.waseda.jp/ksunaoka/misscommunication/
ゾルタン ドルニェイ（著) 八島 智子，竹内 理（訳)（2006)『外国語教育学のための質問紙調査入門―作成・実施・データ処理』東京：松柏社.
大学英語教育学会授業学研究委員会（2007)『高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に』東京：松柏社.
竹内理（2008)『CALL 授業の展開 その可能性を拡げるために』東京：松柏社
多田孝志（1997)『学校における国際理解教育―グローバルマインドを育てる』東京：東洋館出版社.
田邉鉄，清原文代（2009)「「学び合い」を促す e-Learning 教材」，CIEC 会機関紙『コンピュータ＆エデュケーション』, Vol.27, 24-27.
永岡慶三他（2008)『国際間の 3 大学以上を結ぶ多数地点間での同時双方向遠隔授業の実証』, 平成 17 年～平成 19 年度 科学研究経費補助金 基盤研究(B)（課題番号：17300275) 研究成果報告書，早稲田大学人間科学学術院
長瀬荘一（2003)『絶対評価への挑戦 2 関心・意欲・態度(情意的領域)の絶対評価』，東京：明治図書出版.

西堀ゆり(2005)「国際ブロードバンド回線が実現する遠隔協調学習 ― アラスカ大学＝北海道大学間の異文化コミュニケーション授業 ―」, 永岡慶三(編)『国際ブロードバンド回線による遠隔授業の単位互換実効性の検証実験』, 63-79*.

西堀ゆり(2005)「グローバル・インターラクションと CALL 授業 ―協調学習の概念をめぐって―」, 河合靖(編)『インターラクションのある CALL 授業』第 1 章, 北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 59, 1-35*.

西堀ゆり(2005)『インターネットと国際高速回線で結ぶ遠隔協調学習の教授法研究―「国境のない教室の歩み」―』北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 57.

西堀ゆり, 永岡慶三, 西永望, 田中健二, 山本裕一, 佐藤晴彦, 原田雅博, Ruimin Shen, Jinjin Feng, Myunghee Ju Kang(2006)「異文化コミュニケーション授業の新展開 ― 日韓中 3 大学接続による同時双方向遠隔授業 ―」,『電子情報通信学会技術研究報告』, 25-30*.

西堀 ゆり, 山本 裕一, 佐藤 晴彦(2006)「国際間の複数大学を結ぶ多地点同時双方向遠隔授業における協調場の構築」,『平成 18 年度情報教育研究集会講演論文集』, 809-812*.

西堀ゆり(2007)第 6 章「情報技能と指導」高梨庸雄・高橋正夫(著)『新・英語教育学概論』, 91-104, 東京:金星堂.

西堀 ゆり, 永岡慶三, 山本 裕一, 赤倉貴子, 佐藤晴彦(2007)「国際間の多地点同時接続による遠隔教育の課題」,『平成 19 年度情報教育研究集会講演論文集』, 145-148*.

西堀 ゆり, 赤倉貴子, 永岡 慶三, 西永望, 山本 裕一, 佐藤 晴彦, 東本 崇仁 (2008)「国際間の多地点同時接続授業に対する学生の反応」,『平成 20 年度情報教育研究集会講演論文集』, 243-246*.

日本イーラーニングコンソシアム(編)(2008)『e ラーニング白書〈2008/2009 年版〉』, 東京:東京電機大学出版局.

日本教育工学会(2000)『教育工学事典』東京:実教出版.

橋本 重治(著)応用教育研究所(編)(2003)『教育評価法概説』(改訂版), 東京:図書文化社.

Mark Warshauer, Heidi Shetzer, Christine Meloni(著)古谷千里ほか(訳)(2001)『インターネット時代の英語教育―世界のサイトとその実践例』東京:ピアソンエデュケーション.

Mark J. Rosenberg(著)中野広道(訳)『E ラーニング戦略』東京:ソフトバンククリエイティブ.

Noam Chomsky(著)川本 茂雄(訳)(1990)『言語と精神(現代思想選 2)』東京:河出書房新社.

林俊成(2008)「日中遠隔協働授業における語学教育の実施とその評価」,『東京外国語大学論集』(Area and Culture Studies) no.76, 191-212.

堀洋道(監修), 山本真理子(編)『心理測定尺度集〈1〉―人間の内面を探る"自己・個人内過程"』東京:サイエンス社.

峯石緑(2002)『大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究』広島:渓水社.

宮本節子(2001)『マルチメディア語学学習教材の開発と評価―理論と実証と』, 広島:渓水社.

村野井仁(2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』東京:大修館書店.

村野井仁, 千葉 元信, 畑中 孝実(2003)『実践的英語科教育法―総合的コミュニケーション能力を育てる指導』東京:成美堂.

山内豊(2001)『IT 時代のマルチメディア英語授業入門―CD-ROM からインターネットまで』東京:研究社.
吉田 晴世, 上村 隆一, 野澤 和典, 松田 憲(著), CIEC 外国語教育研究部会(編)(2008)『ICT を活用した外国語教育』東京:東京電機大学出版局.

【参考サイト及び URL】

小川利康(1998)「中国語教育に CALL は必要か？」中国語 CAI 研究会 立命館大学(BKC キャンパス) http://www.f.waseda.jp/ogawat/works/call.htm
関西大学「教えと学びのショーケース」 http://www.sc.kansai-u.ac.jp/
清原文代「ネットで get! ピンイン聞き分けトレーニング」http://pinyin-training.cocolog-nifty.com/
国土交通省 観光庁 http://www.mlit.go.jp/kankocho/
三枝裕美「Online Chinese パンダと学ぶ中国語」(長崎外国語大学 外国語学部 国際コミュニケーション学科) http://saigusa.com/
首相官邸 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部 http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/
砂岡和子「现代汉语述补结构用法数据库 (An Online Database on Verb-Resultative Construction in Contemporary Chinese)」 http://ccl.pku.edu.cn/vc/
田邉鉄「パンダの中国語学習ノート」 http://mulan.cims.hokudai.ac.jp/panda/
日本ナレッジ・マネジメント学会 http://www.kmsj.org/
放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター http://www.code.ouj.ac.jp/
文部科学省 http://www.mext.go.jp/